089460-000-6

特10-797

雙蝶記　（吾妻餘五郎）

山東　京伝／著

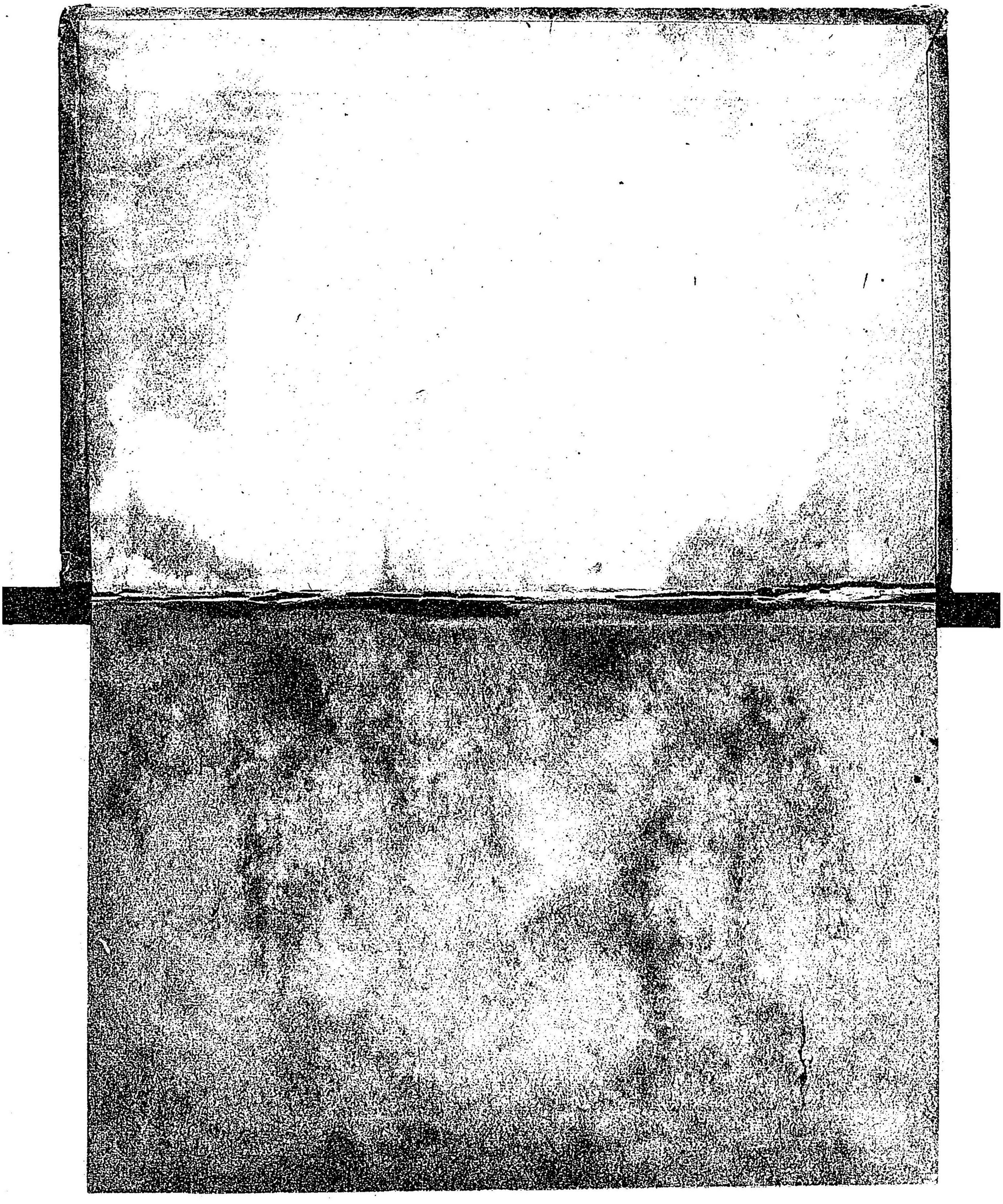
M27

DBM-1169

164
345

雙蝶記

吾妻餘五郎 東傳著



聖蝶記自序

此物語稿をいりて人に叙を乞んと思ふにこれを漢文に述ば之乎者也の置所酢の蒟蒻のと面前から先ぐりをして自ら緒を解と思にこる倒なり書得所が餅屋の餅に非ず素人造への柏餅皮が厚くて味なしと云むか是を和文に記さんとするにしの字一ッを論ずるさへ過去未来現在なご、三世因果の業を晒し諺の文を浄瑠璃節に語るやうにて傍腹いたき事多しと僕が不文を識ならん蟹は甲に似せて穴うをさきと云ふ字を綴にして此草紙を婿を揉ねる嬢に譬て見るに絵は則顔容なり作は則意気なり板木彫ゝ紅白粉ひなり摺仕立は嬢人衣裳なり板元は親里なり讀て下さる御方様ゝ婿君なり貸本屋様はゝ媒人なりさて顔容に譬ふる絵と歌川豊國の筆なればゝ申去分なし板木彫の小刀にて紅白粉の化粧もよくゝ摺仕立の嬢人衣裳も不足なく板元の親里も欲を離れて睦ゝ安喜の嫁なれど肝要の意気に譬ふる作が愚にて面も田舎言の其うちに都言を横ぐはへに云ませて聞ぐるしきこと多ければ讀でくだされ婿君の気に入ぬ強なるべき所を貸本屋様方のゝ娘ゝ口にてケ様〳〵の娘が御ム顔容は云分なきゝ操はずこし愚な生れなれど共かいりは大事にして律義一遍所帯形気の娘でござる先ゞ金をして見給へと指を破ひ悪を好ど取なして勧めこんで下をよば縁ぞ係き此娘もよき婿君多くべし野猪も伏猪と云ば僕しく馬鹿も結構人と云ば聞によし是則力とたのを奉るゝ媒人の貸本屋様の云なしに依所なり然則板元の親里の喜び多く祀儀の小謡千秋万年の千緒の玉をこためて追掛の御注文冊〳〵の殿を繰しむに至るべし斯思ふ所を有様しるして以て是を序とし物前に残り本の返るといふは忌詞大福帳文運長久まそといふ

文化十年癸酉春二月　醒醒齋京傳識

鳥毛川の鴉養閑作
村時雨
鴉舞ふて来る那

○浪人朝尾智堂左衛門
鎌倉蛸
波

双蝶記總目錄

○夏草やつわものどもの夢路の落八　○夢路の落八　○亡者の計略
○蛇くふと聞ばまれそろし　○老女の懺悔　○身賣の愁歎
○五月雨やある夜ひそかに　○遊傾の曲者　○壯丹の唾猫
○木枯の果はありけり　○記念の竹刀　○我雪とおもへばかろし
○藪屑に花を見拾て　○胡蝶の狂亂　○白露や無分別なる
○紫の蜘もありけり　○池邊の盜人　○窓鉦のうき世をはなす
○きられたる夢はまことか　○茂林の鬪打　○蟋蟀まくらも床も
○宿かして名をなのらする　○化石の鍋蓋　○面白ふて噸てかなしき
○鶴をりて日こそれはさに　○和睦の酒宴　○鶺鴒の嗅切

通計十七回

總目錄終

寄10
797

雙蝶記　一

○夏草や兵どもの夢路の落八

往時元弘三年夏草の露と消にし夢の跡憂世語を殘したれ相撲入道宗鑒か一男相撲次郎時行は一家亡し後は天高しとやらんそも跼地廣しといへども一身をおくに安きところもなかりしかば信濃國に隱遁し深山幽谷のうちに蟄して再天日を見る代もがなと時節を待て居たりしが頃日南北兩朝に別れ給ふと聞てひそかに使者を吉野の皇居にまゐらせて奏せけるは亡親高時臣たる道を辨へずしてつひに滅亡を勅勘の下に得たりといへども天誅の理にあたるゆゑを存ずるに依て時行一塵も君を恨み奉る處を存じはず天盛あきらかに下情を照したまひ枉て勅免をかうふら玄めたまはゝ宜官軍の義戰を扶け皇統の大化をあふぎ奉らんと委細に奏聞したりければ主上これを聞し召れ不覺の父を誅し忠功の子を召仕給ふこと尤なきにしもあらず罰其罪にあたり賞其功に感ずれば聖政の最たりとて則恩免の綸旨の文を日月打たる錦の御旗の裏にまるしてぞたまはりけるかくて延文四年二月のはじめ時行信濃國笹形の城にたてこもり此彼に身をひそめ居たる平家の餘類を催促したりけるに去る年箱根の水飲峠の合戰に父を打れ子を打れて仇を惡む兵等宿望たちまちひらけぬと喜ひ日をかたらひて馳集る　兵凡七千餘騎とぞこえければ鎌倉に急を告る早馬磯打波のひまなきが如く礎打手のしげきに似たりこれによりて鎌倉の管領諸將に對して軍略いかにと議せられけるにこれより遥寄玄て其不意を攻飢氣を挫き荒肝を拔におかしと軍議已に決し月影ケ谷の判官照影を大將として鎌倉勢一万三千余騎日わらず信濃國笹形に馳着戰陣

前にすゝんで蹄をそろへ勇騎後に隊して轡をひかへ軍旗を飜し金鼓をならして聞を揺とゞ
りくりける城中には敵不意の逆寄に軍慮をこら志術計いまだ十分にと、のはずといへども累年
積して義心金鉄の如き兵どもなれは更に臆する氣色もなく鬨に應ト て進退度を失はず矧矢き
叫びて攻戰ひ射らかふる音よりも猶しげく打合太刀の鍔音はそらに應
る山彦の鳴やむ隙もなかりけり爰に故相摸入道の家臣に大佛九郎貞直といふものあり前年敵を
あざむきて一旦鎌倉をのかれ出相摸次郎をもりそだて、始終はなれず今はすでに年五十歳に過
ぬれども力量武藝ます〳〵減せずなほ當城にありけるが此とき唯一騎城を遠くはなれて敵陣に
馬をす、矢鎌倉勢の總大將月影个谷判官をにらみ打にせばやとこゝろざしけるは大膽不敵のふ
るまひなり敵兵にまぎればやと兜をば著じ白綾の鉢巻して乱髪を顔に颯と振かけ白糸威の鎧の
上に雲鶴の地紋ある丹地の錦の陣羽織を着し青銑の大口をはき貝鏑の太刀に豹の皮の尻鞘かけ
たる金作の小太刀を帯副大長刀を右の小脇に引そばめて白瓦毛なる馬の太逞に螺鈿の鞍を
僅燃立ばかりなる厚總の靱をかけてぞ乗たりけるかくて鎌倉勢のむらがる中へまぎれいり東
西をはらひ南北へ追まはし志黒煙を立て切てまはるに寄手大勢なりといへども唯一騎に切立られ
て四方へ颯と引けるがさすが大將のはとりへはちかづくとあたはざればむなしくおのれも知具
麻川のこなたまで引退き手綱かひくりツ、早咲の藤波のかゝれる松陰に汗馬をよせて息をやす
め乱れたる髪を押あげて城の方をかへりみるにむかふの山間に白旗赤旗いろ〳〵の旗春風にひ
るがへりて雲より落る花の波霞にまがひてすさまじく具鎧太鼓鯢波とかいまひすく聞へけり扨
は敵城邊ちかく寄たりとおぼしたりあな氣づかはしとれもふをりしも雑兵二人貞直が妻女更科
といふにつきそひ此ところまで落來りていひけるは敵兵一の木戸を打やぶりて城中へ攻入いも

志御懐胎の内室をこれまで御供いたしゝといへば更級もいく妾懐胎の身にあらずは女なが
らも敵にむかひて一方をふせぐべきにをりわしく産月なれば心は矢猛にはやりはへれど身のは
たらき自由ならず彼等に扶られてれめ〳〵逃足をいだせーとくちをしくいふ大佛九郎これ
を聞て打驚きさてはいよ〳〵味方の安危こゝろもとなし我はこれより城中へひきかへ志今一軍
して敵兵をれひかへすべしといひすて、馬をす、めんとしたるに更級は此とき急に産のけつき
ければ彼方も氣づかひ此方もさすがに見そてがたく馬をと、めて飛くだりけるが此處はすべて
墓原にて辻堂一つあるのみなれば雑兵どもに下知なして更級を辻堂にたすけもかしめ堂中の額
をあふぎ見るに子安地藏尊とかきつけあれば是産所には幸ひの表事とよろこび地藏菩薩十種
の福を得せしめ給ふうちに一者女人泰産と地藏經にもあれば佛前を穢ともさまでにくみ玉ふま
じとて堂前に楯の板を敷ならへ柴山子のふる簑をとり來らして其上にしきかさ絲て更級をそら
志め鰐口の鈕の緒を産綱となしてとりつかしめ雑兵を腰抱としれのれもかたはらにありて介抱
するに一人の雑兵うろたへまどひそはいそがはしき事のいできしぞ胞衣桶はいづくにある鰹節
はいかに産湯はいづくにて煖すべきなどいひつ、馬盥をか、へてあち走りこち走るを見て貞直
い氣をいらち愚なる奴かな人家に遠き野邊といひひかゝる戰場にていかでか、ある自由のたるべ
きやとく川水を汲來れと呵てれひやり産婦にそひていたすら力をつけるが即鐘太鼓の音矢叫
軍呼の聲知具麻川の張る音にひゞきあひていとすさまじく聞へければ更級はもづ心なくくとか
くなやみて産かねけりかゝるをりしも郎等魚淵剣太といふ者汗もしとゝに走來りてひざまづき
御註進つかまつると呼はりければ貞直いこれをき、ていそがはしく様子はいかにとくいへと氣
をせけば剣太い忌もつきあへずされば山敵兵すでに城中に攻いりいへども味方の兵命を惜む

ず二の木戸にてふせき戰ひいとまもをはらざるうちにこなたの産婦息もたゆげにいと
なかましき体なれば貞直はかなたを聞さして産婦の背中を撫さすり折もをり時もときとて此産
氣催生女だにさくいへぬ戰場の火急の節さばのり心弱ては産得まじれん身い常の女に似ず日來
雄々しき心をもちて男まさりの女なるに四十歳すぎてのうゑ産といひながらなどてさばかり
心よわきぞ自よく氣をはげましてとく産といひて介抱しッ、かなたにむかひシテ其あとはい
のに〳〵と問かくれば劍太は汗をのごひッ、またいひけるい今まうせし如くにて雌雄はまだ決
せずへいども味方は必死をきはめて戰ひ引鐘を聞ては怒りす、む太鼓をよろこびて勢曾てたゆ
みまうさず敵は遠路を押來りて勢はど〳〵つかれいへば旗色あしく金鼓の聲も濁りて聞へいと
勢ひこみて告るにぞ貞直はやう〳〵色をなはしてよろこべば劍太いく掴者い今度走かへりて
樣子を見とゞけ再又御註進つかまつらんといひそて、飛がことくに走去ぬ時に又陣鐘太鼓を乱
調に打なら去て吸とあげたる鯨波天地もくづるゝばかりなれば産婦はこれに氣のぼりしてあな
やと叫ふ勢ひに子がへりして産れと云しさりに産聲をあけしかも男子にてありければ貞直は味
方の勝利の註進を聞うへに此安産あれば轉よろこびにたへす雜兵に命じ陣笠を盥にかへ川水を
くましめて生子の身をきよめ襁褓にかもべき物ざになければ陣羽織をぬぎてこれにつゝみ幸ひ
これは雲鶴錦此兒のれいさき千歳の鶴の羽をのし且青雲の志をれこせしと心の裏にいはひッ
、抱きあげて雜兵等にむかひかゝる火急の時節なればかう〳〵せよと命ずれば二人の雜兵はこ
ろにいへといらへ辻堂の片扉を引はなして頂級をのせあとをきをかゝげて山越にわち行ぬ扨貞
直れもひけるは此所にありともし敵にかこまれなど足場あしければ便よからず且廣場に出て城
中の樣子味方の安危をも聞へしと辻堂の鉦の緒をひきちぎりて生子を我身にひしとくゝりつけ

馬引よせてひらりと乘長刀を莖短に拳とりてれめきをけふ聲すさまじくきこゆ生子はこれにれびえてしきりに泣はたがよ〳〵犬の子と背をた、きゆり上ッ、駒のかしらをひきかへして西の方へゆかんとするにかなたにも敵充滿ぎて鯨波をどとあぐるよぞ前後の道をふさがれていかにそべきと行まよひなはも泣子をなぐさみッ、ぎはしたゆたふをりしもあれ東西より敵兵颯と寄來れば長刀を打ふりて三方へ追捲り八面に斬てまはり眞額立制車斬或い母衣付腰車袈裟にかけては左右にさばかせ双膝なぎていのつけにそらせ抱し生子をかばふにぞ十分にはたらきがたしといへども力量武藝普通ならす三歳の幼主阿斗を抱て長坂玻に戰し趙雲にもをさ〳〵れとらぬ其骨柄神變不思議のはたらきに敵ぎかねたる木葉武者四方にはら〳〵散失たり貞直はなはも生子をゆりあげッ、息を休みで居たる處に以前の郎等劍太裸身に雜鎧を着城の水吐の穴をくゞり出しと見えて身上ぬれて雫をたらしッ、走來り陣笠を地上にかふりと投捨て手をつかへ又御註進いと告るにぞ貞直はこゝろならず樣子はいかにとたつねれば劍太一息ついて言けるは味方の兵必死の戰に敵の人馬は大につかれて已に落足になりたる處にれもひかけず月影ケ谷判官の家臣山吹庄司雪森といふ者荒手の兵數千騎を
したがへて押來り城の後にたちまわりて矢を射ると雨の如く精兵あまた面もふらず掛やぶりいへばさすがに猛き大將も軍零盡給ひて後をはらはんとし給へば前の敵是をかこまんとすゝみよ
り前にむかはんと云給へば荒手の兵後に打かゝり變化自在の術尽給ひて味方のこらず打死し
御大將も御腹召されいとしをれかへりて告ければ貞直はこれを聞て大にれどろき喜びの色忽變じて愁眉を顰何御主君いはや御自殺ありしとか智勇万人にすぐれ給ふ御大將十に八九も勝べき軍に甲斐なく打負たまふことまつたく南朝の王威れとろへさせ給ひ聖軍微にならせたまふかも

えなりあなくちをしや殘念やと或ゐ怒り或は悲しみ牙を咬拳を握て落涙し主君の命とはいひながら我一騎遠く城をいなれ總大將を打んとして打も得ず主君御自殺の場にあらざるゐ不忠の至なり已に大將うせさせ給ふうへは我一人生とゞまりて何かせん此ところにていさぎよく打死して死出路の御供いたすべしさりながら今生れたる此孩兒を此儘こゝに捨おきて敵の馬の蹄にかけ殺させんも不便なれば汝は此子を抱きて山越に落行更級があとをおひて渡しくれよ此子成長の後父の遺物と見るべきため此一品をそもべしとるは身摺といふ名香なり是乃揚貴妃が椅子の木のなごりにて常に貴妃が身をよせてねのづから摺たる木なるゆゑに身摺とは名づけたり此子つゝがなく成長なさば語りきのせよといふ折しも友におくれたる歸雁雲井にねとづれけれゞ矢立の筆を染て

またこんと願の雁の別路は待間ひさしき百年の後冥途のみたのみなり今生れ出て今わかるゝとはよゝ〳〵薄き親子の縁なりといへど父子再會と待間ひさしといふ一首の歌をかの香包の裏にかきつけ親子いも子によわりッゝ目をもる涙ばら〳〵と落かゝれば矢並つくらふ釼のうへに露たば去る如くなりかくてのの香包を孩子にそへて陣羽織に包たる儘劍太に渡せは劍太はこれをうけ取て悲歎の涙せきあへず主人のわかれをしてけるがすでに苫形落城せしと見えて黒烟たちのぼり烈々たる兵火天を焦あまたの敵兵をい〳〵れうと凱哥をあぐる聲百連の雷の一度にねつ如くひゝきわたりけれは貞直はこれを見て念の落涙なほとゞめかねしか劍太にむかひ汝此處に猶豫してもし敵兵に山道をふさかれなど其子を扶て行とあたふへからず名殘は盡ずとく〳〵行といそがすれば劍太は是非なく涙をのごひ山路をこして落行ぬ貞直は嬰子をねとしやつて今ゐ心安しと

で〳〵花〳〵しき軍して敵兵に目とさせさはやかに打死せばやとねもふにぞ日來の勇氣百倍して敵ある方へ馳ゆかんとしたる折しもむかひの方の森のうちより弦音たかく漂とひゝいて一節の箭飛來りかたはらなる松の木にはつしと立ぬ貞直これを見て念の落涙なほとゞめかねしか劍太にむかひ汝此處に猶豫してもし敵兵に山道をふさかれなど其子を扶て行とあたふへからず名殘は盡ずとく〳〵行といそがすれば劍太は是非なく涙をのごひ山路をこして落行ぬ貞直は嬰子をねとしやつて今ゐ心安しと

馬をよせて矢をぬきとり結ひつけたる文をひらき讀をはりて打うなづき卷ねさめんとしたりけるに忽一陣の颶颯と吹來り坂をすりて砂を飛しかの文を虛空はるかに吹とりければ其あとをしたひ行んとしたるをりしも鎌倉勢又鯨波を動とつくりて四方より馳來り貞直を取かこみて我討とらんと競けり貞直これを見て呵々と打わらひ命しらずの葉武者ども我を打んと寄來れは夏の虫焰を惹てみつから身を燒に異ならずはで〳〵汝等か體にのりと宿せる魂どもを我此大刀の下に追出して冥途へすゑかへさすへし手なみを見よやとよばゝりッゝ大長刀をひら免かしてむらがる敵の眞中へわつて入蜘手結菓十文字縱橫无盡にかけやぶり火花を散して戰にぞ駒の足なみぞう〳〵とゞいろき鎧のかな物から〳〵となりひゞき火雷神のあれたるもかくやといふ勢にて組んとちかつく兵の鎧の揚卷かいつかんで弓杖五杖ばかり投わたせは其人礫にあたりたる兵等は四五人つれて前なる川中へまつをかさまにぞれち入ける敵はなは横合より矢ぶすまをつくりて散〳〵に射たりけるが貞直はこれにも屈せす射かくる矢を幾筋となく切落し逃敵をねひかけてはるかかなたへ馳ゆき去がをりしも川霧立へだて、しばらく其姿見えすや、ありて山風霧を吹はらひ貞直が又こなさへ來るありさまと見るに馬も乘たふしけるにや步立になりて長刀を杖につきよろめく足も痛手のよわり身上にあまた矢を折かけて枯野に殘る冬草の風に臥に異ならず全身血にそまりて白糸威もたちまちに緋威と變じ鎧の袖の三の板を切れとぎれ草摺の横縫皆つき切れて威し毛ばかりぞ續さける今はこれまでとやれもひけん跡をつけさたり

て組つかんとせし敵二人を左右の小脇にかいはさんで堤のうへにかけのぼり汝等死出の供せよとよばゝりッゝ、知具賦川の深淵の渦巻うちにをとり入ば白浪ばつと飛散てをゝむべし底の水屑となり果つゝ、唯張る水の音のみぞ殘りける嗚呼此日はいかなる日がやそなはち是延文四年三月十五日の事なりとぞ

○むざんやな兜の下の亡者の計略

さるほどに魚淵剣太は生子を抱き山道をさして落もきしが鎌倉勢はやくこゝにも立ませはりて道をふさき落人をうちとらんとかまへたる樣子なればせんすべなく騒ぎさまじく聞ゆて近〳〵と寄きたる樣子なれば落もかんとおもたるにかなたにも敵兵のおめく聲の所に立もどり東の道より心は矢猛にはやれども双拳四手に敵しかたく殊に生子を抱きたればもし此所まて敵にとりかこまれなばをめ〳〵と打るべし一旦身をかくし敵の退くを待てのがれ行ばやと思ひかの辻堂のうちに入て見まはしけるに軒端かたふき壁くづれたる古堂なれば雨風もふせぎかたき体にて本尊は大なる木佛の地藏なるが口目は苔なめらかにして生出たり石の佛具はありながら香華を供養するとも見へす塵うづたかくつもり木の葉まじはりて狐兎の足あとを印し梁には燕子巣をいとなみ蜘蛛網をむすべりいとせまき堂中なれば身を隠すべき所なくいかにすべきと思ひけるに桶一ッありてふるき卓圍をかはへりこれ幸に人の氣のつかぬよきかくれ所なりとおもひ繩をとき蓋をとり死人を引いだして佛座の下の空なる所におしこみおきおのれい生子を抱きながら桶のうちに身をちゞめて卓圍をひきかつぎ息をこらして居たりけりかゝるをりしも百姓とおぼしき者四五人道心坊を前に立或い卒堵婆を持あるひい櫂の枝を提念珠をつまぐるもありて此堂中

に入かの棺桶をかゝけ出んとして繩のとけあるを敵に見いだされしと思ひたがへ運命のつきたる所とおもひつゝ桶のうちよりをどりいで片手に生子を抱き片手には太刀を抜よらば切んと身がまへたり道心はこれを見て且さきに魂をうせなひ亡者がはやく幽靈になりて出しと思へたがへあつとさけびてのけさまに倒たり百姓どもは皆將棊だふさに尻餅つきてうちわなゝき人ごゝ敵兵にいわらで野邊おくりする家等をおぼしければうべなり我は子細ありて此桶のうちにかくれ居たりとゝふ百姓どもはこれを聞てやうやく人ごゝろつき俄に強くなりてさくり手レッゝいふやう汝何等の者なれば他の棺桶にとはりもなくかくれ居て我〳〵にいたく肝をつふさせけるぞ亡者をばいかにせしぞと腹立げにいへば剣太いはく亡者いかしこに隠れきぬまづ汝等いづくの者ぞといふ百姓ども剣太がありさまをよく〳〵見れば裸身に鎧を着太刀を帯たれば又少しこはげはき言をあらためていふく我〳〵はかしこの山の一ッあなたに住者どもなるが今日此邊に軍あらんとい思ひいはず此桶の亡者い村そゐに住獨身の小百姓にて今朝往生いたせしゆゑ日暮なば此所にて畑となをばやとかりに此堂中に入れきたるに此邊すべて戰場となりて往來なりがたければかゝる亡の山道をふさぎたる軍卒にやうく〳〵とわりをまうして此に來りいとといふ剣太又いふやうかの山のあなたに住者ならば故相模入道殿の御恩をうけたる百姓どもなるべしかくいふ我は故入道殿の家臣大佛九郎貞直が郎等なり此生子は主人九郎殿の子なり九郎殿い今日此所にて打死し玉ふ我い主人の遺言にまのせ此子を抱きて落行んとおもへども四方に敵充満してのがれ行べき道なければせんすべなく此桶のうちに隠居たり汝等故入道殿の御恩を忘れずいかゝ〳〵してくれよとさゝやけば百姓どもも口をそろ

へさてゐた左機にいか代々入道殿の御恩をうけたる我々なればいかでか仰を背くべきといへば剣太喜びやがて佛坐の下より亡者を引出し鎧をぬぎて亡者に着せかう〳〵せよとまた呵は百姓どもは打うなづき堂前にすてありし陣笠と長刀をひろい取てまづ笠を亡者にかぶらせ卒堵婆を横に亡者の両手をくゝりつけて長刀を杖につかせ一人の百姓がいひけるはいかに鋤平これ見よよき武者ぶりにあらずやといへばいかさま鍬助がいふ通り馬子にも衣裳亡者にも鎧とやとても薪に去てしまふ死骸土はせりの身でかりにも一騎の武者となり百姓の身て着てとならぬ鎧を着廐幹の杖にとかはりて長刀を杖につき死花咲せてれ役に立とい仕合せものとつぶやきッ、松の木によせかけておけば剣太は裸身に太刀をわきばさみ生子を抱て桶にすつぱり身をかくす百姓どもは立寄て蓋をれはひ縄からげにして卓圍をかけ棒をとはおてか、ぴいづれば道心坊はさきに立鈴をならし經を讀ッ、山道をのそみて行けるにむかふに犇る鎌倉勢それ落人よとひしめきしがちかく來るをよく〳〵見てみなしづまれ落人にはあらずさきはどとはりをいふて通りたる野邊おくりの百姓どもなり戰場にて棺桶は見るもいまはおとく〳〵行といひて顔を背け道をひらきて通しければ桶の内の剣太はおすましたりとおもひさいはひに生子の泣ざるも神佛の擁護ならめとよろこびぬ百姓どもは足をはやめて過去ぬ嗚呼生子あれば亡者あり生死流轉も一時に修羅の街ゝ騒がしきさて此ときはすでに黄昏のころにてやゝはの暗くなりけるかてなたには餓倉勢馳集て松の木によせかけありし亡者をはるかに見つけたるの大佛九郎がいたらきに手ごりして臆病神のつきたる者どもなればちのくもすゝまず且評議してはひけるはあれ見よ松を小だてにとり長刀を杖につき大手をひろげて立たるは大佛九郎が郎等にうたがひなし彼奴もなみ〳〵ならぬ者のよし立合の勝負にやくなき骨ををらんより遠矢にかけて射殺せといひて矢ぶすまをつくして射かくる矢雨霰の降かゝるにひとしけれども身トろきもせざれば哀や彼奴は立ずくみになりぬいでいで首をとりて手柄にせんずといひて我先とあらろひて組んとちかつく兵の肩へぐにやりとたふるゝ亡者どつこいさせぬと身をひ縒りて唯一打と斬つくるに血さへいでざる死體よろめく亡者は生るが如くかなたにうかゞふ兵の背中にどつきり手はぶら〳〵シャこしやくなりと呼はりッ、とらふる手さきの冷たさにも心のつかぬ臆病武者さつてもついてもひるまぬ亡者うち物業にてかなふまじと大手をひろげて組つけばこなたを加勢に亡者を相手くんづほぐれつるゐい〳〵騨操合ひやうしにばつたりと亡者の陳笠地に落たり二人の武者はいかりてよく〳〵見れば髪を乱して色かはり額に三角の紙をあて經帷子のうへに鎧を着て居たりければ兵等はおきれはて是は正しく亡者なり千剣破の城の藁人形楠もどきの謀計にのせられてあたら矢種をつひやしつるくやしさよといへど跡にひかへし兵どもは哄と笑ひて一同に陣所をさして歸りゆきぬ〇かくて東西の山〳〵に吹立る揚貝の音幽谷響にひゞきてすさまじくれちこちに散在たる兵どもれひ〳〵に集りければ總大將月影个谷判官甲冑美々しく馬上にて歩卒にあまたの明松をとらしめ知具麻川のほとりまで出來りて諸軍の戰功を賞ければ家臣山吹庄司雪森馬をくだりてひざまづき勝軍のよろこびを相兵衛といふ者南朝の帝相摸次郎にたまはりたる日月の御旗をうばひ取て馳來りうや〳〵しくさゝけて主人庄司に渡しけれバ庄司これを判官にたてまつる判官これをれさめてなゝめならず喜び陪臣なれども十字兵衛が大功扱輩なりと賞美のあまり朝烏となづけさる刀を手づからたまわりければ十字兵衛は面目身にあまりあまたゝび抑戴て帯たりけりさて判官は陣所をさして歸りもくをりからの臘月も明松の光りにけをされ馬のはなゝく聲さへいさましくぞれほにけるが

山吹庄司もふた・び馬に打乗十字兵衛等を率て後驅をしたりけるが忽颯と吹おろして夜風につれて一ひらの文臺空よりひらめき落ち庄司が兜の鍬形にぞの、りける是則かの矢ぶみなり山ろしに吹もとされて此所に落たるならん庄司はこれをとり十字兵衛が明松をちかづけ夜露にしめりて讀がたきをからうじて讀をはり何か心に思案して打うなづき行列打せてそ、みゆきぬ

○蛇くふと聞ばおそろ志老女の懺悔

さても時光のすぐること水の流るゝに異ならず金烏玉兎の足いちはやく走り一夢ばかりの間に十歳あまりの星霜を經てはやく應安三年にぞいたりける此とき相州鎌倉の小動といふところに駕籠の塵兵衛といふ貧しき者里をいなれて一つ家を作て住けりこゝは古き歌にもこゆるぎの磯の松風音すけば夕浪千鳥たちさばくなりとよみたる所にて浦ちかき苫家なれば風いとおしくものすごくて涙の音松の風常にかれへざる所なりかれば常に此鎌倉道に駕籠をのゝげいで、往來の旅人をのせわづかの賃錢をとりて朝夕の煙をたつるゆゑに異名をおかよびけるなりかれ今年齢三十七歳に至妻の於破矢といふ年ゝ夫に二ッさりて四十歳にちか志前の夫は樂人にてありし志ゆゑおれのづから舞をならひおぼえたるが今も諸社にやとゝれて神樂をまひこれを活業のたすけとし子は男女二人をやしなひぬ姉は名を小蝶といひて十四才弟は蝶吉といひて十二才なり兄弟ともに貌容うつくしく花よりも清く雪よりも妙にて玲瓏たる一双の珠玉をならべみる如く楊貴妃のをさな立葉平の童姿もかくありつらめとおもはる、ばかりなれば里人等はこれを見て鷲の巢に鷲を育るにひとしなどいひてうらやみぬ親の身は殊更にいつくしみ深くかの竹取の翁が赫奕姫をやしなふ心にてすおたのもしくぞ思ひけるゆゑ弟の蝶吉をば物學びのため霧が澤の月輪寺といふにつかはしおき今は姉の小蝶をのみ家にや

しなひおきぬさて一日塵兵衛つねのとく駕籠をかつ、げて出行稻村が崎の松陰にやすろしをきて人のやとふを待居たりそも此稻村が崎は東北は經路盤曲えて極樂寺の切通につゞき西南は海水渺漫として江之嶋を眺望す月影谷の木枯は梢をゆずりて黃葉を飛志七里濱の高波は礒をみおひて白玉を散せり遠山遙峰平砂曲岸の好景いひ盡くすべうもあらずさて塵兵衛は駕籠のうちより尻かけて往來の旅人にむかひ駕籠にめさずや駕籠ノ〳〵とよび居たるに諸社の宮奴にやとはる、をなりはひとする幣又といふ者烏帽子に白張をひきかけて極樂寺の切通しの方より來つれなし松蔭にわぐみ居て天道ばこりしッ、塵兵衛に向ひいつもノ〳〵よく精が出るをといへば塵兵衛いわく昨日は大雨にて旅人もまれなれば少しの錢も取ず素手ふりてかへりしもを今日い昨日に引へてよき天氣なれば二日振の錢をと思ふて壁かるゝばかりに呼かくれどふり向てみる奴だになきはといへ幣又は打笑ひ昨日星の御堂の鳥下でさえかけた將棊の勝負せよいか「ナ、昨日の駒組れぼにて居る錢がとれいで此方も退屈「ヲ、慰にさえて見やれを幣又はたづさへたる懷中將棊を取出えて盤の紐を芝のうへにおしひらけば塵兵衛もむかひ合たかひにならぶる駒の數礎の小石と具殻は歩の不足とぞ見えにけるならべをはりて塵兵衛いはくもふべのら盤上をとくと見さだめ工夫した相手とさそいちと強もの先手い和主か「イヤさしやれ「まづ飛車さきの歩をつかふとこれを將棊のはじめにてたがひに手數をさーけるが幣又は頬づゑついて盤上をつら〳〵と打なかめ「これ塵兵衛此通双ノの駒をつらねとるは魚鱗鶴翼常蛇の形是乃戰場に敵味方の對陣したるに異ならずいやしき我等が口からまうすいかしこけれと今已に南朝北朝二裂にわかれてれいえまいす此盤上の王に駒の二枚あるに同からずやといへば塵兵衛打うなづきいかさま和主がいふ通二枚の王は南朝北朝角にひとしき名大將足羽の深田に駒をれと志飛車とい

さう〳〵楠どのも湊川にむだ駒を打ちらし武蔵野の手見禁に勝はこりたる頭のとのも佳馬の高上りして家の風の歩の餌食と駒果られそれ見や和主の駒のやうに南朝の王の駒は吉野の奥盤上の片隅にれいしまし一手か二手で捽になろう哀な事といひければ幣又い胡盧イヤさふいやるな北朝方の足利家今は盛にはこれをも此方の手にも駒があるぞこのいづくに名将がかくれあらんもいかられず金将や銀将が王城をいかはど堅固にのいつても歩も成金の時を得て官軍の桂馬の駒をのう打こんだらなんとする「イヤ香車の鎗の野猪武者挂馬の高飛れよはぬ事ところをれれがと打こむ駒「歩でおしらふてせかす駒「なむさんこれはと退駒たがひにいぞみあらそひてなはも手數をさしけるが最前よりかたはらに蔫をかぶりて畳寐して居たる野ぶせりの乞食目を醒して欠去伸し頭を擡ッ、此方の将棊をさしのぞき「おなおやうや油斷したら北朝方も都づめにならふもしれぬといへば堅兵衛はこれをさいてふりかへりそちらが口からいらざる助言だまつて居よとねめつくれば乞食ば口をつぐみて天窓から蔦をすつぱり又臥ぬ将棊は勝負まだつかずなはしばらくさしけるが幣又がかた負色にてはやく〳〵捽べく見にければ幣又は負ばら立駒をかきよせひつ摑て大地へぐわらりと投付たり塵兵衛も目尻引あげ目にかどたてたがひに面をあからめけるよく〳〵れもへば身にも應せぬやくなき詞のあらそひ、心つきこなたが笑へバかなたも笑ひたがひに呵々と笑ひけりかくて幣又は投ちらしたる駒を集て懐にをさむる折しも極楽寺の切通しの方よりぶつさき羽織に野袴いき肩衣を踏分ッ、こゝに來り藤澤の宿まで此駕籠をやとふべしとく〳〵乗よといひけれは塵兵衛いこゝろにいとひッ、相棒の泥太いづくへ行しやとあたりを見まいしけるにいるかむのふの十一人塚のはとりの沙深き所に倒ふして居たりければいそがはしくはしり行てよび起せど熟睡

して目をさまさず旅さふらひは氣をいらち我急の道中といひかゝる日みじかのときなればすこしの間も猶豫ならず相棒が間に合ずは先へゆきて別の駕籠を雇ふべしといひすてゝもかんとするを幣又よりてまづしばらくとひきとゞめこれ塵兵衛あの泥太めいたく醉たる樣子なれば呼起した所が急な役にハ立べからず今のあらそひの中なほりにこちが片棒手つだふて行べければはやく此御方を乘まいらせよといへば塵兵衛ハ喜びさふしてくれゝば都合よしいざめしませと駕籠をとりてやうくさだめ今は何時にやと問ふ塵兵衛日さしをあふぎ見ていまだ赤の下りにもいゝんかといふ幣又もともに此松の影叢にかたふきて見もればいかにも其ころにひはんといへばかのさふらひは打うなづき日みじかのころの旅なればこゝろいそがれしが隨分いそげといひッゝ駕籠に乘うつる前棒は塵兵衛あと棒は幣又が烏帽子白張宮奴の形もそろはぬ片相手我肩にかたげなくも神輿をかつく肩なれど駕籠をかつぐも諺を歌酒代の錢をねもへばこそとつぶやきッゝかつきあげたる旅駕籠の垂に吹込沙烟「ヤッサコリヤサ「ちやうさやようさとかけて聲も足もそろいぬ富士三里七里が濱の波打ぎはを千鳥がけにそはしり行ぬ

雙蝶蝶記

○寶跌塵蝕無二堂宇一腸瘦纔容二數百人一と萬里居士のつらねたる鎌倉深澤の大佛のかたはらにありふれ童蟻榮つも嫗貝とる蛭のたぐひまで旅人まじりにれし合て我さきとれしわひぬこれ何を見るなればさきあじろの笈と菅笠をかたはらにおきかけ竹杖にすがりてやそみ居るを見るなりけり此旅の老女や、ありて諸人にむかひ妾が身の因果物語を懺悔のために語りて聞せまうすべし妾い丹波の國の山奥に住獵師の妻なるがまゝ、娘をふかく寵愛して平日に身上を撮爪たて、いた矜くるしめけるをまゝ、娘かなしき谷川に身を投てむなしくなりぬ其報いにてつねに娘を撮たる大指のさきしきりに痒くなりてたにがたかりしがつひに蛇となりて人のまじはりならぬ身とはなりぬこれ見たまへといひて右の手先にねほひたるものを取のけてさし出すを見れば大指のさき目口鮮なる蛇にて心のなしにやうごめくやうにて見るさへ身の毛そばだちぬ老女又いひけるはこれによりて妾先非を悔たちまち日來の惡念をひるがへして菩提心を起玄諸國の靈場をがみめぐらば罪障を滅するよすがともなり指もとの如くになりもやせめとかう思ひたちはべりぬ懺悔には罪を滅するとかうけたまはれればみづから此事を語りて聞せまうすなり此鎌倉には蛇が谷といふ所もあるよし昔語りとて聞玄ともはべりそれは妾とはことは事かはりて嫉妬の心よりとうけたまはるされど大指の蛇となりし因果はねなじとをなればこゝ當地の靈場を拜むつひでに旧蹟をも見ばやと思ひはべるなりといひていとわびしげなり立集ひする人〳〵これを聞てあなかそろし物のむくいはかくぞあなるか、る奇怪をまのあたり見ざれば實しき事とも思はずこは世の人のよき戒ぞといふもありあなめづらし前代未聞又たぐひなき話柄ぞかれを見せ物にせばよき福を得べきに錢もとらで見ぞるは惜き事にといふもあり憐の心ある者は一錢二錢をあたへて去心なき輩は誚歌うたひかけてゆくもありねのがさま〳〵散行ぬ彼老女もやがて身を起腰をのしッゝ笈を背ねひ笠をたづさへ竹杖をつき稻村が崎の方へ去ぬ

雙蝶蝶記

○かに駕籠に夢をとられて身寶の愁歎

夫は扨おき駕籠の塵兵衛は旅さふらひを乘駕籠をかゝげて道を急ぎ黄昏の頃藤澤の宿に到りけるにさふらひは駕籠ををりて賃錢を拂ひいそがはしげに足をはやめて過去ぬ塵兵衛は幣又に賃錢の半をわかち與へてから駕籠をかつぎそちすから四方山の物語りしッゝ小動に歸けるが幣又

は塵兵衛か住家の門ぐちにて別をつげてかへりけり塵兵衛は我宿の片折戸をおしあけて裏に入ば娘小蝶走り出けふはいつより御歸の遲かりしさぞな草臥たまひつらん足そゝぎなどするかといひッゝ盥に水を汲入て持出手づから父の草鞋脛巾の紐をときて足をそゝぎなどするかひがひしさに常の孝心あらはれぬ塵兵衛は身上の埃を打拂ひて簀子のうへにあがり圍爐裏のはさに寄て蘆火焼足ゝみ出ゑ胸うちひろげてあたり居る娘はまつ茶を汲て父にすゝめ夜食もとく拂らへて待わびぬたふべ給ひなんやなど詞やさしうもてなしぬ塵兵衛は家内を見まはし於破矢はいづくへ行しぞとたづぬれば娘いはく母をまは前程鶴が岡の夜神樂にやとはれてゆき給ひつるかに去ても前の世から持來る貧乏はせんそべなしなど云ッゝもの喰酒飲やゝ身うちわたまりてのつから疊の疲出けるにや盤すねふけいでゝ物かけんと庭にすゑおきたる龜龍の蒲團をとりけるに其下に柳條絹の財布有けれはいふかゑみッゝ父をゆり起し龜龍蒲團の下にかやうなるものわりしがおぼえあるものにやといひッゝ父にみすれば塵兵衛はこれを手にとり灯火のもとにて裏をあらためみるに小判金七十兩ありければ大におどろきこれはまさしくかのさふらひ我龜龍の内に忘れおきたるに疑ひなし今夜は藤澤の宿のもしさらずば近くて平塚遠くて大磯には宿りつらんはやくこれを持もきて旅宿をたづねのへさばやといひていそがはしく身じたく財布を懐にして走りいでしが波間より氷て出る月影も雲にへたちて暗かりければ立もどりて明松をともし娘をみしくを留主せよといひすて、又走りいでしが里遠からぬ鐘の聲の月に和して聞ゆるをかぞふれば早子の刻なれば立といまりて

案しけるいかのさふらひの旅宿をいづくとたしかにしらざればかく夜ふけてはたづぬるにも便わし、かのさふらひの、る大金を忘れたればよも先へいゆき過まじあとへもどりこたづぬるは必定なり龜龍の塵兵衛といひては此道すぢに誰しらぬ者もなければもしかなたようたづぬるとも知れやすからん今夜は且とゞまりて明日未明にいでゆき彼道すぢをたづねてかへさばやと心を決して又立もどり娘にもかやう〳〵と思ふやうを語り聞せかへさぬ内ゝ兎角心すまれどもとりをさめしをえてみづから門を鎖し着がえだになければ着の儘にて親は古夜着子は薄き蒲團をれはひ寒夜をおの〳〵浮寢鳥蘆屋風にすき間もる濱風をふせぎッゝしばらく睡につきけるが小夜もやうやく更且たり嚴にあたる波の音呦々とひゞき松につたふる浦風颯々となりをやぎうちよろぼひたる苦家なれば地震のふるやうにゆら〳〵と動ていとさがしきれど住なれし身は常となりて耳かしましとも思いず殊に塵兵衛は晝のつかれでよく睡ぬ常に目さとき娘も一ッの禍いでく〳〵きはしにやありけんともに熟睡しおちて盜人しのび入ぬこれに晝のほど稻村か崎に臥居たり野ぶせりの乞食なり前程ふと此ところを通りかゝりて樣子をとくと見とゞけおきたれば拔足しッ、親子が寢たるうへをまたぎ越て佛壇の下戸棚をさぐりかの財布をうばひとりて懐にし立出んとせしが灯臺を枕上におきてよく寢入たる小蝶が寢顏のうつくしさにふと目をとゞめて立もどりしばらく見とれて居たりけりこの娘貧家に養れて無脂白粉のいろとりを假ざれどもおのづからなる美麗ねもいはれず玉もてつくれるやうにて寢乱髪の額ぎはにこぼれかゝりたるさまはつ花のなかばひらきたるに青柳の糸を乱し懸たるにやと思わるゝばかりなり此盜人のをたいかなれば月代の毛長くおひのびて面をつゝむ手

袴の破れ目よりあなめの薄のやうにつらぬき出つ眼光り髭がちにて身材高く身には海松のやうに破れたるとき衣の襤褸を着てうへに破れたる帆席をまとい繩を帯にして身上すへて垢つきいと汚なけなるが娘の寐顔をさしのぞき光るまなじりをひるかへして見るさま燕の巣を角鷹のうかゝふに異ならず此盗人心のうちにさても世にいかゝるうばくしき娘もありけるよと思ひ現心もなく後にはちか〳〵と顔さしよせてなほ見とれけるが此とき塵兵衛ものにおそはれやしけんふかへりおれど盗人これに心つきて足ばやに逃出七里が濱の方へ行ぬ時に此あたりちかき漁屑村の猟師夜釣のかへりに笈の濱に猟船をのりつけて陸に上り立まよふ雲も夜風に吹はらひて影をさまじく住月の光りにつきて見るにかの盗人波打きはの艫に尻かけて懐より財布を出し金をかぞへて居たりければあやしき奴と思ひツ、つと寄に盗人ハ手バやく金をとりおさめて優々と歩行猟師どもは其ゆくさきに立ふさがり後にも立てれの〳〵攫をれつとり盗人の眉間をのぞみて打かゝるを盗人は懐手しながら身をひねりてこれをさくれば一人の猟師は盗人の向脛をなきたふさんと佛ひ打にうつをそくをあげてをぢてゐ高沙を蹴散してしばらくあらそいけるが猟師どもはなはずきまもなく左右ひとしく打かゝるをとく身をしつめて背後に立ば二人の猟師て人身になりたがひに頭を打合て眼くらみ擺と撲地と取落して躊躇所とぬす人は二人の猟師の首頸を両の手にかい摑と投んとしたる後より又一人組つきぬこれも屈せず盗人は二人を左右へ投のけるに腰をひねり足を飛して一人をはつしと蹴たりければ三人ともに四五間飛て海中へまつさかさまにおちこちの浮巣鳥の塒をおどろかしてばつと立たる水烟あと白波と盗人ハ行方もしれずなりにけりかくて時刻やゝうつりて冬の夜の長きもすでにあけなんとして鳥のてゑ聞えければ塵兵衛ねふりを醒して見るに壁ぐづれて其あひだより江の島のあたりまで霖なから目に

見とをれけれバこわそもいかにとおどろきて起上りよく〳〵見れば泥足のあともあればこは盗人の入たるならんというさまぞひて戸棚のうちを見るに財布なければます〳〵おどろき扨は何者かかの財布の金の事を知て盗みにいりたるにうたがひなし何にもあれ盗まれてはいひわけなし今にものの侍たづねて取に来らばぬすまれたりともふともふべきや我かく貧き身なればうたがはるゝは必定なり天道は人を殺去給ふかこわかにせん〳〵といひて虹のやうなる息を吐手を摂頭をたれて居たりしが娘も目を醒して此事を聞ともにおどろき父の愁るさまを見つ、胸つぶれて泣居たり塵兵衛つらん〳〵思ひけるは彼金の事を別に知者のあるべきいわれなしうたがはるゝは相棒にたのみ去給父也彼奴昨日将棊になずらへてさぐりあひたる詞のはし〳〵唯者とい思はれず彼といひ是といひうたがはしき事にはしまづ彼奴を捕て糺明すべしと思ひさだめて走いでんとしたる折しも昨日のさふらひ薦屑村の百姓どもに案内させてこゝに来たる塵兵衛い走出る門首にて丁と面を合せけるがさふらいは塵兵衛を内へつき入いそがはしく息をつきてはひけるは汝が栖家からうじてたづね来つ我昨日汝が駕籠の歌湍園の下に柳條絹の財布に金七十両入たるを忘れおきたりさだめて汝取おきつらんとく〳〵かへしくれよといふ塵兵衛は今さら猥猥何と答ん詞もなくしばし去答もたゆたひけるがありの儘にいふにしかじと思ひなるほど其金の財布はゆぬべ宿にがへりて後に見つけ早速御返しやしたく存せ去かど御旅宿も存せず殊に何くれと夜更い故せんすべなく今朝にいたらば御あとをしさひ返去やすべしと大切にえ去まひれさいにおれ御覧せよ昨夜あのとく壁をこぼちて盗人しのび入財布ともに金をのこらず奪ひ去いといわせもはてずさふらひは濫腮ッ、四邊を見まわし汝みづのら壁を穿ち足あとをつけなどし盗人にうはぶれしなんど詐は愚なる計策なり小児を欺ともよくあざむかるべきや我昨

日遊そいそくに心せかれて金を忘れたるに必つかつ天磯の宿までゆきやうく〳〵思ひ出しあとへ歸らんと思ひしが一昨日の大雨の落水にて折わしく馬入川とまりて渡るをあたはず心ならず夜をあかせしが昨夜丑すぐる比水落ちと聞夜中にかゝることを立出藤澤の宿にて汝が名と住所を聞て爰に來れりさある惡計を爲ばかへりて汝が身の爲あしかるべきとく〳〵金を出せといふ塵兵衛は頭を低かく貧き拙者なればうたがひ玉ふべうなれど奪はれたるはいつわりならずいかなる誓も仕ふうんかの盜人少心當もいへば爰儀の間しばらく日をのべ玉れかしと身を打伏てねがひけりさふらひい眼をいからし刀の鐺をそらさまにひるがへしはりていはく盜人猛〳〵去とは汝がたくひいふならん詞をやはらかにいへばつけあがりする不敵奴我を誰とか思ふ此鎌倉總喜里の梅个谷郡領の家臣袴田耕丸郎といふ者なり彼金い都へのぼす主人の用金なれば片時も猶豫なしがたし汝さばかり肝ふとくては一通にては金を出せまト梅个谷に幸て去圖圖につなぎて糺明せん百姓ども彼奴をく、れと下知ずれば百姓どもいわりあふ縄をとり塵兵衛を押伏て兩手を背へねぢかへせば娘はかなしく走りよりのうゆるしてとさ、もいへばさふらひは情氣もなく幼せば汝もく、りて率てもくぞ退き居よと呵ッ〳〵刀の鐺にてつきやれば背後にありし方灯とも樣子をうかがひ居たる妻の於破矢いそがはしく走り入て百姓どもをおしとゞめさふらひの前に手をつきて忝々いひけるは妾い川塵兵衛が妻にてい前程よりか玄こにて樣子をのこらずうけたまわりいか夫にをきてはさある惡意いはべらねども御うたがひは無理ならずぬすまれしとてもうせわけにはなりがたければ別に金をと、のへてれんかへ玄やすべし何とぞ午過る比まで御まちく玄されかゝひとへに願ひたてまつるといへばさふらひは少玄面をやはらげ金さへかへさば

へん片時の猶豫はいたさくれんそれまでは蘆屑村にて相待八ツ時に金うけとりに來るはぞに其詞をちがへるなないよ〳〵金を返さずば妻子までもとらへゆき囹圄につなぎて糺明するぞ後悔すなと詞はのしり罵りツヽ百姓どもに案内させて蘆屑村をさして出去ぬ塵兵衛はため息を吻とつきツヽいかに思ひかへしてもうたがはしきは幣又なりといひきとゞめ幣又をうたがひ玉ふはよしなきとなり幣又いゆふべ雪のはぞより鶴が岡にやとはれ來り妾にもあひて昨日片棒を手つだひたる事などもの語終夜庭火を焼彼所にて妾とともに夜を明し今朝飯たるに妾が目前みたるところなりいかでか幣又が二人ありてこゝへ盗みに來べきいはれあうんやといへば塵兵衛はこれを聞しかしさあるかたからば彼が仕業にあらず別人なりさありては盗人を負義すべき心當りもなし汝今さふらひに證時までと約せしがいのにして金をとゝのふる心ぞやといふかればはやはつと立あがり厩につりたる鳴子をとりて圍爐裏の柴の焼さしを筆となし鳴子のうらに物かきて手ばやく娘の襟にかけこれ御覽せよといへば塵兵衛は眉をひそめ此鳴子のうらに此娘賣物と書たるは小蝶が身を賣て金とゝのふべきこゝろよな其志は過分なれぞ此小蝶はもとそちが連子にて我血をわけざる娘もゐ身を賣せては義理たゝず別に思案を仕かへてよと打ゑゐればはやはく鳴子をばれのが羽風にまかせつゝ心とさはぐ雀さへ養うけし恩はしる生れつきも相應にて金に鳴子の此小蝶七ツの時から養育され大恩うけしやなひ親の難義を救に身を賣をいかでかいとひはべるべき夫のたゞに放れのが身を賣妻もあり我身年今すこしわかくあらはなどで娘を賣べきぞ娘そちもさだめて得心ならめといへば娘はむろびれずのたまふまでもいわずふつゝかなる我身にても金になり父うへの難義だに救ふならばいづくへなりとやりてたべ君候拔れろかなとたとへ八身御供になるとても露ばかりもいとふべき心

にあらずさりながら活業にいとまなき父うへ毋うへさぞ不自由にゐぼされん夫のみ心にかゝるぞかしといひてかなしさかくす針目衣顔にゐはへるまをなる塵兵衛は目をしばたゝきかゝる鶺の出來べき振袖のうちよりもれて縫あげにつたふ涙を不運垣もまはらに扉のしまりもれろそかなる此家に生の鉄なりさばかり深き孝心のほどゐ哏なくうれしして子を賣わ八喰鬼もゐせぬ業こればかりはやめてくれよとうけがいず義理をかさねし山坂に重荷とかづく息杖の休むひまなきもひなりれはやはちかく身をよせてしかのたまふはうべなれど前程さふらひの詞にいよ〳〵金をかへさずは御身をくゝり行て囹圄につなぎ責問べしといひしにあらずや妻子の身としていかでかそれを忍はべらん此事は我々親子が心にまかし給はれかしと詞は心つよけれど目にい涙の村しぐれ今も降べく見えけるがやう〳〵心をとりなほしさらぬだに日の短きころなるに何くれと隙どらば時刻うつりて彼さふらひにはがへたる詞にちがひ事のやぶれとなりぬべし昨日人の語るを聞が手越の里の妓家が江之島て逗留して居るとなれば幸なり妾わ一走に彼所へもきて妓家を連來るべし一世のわかれといふにもあらず道のほどもなからぬ手越なれば伊豫簾の間もとむる風のたよりのなどでなかるべき娘髪をとりあげ化粧してまちてよといひすて、涙をれさへ小裾ひきあげッ、出もきぬ塵兵衛は胸ふさがりてあるにもあられず隔の扉へ泣にもく娘は鏡臺取いだ左むかふ鏡も泣顔にくもりがちなる冬の月常は化粧もまれなればちりむバ匣を打はらひ眉かく黛も遠山に雪の白粉屑を色ぞる燕脂も薄の葉裏のはつれのる亂れ箱よせてはかへる波紋身を浮草のつとめといふはとふした物とわけも白齒のわきまへぬ

恍惚子娘の心には鬼住國に行思ひとはれもへども寶物に花笄もさゝ玄かざり姿つくれば常よりも猶まさりたるうつくしさいまだ十四のいつ花を垣に咲せて路の邊の柳とともに手折せんはいと憐むべき事なりけりかくて時刻もうつりしかば母の於破矢はいそがはしく妓家を連歸り娘を見せて身のしろを七十兩にさだめ塵兵衛も涙れさへて出來りげれば妓家は七十兩の金を塵兵衛が前にだき矢立を出して筆ばやに証文を書おいり是に手形を押給へといへばかなしさは限なけれど今更せんすべもなければわなゝき〳〵手形をぞ押たりけるれいやい妓家にむかひかりそめならぬ親子のわかれなればいひふくめたき事もあり証文を渡せしうへは運行事はしばし猶豫をしてたびひへといへば妓家は打うなづきそれも、つとも一からば暮六ツをかぎりにむかひに來るはどに夫までに身下たくさしてだき免されといひれきてぞ歸りけりさて於破矢夫にむかひていふやうとかくする間にはや午も過ぬべし彼さふらひの來ざるうちにれん身其金をたづさへて少しもいやく返してれはせといふにぞ塵兵衛はこゝろにつといひて七十兩の金をたづさへッ、門首まで立出しが袂よりからりと落たる將棊の駒なひろい取てはこれ昨日稻村が畸にて我手に取しを玄かも金銀二ツの駒なりこれを忘て今まで袂に入れきしも金の雛義にさ玄つまる前表にてありけかるが思へばこれはいまはしといひッ、地上に投すて、歎息してぞ出ゆきぬかゝる折しも七里が濱の方より禮服兩刀きら〳〵しく出たちたる若侍挾箱持草履取を具し來りて駕籠の塵兵衛といふはこれなるかといひて案內を乞ば於破矢立出いかにもそれは此方にてはべるのあるじは今宿に居合さず何の御用のいとのべけれが彼さふらひの來ざるうちに打通りあるじ他行とあらばしばらく待對面の上にて委細の事を語るべしといひて座につき居たるがはとなく塵兵衛立踰りて外の方よりはひけるい於破矢も小蝶も安心せよ金を返て何事なく受取のしるし文までとりて歸りしぞといひッ、裏に入て彼さふらひをみつけてついにそうけぬれ歷々いづくの御方にやといぶかればさふらいは威儀をつくろひ塵兵衛といふは和主よなわふは今がいじめなれど賤き業をいとなむべき人品とはみえずれのれは當地月影个谷判官の家臣箕頭蟻右衛門といふものなり今日和主をたづね來つるは別義にわらず頃日若とき玉兎之助との金澤にて漁獵遊覽の歸さ霧个澤の月輪寺に立よられ彼寺に居る蝶吉のひ小扈從にめしかゝへんと望れしに彼寺の上人はすでにうけがはれて吹噓有んとの答なるが和主は蝶吉が父にてもとはよしある弓取にて今零落せられたるよし上人の物語にきこし免され和主をもめしいだしもとの武士に取立たまんとの事なり親子一時の出世なればよもや違背いあるまじといひて挾箱の裏より衣服兩刀を取出玄れは則士從契約の玄るしにれくらるゝなりといひて塵兵衛が面前にさしれきぬ塵兵衛はこれを聞袞に煩たる氣色にてしばしいらへもせざりしがやゝありてひけるい彼上人吹噓のうへは兒子が專はせんすべなく御うけをつかまつるべし拙者事は今のたまふが如く昔は武士のまねをもせ玄者なれどかく零落いて兩腰を一條の息杖にかえなし柴山子の弓矢たに手にとらぬいやしき身となりくたりいへどもゆゑあり仕官をのぞまず況弓馬の沙汰にも及ばず兒子が美貌のゆゑによりて立身する事本意ならねばよろこばざるも存せず貴人の賜を受ざるは不禮なれど此品〳〵は此儘返上仕ると袞外なる返答に蟻右衛門いしばし詞もたゝひけるが偶かたはらにありき寫子に目をつけ取上見て打うなづき鳴子の裏に此娘寶物とかきたるは察する所貧苦にせまりそれなる娘を寶しならん娘を寶程の所存にて蝶吉が美貌による立身を好ぬをいてゝ、ろにずたいしは又使者に立たるやつがれをかろしめたての返答がと釘打詞の理につまり「イヤ其儀はどくちごもる「心をくをて蟻右衛門もしまた仕度なをにを

しつかへてのとなるか其儀をとくに察せよ故これ此金子をたまはるありこれにても得心無やと
はいいッ、懐より百両包を取出して鷹兵衛が前にをく鷹兵衛は此金を見て尽〳〵と心の裏に思ひ
めぐらす事ありて忽武士魂を柱詞とあらたゞしていひけるいさむかり厚き御恵をうれをめざ
るいかそれをねき事なればかはせにしたがひ是等のたまものを頂戴いたしいへばともへば蟻石
衛門は心にちつきて喜びしからば目見にの儀は吉日をにらび遅ていひ越しいべしといひて別を
告て歸けり鷹兵衛は門をくりして内に入何思ひけん口をそゝぎ手をあらひて佛壇の前ひざまづ
きしばらく拝して扉をひらけば莟然たる五輪の石塔を安置て香華を手向をきぬさて妻娘にも
かひていいくわれ此森旅より歸しとき此五輪を取來りてりやうに祭るを汝等いぶのしみいかな
るいはれありやと問けれども亡父の非をあらはすにしのびざれば其答もせざりしが今日はいは
ねばならぬ時節となりぬればやむとを得ず語るぞかしそも我亡父は五大院左衛門宗繁とまうし
て敵相撲入道ぞの、重恩をうけたる人なりしが入道ぞの亡びたまひしみぎり預かれたる御
嫡子相撲太郎邦持殿を讃し出して情なく敵に打せたる不道人なれば人毎に爪弾をして悪み嫌悪の
罪身を逃けるにや一身ををくに処なく舊友をはしとへどもへども一飯を與ふる人なく遂に道路に餓
死して終給ひしと聞其砌我は幼稚て何事も弁らずしかるに此春人の語を聞ば父の終焉の地は越
中國蛭牙山のうちなるよし其所を尋ばやと此春旅立して彼山に到からう玄て此五輪の塔にたゞ
ねあたり五大院宗繁靈としるしあるにて疑ひもなき亡父のとるしなりとをもひ彼山中の者につ
きて聞しに此塔は情ある山人等が集て建置たるよし我れもふに此塔の長く彼山中にをき若故相
撲太郎どの、所縁の人の目にか、らば塚を發れんもはかられねば此塔をとり去て跡をかくすに
しかじと思ひ旅荷物のやうにつくりなして遠路をいとはずたづさへかへりしかるべき寺院にも

建れかばやと思ひけれどもこれも人目にかゝ
靈を祭なり我他人の情にて成長はしつれども漸々に零落してかく賤し
是親の因果の子よ報道理にて我身をくるをもむ
いとはず況仕官などする心は露ばのりもあ
身の因果をおよぼして貧きくらしをさするをの歎いしく一ッにはをしあたりて小蝶に身をうら
さぬため二ッには蝶吉が身を立る爲とれもへば日來心に蓄ひたる儀をやぶり仕官をもべくれも
ふなりといひて又古草籠の内より錦の服紗につゝみたる黄笛を取いたし小蝶にむかひていひけ
るい是此笛は濡髪と名づけたる名管なりこれ汝が實父伊勢國の樂人二見太夫是次といひし人
の秘藏ありし物なるが於破矢が我にあづけおきぬ我これまで貧苦にせまりても賣代なさぬは亡
人の是次どのへ義を立るところなり今あらた
身はなさず持て居よといひて渡しければ小蝶はこれを受し難これがうみの親人の遺物にてゐか
といひて涙さしぐむッ、懐にをさめけり於破矢は夫の形語を聞てはじめて其素性を玄り父の非
を隠孝心といひ義理ある養子をにつくしも慈悲深き志を感して小蝶とともにひたすら涙にむせ
びけりかくて又時刻やゝうつり落日畑ををびて碧霧を生玄彩雲水に映て紅の光を散し釣する翁
は舟を移して家路を急ぎむれゐる鳥は友を撰て沙汀にくだり芦花の雪をふらす濱風は苦深き声
端をめぐり赤蜻蛉の紅葉をちらす枯枝にふくれ聲なる山鳩も宿にかへりてはや黄昏の頃となれ
ば於破矢は涙の目をのごひ灯臺を取出玄て火をともし門の戸をさしかたをんと玄たる所に彼手
越の里の妓家鶯龍をつらせてつと來り約束の時刻もをむかひに來つといへば鷹兵衛はいそがは
しく佛壇の扉をたて、妓家にむかひ且笑かけツ、こなたへをむかへ入ていふやうさて娘の事に

つきてわりなき無心あり別の事にもいはず前程証文に手形を打てかさくきはめし事にはあれど此方にてはからず金を得たるにより前程証文をもやぶりてよ此儀をひとへにたのみまうすと云ふ夫婦口をひとしうしていひけるに妓家は色かに御身等は妓家のきだめを知ゐはずや一旦金を渡して証文をうけとれば最早此方の娘にあらずいかでか元金にて返すべき道理あらんやといふにぞ夫婦いうべきもひながらいかにもしてうけひかすべしと頭を掻もみ手しかくさまざま調を盛しけるかなは聞入ざればしからば元金に三十兩まし百兩に云て返すべけれど聞入てたびねといへば妓家は耳にも入ずはう立てやくなき詞を費すなといひッ、さゆる夫婦をつきのけて貯蓄のかげに泣伏たる娘の手をとり引立ッ、褞袍の裏にかし入て乘を撰とおろしとく〳〵やれと褞袍をいそがし走り去ぬ夫婦は跡を見おくりッ、尻居にたふれてあきたる口をふさぎもせずあばしおされて居たりけりをりしも海士の子ども等が磯に遊て吹すさむ潮風の音さへ哀れなり稍ありて鷹兵衛は片手に鴨子片手には金の包を取上て双方を打なが欠歎息していひけるは嗚呼禍福吉凶は糾る縄の如去るといふもうべなり今二時はやく此金を得たるならバ此娘寶ものとかくかなしさ文字は見ましものを立身をのぞまぬ我身はかへりて仕官をせねばならぬ義理となり憂目を見せじと思いつる娘は八手に渡りゆくこれ此如く百兩の金を手に握ながら子を賣て泣因果な親が世に又とあるべきかつら〳〵思ふにかゝる禍ゐで來りて今日一日にする事なすと鳥の啼ほど饒語もをべて是我身宿業のつたなきゆゑなるべし娘を妓家へつかはしては此金も何にかせずといひて金の包を投出しかはひや娘をいびさして鴨子を抱き泣伏ければこらへし女房も氣を弓張の弦きれて聲をあげ身をもだえッ、悲嘆の涙にむせび息かゝる折しも藻屑村の猟師ども、に來りて

門首よりさしのぞき鷹兵衛は内にかゆふべ物をぬすまれたといふ噂を聞て告に來た我〳〵三人ゆふべ夜釣のかへりがけ七里が濱であや玄き奴に出あふたゆゑ打倒してとれもひのほか手づよき奴にて取にがせしがもふべ此家へしのび入しもれはかた彼奴にきはまれり彼奴はたしかに穢波村に野ぶせりの乞食にうたがひなしと海をはたらく高聲に疇てぞかへりける鷹兵衛いこれを聞さては昨日の野ぶせりめあやしき奴と思ひしかど彼奴か業にてありるかはやく捕へて糺明すべしとれもひッ、走りいで玄かいや〳〵こゝでぬすみをせしやつがはぞちかき穂波村に居もせまじゆくへいづくとしら涙の何を目あてにたづぬべきと思案しかへて立戻り檬鼻に尻かけて溜息つきて居たりけれは女房は愁を拂ふ玉箒と機轉きかせてついでだす茶椀の酒も冷氷る夜を鳴あかす浦千鳥ゐとゞ哀をそゑにけり○夫は扨おきこゝに又離々原上の草一叢々白骨叢に翹て影ずさまじくすむ月の山もあらはに木の葉ちる蛇ケ谷の墓原に雪をあさむく白髪の老女たゞずみてあたり見まわし懐より呼子の笛を取いだして吹あらすとひと玄く竹數をれしおけてあらはれ出しは別人ならずかの宮奴の骸火なりときに老女聲をひそめていひけるは我諸國の墓場をあるきて老女に身をやつし大指を蛇に刺くりなして人を欺き因果婆々と異名をよばれて此鎌倉を徘徊するは別儀にあらず一ツには味方を集めんためなり汝いいかにといひければ骸火は懐中より一巻を取いだし老女はとりてさらさらと押ひらき月影をうかゞひ二ツには味方を集めんためなり汝玄あつむる味方の連判狀いざ御披見とさしいだす老女は聞はりよくせしぞ骸火かくの如くれひ〳〵味方集る上は時節を覗義兵の旗をひるがへし多年の鬱懐をひらくべしかならず人に悟られなといひッ、一巻をもどしければ骸火はうけとりて懐中に此ほどかゝれしを聞にれきうる小動の纏龍の鷹兵衛と中す者たい者ならずと存るゆゑ近

づきて動靜によせいろ〳〵探りて、後みるに彼れさをしく不忠者の五大院左衛門が子にうたがひなくいへば折をうかがひ打取て義兵の血祭にいさすべく思ひ居ゐと語るをりしも稻村のかげより盛兵衛が相棒の泥太をぞりいでかくわらんと思ひしゆゑ跡をはけて爰に來つ其一巻をこちへ出せ褒美の金にかゆるとよば、りッ、幣火が懐に手をかけたり幣又は其手をとりてねぢかへし足を飛せて彼方へ蹴やれば老女い手ばやく竹杖に仕籠志刀を抜放し陽炎稻妻ひらめくかげに泥太が首い前にぬち軀は後にたふれたり幣火い白張の袖をかきちぎりて刀の血しほを拭ひとる老女い刀を鞘にぬさむるとたんの拍子背後なる茂竹のうちに鏑夜を寐かねて羽た、く雉二聲三聲幣鳴ければ老女いはくやよ幣又此奴も鳴て躬られた雉ありケを八にしらすなと腮をもつて下知すれば幣又は打うなづき首もむくろものたはらにさ、やく耳に口右と左へわかれ行ぬ

○五月雨やある夜ひそかに遊偵の曲者
扨月影个谷判官照影は相摸次郎を亡したる勳功によりて足利家より所領を增たまひり威勢もにのづの〻盛なりしが子息玉兎之助清影く花が谷の下館にぬてしけり塵兵衛が兒子蝶吉い小冠從となりて勳之助と名をかえ側近く仕へて寵遇あつて塵兵衛も家臣の列につらなりて今は姓名を蒲元澁右衛門とあらため心にもあらぬ仕官なれぞも一旦君にするうへはと思ふにぞ忠志をかふけて仕へよくへりくだりて人愛れはかりければ諸傍輩も彼が賤き業をせし時の事をいいずれのづから用る人れゐく昔の顯難にかはりて何不足なき身となり唯不運なるは娘小蝶のみなれバいかにもして隠いだし烟花中活地獄の苦みをすくはめと思ひけれとも今け都五條坂に資かにられ千金にあらざればもどすまじといふにぞさすがに高金なればかよばずもとより他聞をいと

ひて口外せず唯夫婦日毎に彼がことを言出して嘆ぬときもなかりけりかくて又光陰移換年々巡るが如くにてしばらくもとゞまらず流水の海に歸するにひとしく機杼の梭をなぐるに異ならずでに六年をすぎて永和元年にぞいたりけるさて勳之助は七歳になりぬかの箕腹蟻右衛門はかねて隱謀あるにより玉兎之助の行跡を乱さんためず、めて動之助と小冠從となしけれども勳之助は忠義の志ありて殿のこ、ろを乱さず寵にはこらず恩をきせて隱謀の方人にもとれもひて吹擧せし蹤右衛門も忠勤をはげむゆゑに漸々に立身して今はれのれが上に立ければ今さらねたましく思ひいかにもして彼等父子を追退けばやと時節をまちて居たりしが頃日勳之助病によりてしばらく私宅に下り打臥居るをさいはひとし手越の里の白拍子都といふ女を玉兎之助にす、めて下やかたに呼よせ酒宴の興をそへけるか此都年は廿に二ッ三ッ過ぬれどもたぐひまれなる美女にてたるに異ならず曲郷糸竹のしらべは殊にそぐれて頻鳥の聲をやはらげ綾羅の袖をひるがへして舞かなづるさま古の祇王祇女佛なぞにも專れとらまじく見にけれは玉兎之助其艶色に迷ひて動之助に見かに連日館にとゞめおきて手越にかへさず妾の如く先しつかひて執愛いと深かりけり都も玉兎之助が美男なるに先でゝ賊心をかたふけ鴛鴦の契淺からざりしかば蹤右衛門は心中にしすましぬとよろこび遊び相手となりてなはよからぬをのみをす、めければます〳〵婬酒に耽酔遊宴樂にのみあかしくらす玉兎之助美酒珍味席上にみち艶曲謳歌日夜に絶ず恰妓家娼門の所行に似てうたてかりける有さまなりかゝる放逸の行爲を見かねて譜代古老の臣等かいる〳〵和漢の先蹤をひきて屢諫舌ひるがへすと雖ともつや〳〵用たまはず日をかひて惡行つのりければもし此事管領のかん耳にいらばかん谷あらんは必定なりと安きこゝろもせず薄氷を踏こゝち

して胸をいためざるはなかりけりしかるに勘之助長瀬平愈して出勤し館のありさま殿の行跡前にかはれるを見て大におどろき見るにしのびずして詞を盡し理を糺さまざまに諫まうしけるが老臣等の詞すら用ひたまはざればいかでか弱年のもの、諫をうけいれたまふべき耳にだに聞入たまはず無益の舌を動して我遊興を妨る條奇怪さよとくに退けと呵たまへども勘之助は小膝をそゝめなは強て諫けるにぞやかて氣色かはり扨いにとよせて彼を去りぞけんとせらるるならば先にくき奴が勘之助誠忠の諫とはしりたまはず殊更此とき大に亂酔してれいしければ忽怒の外皆をひきあけたまひ白鞘巻をとり柄に手をかけ給ひてはや〳〵手打と見えけるにぞ都はあはてまどひてとゞめんと去ほるをかさねらにありげる蟻右衛門にそがはしく押へだて、近つけづ玉兎之助はすでに刀を抜かけたまひいと〳〵おやうのりし折しも執權職山陝庄司實森が妻淀瀬次の間よりはしり出こは御短慮なりといひッ、袖にすがりて訴しとゞめ詞をやわらげて容まうしこれらのれんふるまひもし上館のれん父君にきこゆなば御勘當あらんもはかられず妾おしさといきこゆあげざるはさに一旦それなる都とやらんを里へおくり歸したまひねしのしたまひて後妾ひそかにれん母君にきこゆあらためて彼をれん妾となしふた、びめしかへさる、やうにはからひゆべし何事も妾にまかせたまへれのしといとなどやかにしけれは玉兎之助これを聞たまひ執權職の妻たるもの、詞なればあながちにいひ破んをもさそがなればしふ〳〵其詞をうけれさめてにぎりたる刀の柄を放たまへば蟻右衛門これを見て本意なき顏してけり淀瀬はよろこび且動之助は私宅に退かしめ扨都にもしか〳〵のよしをいひふくめ一度里へ歸るべしといひて其支度をぞさせけるが庭の木蔭も暗くなりて此日もすでに暮の鐘諸行無常と告渡り都が身のうへ後にぞ

れもひしられける此下館の後門通りは田畑につゞき前には細きながれあり比しも五月下旬にてこのころつゞく五月雨もしばし晴間の夏木立葉守の神のしめはへてしげる梢をもる月のひかりも薄き夜なりけるに時にもあらぬ覆面頭巾に目ばのり出玄鞍の両刀をよこたへて武士の浪人とれぼしき者何か人待やうそにて此あたりに立とゞまり後前に心をくばりて居たる折しも館の塀より氷の如き刀の鋭尖閃めき出不破の闘屋の板庇をもる稲妻にとならずかの浪人はこれを見ていぶかりッ、棟の木陰に身をひそめてやうすいかにとうかゞひ居るとはしらずして塀のなかばを切やぶり鼠の穴を出るが如く頭をいだ玄て四邊をうかゞひ潜出たる曲者は暗の烏か烏門玉の黒装束に打扮てがんぞう頭巾に面をつゝみ千両箱を小脇にかゝへて足ばやに歩み去時にかの浪人棟の陰よりはしりいでゝ曲者まてとよばゝりければ曲者は立とゞまりいそがはしく刀の小柄を抜とりてニィと聲かけはつしと打つけ跡をくらませ逃去ぬ浪人は身を避て打れとしおやうきよとひとりこち落たる小柄をひろひとりて後日の證據と懐中しもとの木陰に身をかくせり此ときこの白拍子郡は手越の里へ仮るとて乗物にてれくられ従者あまたつきそひて後門の方より出来りける以前の浪人棟のかげよりあらはれいで刀を振て打ふりけるに従者等はひらめく刃の稲妻に肝をけ玄魂をうしなひて乗物をすてれき風に木の葉と逃ちりぬ浪人はは、づきて乗物の戸を引はなち郡をとらへて引出しけるにぞ郡はれぞろき聲立んとそるを手ばやく口に手をあてゝものゝはさず後抱に抱ながら刀をさか手にとりなはして胸さかにつきたてければ郡は身上血に染りおなやとさけぶ聲だにいでぬ苦しさにたにずや有けん浪人の左の小指をくひ切ぬ浪人はれにはにず手を放ちければ郡はいとよわりたる聲を立て御館の人〳〵はいづくにれはすぞ救てた助てよとさけべとも苦しき息は青嵐の空に霄するばかりにて誰答ふる人もなく元結きれて黒

髪は風の柳と打乱れ染帷子の辻が花も泥にまみれて哀なり聲立させじと浪人は郡をのけさまに抑伏て吭をしたゝかにさしとほせば鮮血さつとはぎばしり前の流れにしたゝりて時にもあらぬ紅葉を散し七顛八倒身をもだえ手足をふるはせ歯を噛なら玄て苦痛の体目もあてられず鳴呼いたはしい哉二十三を一期として草葉の露と消失ぬかくて浪人は頭巾をぬぎて刀の血をれ玄のごひ鞘にれさめて此處を立退んとしたる折しもむかふのかたの畦をつたひていそがは玄ばに来る人あり雨衣を身にれはひ胚巾草鞋の旅姿菅の小笠を提灯の上にれはひて来かゝりしがはげしき夜風に火を吹けされ月の光をたよりにて此方に来り彼浪人と行ちかひ郡が死骸につまづきてうちれぞろき身をねぢむけて人殺しの曲者まてとよびとむれば浪人ハ足ばやに立戻りものをもいはず刀を抜て只一打と切つけたり旅人は身をかはし前なる流れをせきとめたる土俵をとりてうけとめたるに土俵の小口をすつぱと斬土はいらゝ〳〵こぼれちあまたの蛙聲をそろへて鳴立けるが月を包める黒ばへの雲一面にしきみちて五月雨颯と降来り忽暗夜となりにけり時に旅人も一腰を抜はなし曲者を打とめんと暗裏を抜足しッゝすかし見て眞額二つと斬つくる浪人は踊上りてこれを避又旅人に切つくる刀の鋭尖旅人の鼻のさきにひらめきければ胸をひやして飛すさり拂ひ切に切けるが互に身を入ちがへて折刀いたづらに空をきる閉てはひらきはぐれては棲遑游捉迷藏盲縅の氷を游か如く右に摸り左に按飛上りて切つくればしづんでくゞる刀の下背後あはゞにつきあたればいそがゝしく身をひるがへして阿吽の呼吸を心あてにめつた切に切刀れぼにず互に打あはし丁ゞゝしと、切むすぶかゝる打しも後門のかたより山吹庄司が妻淀瀬舘を下りてれのが宿所へかへり道執権職の妻ながら手傘足下もゝのかる、玄のび出立の挑灯を前にもたせて来りゑが泥の裏に落ありし印籠を奴僕が見つけてひろひ上かやうなものが落ありしとて

さしいたせば淀瀬はこれを手にとりていぶかしみつゝ、懐紙をとりいだして泥をのごひ挑灯にさし付てこれを見ばやとせし所に彼浪人はいそがはしく走りよりて挑灯ばつさり打落せば淀瀬が僕い仰天ま泥はすべりて後に倒挑灯ひるがへりて前の流れにしげりたる木草の中へ落たりしが雨になやみて水草の裏にのくれ居さるあまたの螢一度にばつと飛いだす其光に浪人旅人淀瀬等四人たがひに顔を見あわせけるが浪人は面に袖を打ふせて此場を逃もうんとす旅人はゆくさきに立ふさがりてとゞめんとす淀瀬は旅人を曲者とおもひたがへて捕へんとす其ひまに浪人はつとすりぬけて逃去ぬ雨いなほ篠を東て降まさり夜あらし颯とおろし来て新樹の梢を吹ならし流の水草も動揺して怪かな都が死骸の胸もとより一羽の時鳥飛出て二聲三聲鳴けるがなか空にのぼりて一團の陰火となりはしりもく浪人のあとをしたひて飛ゆきぬさて旅人も浪人のあとをしたひ泥水を蹴散して韋駄天ばしりにおふてゆく淀瀬い都が亡骸と舘の塀の切穴を見つけて大におどろきたゞちに舘に立もどりてしか〳〵の事ありと告たりけるに舘のうちにも侍宿の武士等手燭を持てかけまはり軍用金うせたりとて騒動す玉兎之助はこれらの事を聞たまひて都か非命に死したるを深く悲みたまひ彼を殺せしも軍用金をうばひしも察するとて依同人なるべし其盗人をおひ捕へ八ツ裂にして都が怨の十が一ツをはらさせべしと且かなしみ且怒りよも遑くははしるまじ追人を出してはやく捕へしむべし都が口に小指をくひきりて含み居るよしなれは小指のなき奴こそ其賊なれそれを証に捕べ汝とさびしく命じたまふにぞ健なる侍どもを四方にわかちて追せけるかつひに其行方をもとめ得ざりしとなん

○陽炎と汝きりに狂ふ牡丹の睡猫

月影ヶ谷判官の執權職山咲庄司雪森に三人の子わり兄を餘字兵衛といひ次を餘吾郎といひ末の

娘を小雪といひ惣領の餘字兵衛は妾淀瀬が十九歳のとき產たる子にて其後暫らく子なかりしがはるか過て本妻の夕波といふが餘吾郎と小雪と二人を產ぬ然れども本妻妾ともにこゝろさますぐなる者にて平日なかむつまじく嫉の心は露ばかりもなかりけり本妻小雪を產たるときは庄司は出君判官にしたがひて信州苫形の陣にむかひ其留主に產を汝けるが本妻產後のなやみつよくて死になん〳〵とせしところへ庄司歸陣し鎧をぬぐ間だになく其儘にて臨終の枕もとにいたりけるが此病中妾淀瀬心を盡して看病し此ときもすでに枕もとにつきそひて泣居たるに本妻くるしき息をつゞけて且夫にいひけるは妾むなしくなりて後后妻を他よりむかへたまひては三人の子どもら等がためあしかるべきねかはくは淀瀬どのをあらためて本妻となしたまはれかしといひてまた淀瀬にむかひ餘五郎小雪等を賓の子の如くにおもひて養育をたのむなりしからバ妾草葉の陰にても心を安くし子ゆゑに迷ふ黒暗の地獄の苦患をまぬかれなんといひおきて身まかりぬ是によりて日數たちて庄司淀瀬を本妻にせばやといひけれども淀瀬はひたすらこれを辞退すしかれども亡妻の遺言といひ子どもら等のためなればとあながちにす、めて遂に土君に願をいだしあらためて淀瀬を本妻にそしたりける素淀瀬は志なほく正き女なれば前妻の遺言をかたくまもり賓子の餘字兵衛よりもなほ繼子の餘吾郎小雪二人の者を深くいつくしみ朝夕撫按心をもちひて育けるが惣領の餘字兵衛いかなる所存にや十五歳の時に家剃髪の望なりといふ書置を殘して出奔し行方えれずなりぬ此時餘吾郎は六歳小雪はいまだ二歳なり其後小雪四歳の時乳母に抱かせ庄司みづからつきそひて甘繩の紳事を見せに行のへるさに認にさらはれて行方しれず淀瀬はこれをきくとひと汝く心亂るゝばかりに歎悲え前妻の位牌にむかひてもいひわけなしとおもひけれども庄司みづから連去てかゝる災にあひたる事なれば誰を恨む人もなく誰生死のわからざ

るを露ばかりのたのみにして卜筮をもとかせ神佛を祈さま〴〵に心を盡し近國の山〳〵嶽の梱へくれもふかざりを殘らずたづねもとめけれども更に行方しれされ〻失たる日を命日にして佛事をいとなみ菩提の種を植るのみなりされども凡夫のわさまさはもしい神佛の擁護により活ながらへ居るともやと夫婦朝夕の物語のはしにも此事をいひ出して泣ざる日はなのりけり此小雪い生つき美麗玉のやうなる顔なりしが高頬に一ッのれぞ父の讓の黒痣なりと平日の口すさみにもいひけるがりと淀瀬が歎いふも理なりか、れば庄司三人の子を持ながら唯家にある者れ餘吾郎一人なり是等の始終をくはしういへば事長く讀にもむづらはしければ其要を撮てしるすのみ扨餘五郎成長にしたがひて淀瀬を實の母の如くに敬ひ玄ひければ淀瀬も不便いやましていつくしむと限なしかくて今年庄司は五十五歳にいたりける扨又庄司か父餘五郎が爲には祖父なる淨閑居士今年五十年の遠忌にあたるにつき菩提のため紀州高野山へ石塔を建常住金を納むべきを思ひ立主君に願ひ餘吾郎を代參として紀州へゆかしむべきに定まりけるが餘吾郎いまだ若年なれば物馴たる者を副つかはせべしとおもひ家來南方十字兵衛今年五十餘歳の老人にて老實なる者なればこれを守役とし常住金二百兩石搭料百兩都合三百兩別に路用に持しめ已に行裝と、のひければ吉日を卜らびて鎌倉を發足しはなく京都に著て旅宿をもとめ石工に命じて石塔を造らする間しばらく當地に逗留して居たりけるが此とき彼筥腹蟻右衛門も主用にて上京し旅宿に逗留の問餘吾郎に出あひたがひに旅宿のつれ〴〵を問あひあるひは二人連立て名所古跡などをたづね旅の憂を慰めけるがこれにつきて蟻右衛門が心中に惡計をおもひつきたると後におもひしられけるに〇尋常の寒梅も折て筆持にのぼすれば一段の清香人の心を感せしめ民屋は裏柳も移て宮殿にいれば千尺の翠條別に春風長かるへしといへども宜哉龍麗兵衛が娘小蝶は手越の里に一歳住其後都五條坂に賣替られて富士屋の吾妻と云阿曾比となり旦には古をれくり夕には新をむかへツ、寄てはかへるあだ波の恍さだめぬ憂身となる原貧家に育し娘なれど花柳の街に移植て玉の笄綾羅の衣十分に紕はせいれば自然の美麗に今一しほの色まして嬌艶人をおどろかしめ花魁娘子とぞなりにける素聰明生なれば糸竹のしらべは更なり歌學繪がき花むすびのたくみとし情のいろは殊更に深かりけりかくて此五條坂に早くも五年の春秋を過して今は十九才にぞいたりける扨一日吾妻常よりもなは美麗よそはひて錦のくけ紐に金銀の鈴をつけたる手飼の猫をきよらなる女童に抱せ赤前垂の花車の女に日傘をさしうけさせて邸鄙の歩をうつしツ、紘歌の壁のいとなまめきたる街に繰出けるが留木の霓裳都と云てあたりの人を驚歩むにしたかひて紅の裙のひるがへるさま嬋娟たる牡丹花のうこき出たるかと疑はれぬか、る折しも古錦帽子を頬かふりにきて針目がちなる布子を着杖にすがりて貧げなる老女吾妻がおもむ側ちかく寄てつれつもつれつ後前につきまとふさま野らに年古老猫の小蝶に狂ふ如くなり花車の女これを見て唇をひるがへしツ〳〵いひけるは年の始の破魔弓に造つけたる尉と姥の離別したるにかと思はる、ばかりなる姿にてかく賤き道すぢをこちの君にすれもつれ歩みわふ劫する臭ものゝ、身しらず婆、よかたへに退てと〳〵行といとにくさげにいふを老女は耳にもきゝ入ず腰をうつくしにまさりてうつくしき姿の君かな卒爾なるをも打ッ、目も文に吾妻が顔を打まもりをてもきゝしにはあれぞれん身にまさえ顯たきことありて汚穢我身をかへりみず此曲中にわざ〳〵來つる其はれを一通聞てたべといへば花車の女はなはあやしミ扨は君たちに近寄て母の伯母のといつは

りをいふ物ねだりかさなくは袖乞のたぐひならんとく去ずやと聲高に呼ッ、つきのくるを吾妻は制して老女にむかひつひに見うけぬお年寄妾に對して願とある其わけいいかなるとたづねッ、傍邊の編笠茶屋の床几に尻かけてやそらひければ老女いはく其事とて別のをにもいはず此婆々が月とも星とも君もひはべる兒子一人いが山崎の油賣にて擔賣して貧き暮をいたす者日來實体にてよくかせぎ女なぞに心をうつす者ならねど此曲中へ商にまゐりしつゐそにれん身の揚屋入し給ふを見て心迷ひ親の口からすまうも去にくきとなれど戀病にいづらふほどにれもいまをりいゆる愚なる奴とさま〴〵にいひこらせどいかなる宿世の因果にやれもひきりにべらねばかはいやてかれて死ぬならん緒つのひすな情を商ふ君なれば無解にれ聞なしたまふまじ吾妻さまふ此わけを告さこゑ嘆きまうしてせめて盃もりと戴かせれもひきらえてやるべしといひ慰めいへばやう〳〵病もれこたりしもゑ道〳〵油をうらせッ、此所まで伴まゐりしなりねがいくは一目あふて詞をのけてたまはれといひつ、彼方をさし招を兒子こちへといひければ出口の柳の木陰より油擔を擔ッ、油ゑみたる古布子見るもわびしき姿なるか擔をれろして母の背後につい居れきかせまうせといはれてやう〳〵顏をあげかく貧き身もかへりみぬ僕が執着心語もいとはづか云けれど是一朝一夕の事なうず去年の春ふとれん身を見そ免てより片時もこれを忘れがたく人間の一生い秋の草に異ならずもし今樣の美人を得てせめて一夜をあのすならば死すとも恨なかるべしとれよびなき戀の海深き思ひに堪かねていのばかりの金にて一夜をもともむべきと人につきて聞つるに一夜の揚代銀百目なれど酒食の價なにくれの費あれば小判五兩ばかり金なくていもともむとなりがたしといひしゆゑ唯あきれてともかなはぬ戀なりとあきらめ拙き我身を恨

ッ、れもひとゝまるべく思ひしのを煩惱の犬打ども去ず戀慕の絆きれどもはなれず我身を焦す油の地獄れのれを責るのみなればまた思ひけるは古より志ある者は事竟に成といふ詞もあればうちより一日に三分五分の銀子をのけて積貯今すでに五兩の金いと、のひつれば岩に花咲心地はそれど又人の語るを聞ば吾妻どのはなびきふとなしといひしゆゑ況まづしきるまゝと思ふか病の種となり八しれぬ我戀の闕もりれ宵〳〵毎に痩はそりてはど〳〵命も危かりしを母の情の詞にてやう〳〵れこたり今日此處まではまうで來つ戀の菜種の身の油しめ木にのけたるしばり糟是見たまへといひッ、油擔の裏より五兩の金をいたして吾妻に見せたとひ耻を去のびて語りけるが金をつゝみたる紙に物かきさたるを見れば

山崎やすべり道ゆく油賣打こぼせまで泣涙かなといふ歌をかきつけたり吾妻はこれを見ていとゝ哀にれもい目に涙をさしくみッ、いたはしや妾ゆにさばかり辛苦をいとはず病に臥たまふまでに深くれぼしたまはるとのうれしさよ原妾が心貧福貴賤にか、はらず只趣を慕ふなればいかでかれん身の貧きをきらはんやなは物語たきをれほかれど此所は街上のはゞちかなり妾か坐敷へれはせかしといへば傍邊にありける花車の女これを聞てしのびわへず袖乞先きたる此婆々や油賣のまづしき男をつれゆきたまふは他の聞にもあしかるべしといひてといむれども吾妻は耳にも聞入ずいざたまへと言て打木つぼをる裾さばき二人女童を脇立に三尊佛の御來迎玉の笄ゆら〳〵とゆらぐ光明駒下駄の運歩をうつす

八文字縞子二人は極樂にすくひとらる、こゝちにて後につきそへ歩み去ぬ〇かくて油賣親子の者は富士屋がもとに去青貝の坐敷と稱ずる一間にいたりて見るに風流清雅にして且美麗なり唯光耀て見る目もまばゆくにならぬそら燒の薫室中にちりばめたるひとすら鼻を襲へり床柱床縁違棚の板袋棚の戸のたぐひはさらなり天井欄間の明障子の腰板扉風歩障の縁行桁簞笥のたぐひ都て青貝を鏤たり二階の厨子文臺文車文臺のたぐひ料紙硯匣香道具棊双六の盤嚴器鏡臺枕のたぐひ皆青貝ならずといふことなしはぢなく雛放女童等か持運酒飯の器を見るに是等もすべて青貝を鏤さり誠是仙窟に遊が如く長文成が筆ならでハ書盡をべうもわらずとぞもはれけりしばしありて繪障子をさとひらき衣のれとなひはら〳〵として吾妻が衣服を着かへて出たる姿を見るに打掛も帯も青貝織と云織物にくれはやはの手を盡ぎして西湖の十景をこまやかに織せたりさて油賣の男のそば近く寄て笑を帯郎の計すでに成ぬる上はもいやれん名をわかし給いれかしといふ油賣はいまだいらへもせざりけるに明障子をへだてるかなたに人ありてたかやかに打笑さすがにかしこき君なりはやくも曉給ふかな今は何をかつゝむべきいでれの賢油の正体をあらばして見せやさんといひッゝ立出たるは乃是笑腹蟻右衛門にてありけるさて蟻右衛門かなたにむかひかねてまうしつけれきたる用意の品をこれへ携へ出よとよばゝりければかしこまりゝといらへて許多の歌妓幇間等廣蓋のうへに黒羽二重に鹿子紋つけて白ぐゝりの袖べりしたる羽織小袖茶の下着箔の帯摩打たる切箔の疊紙平鹿地の一ッ印龍阿保秋山が川原軍のさまかきたる扇紫のれき頭巾書院鬘子をへそへていたり大盡の身上の具をのこりなく載てさゝへ出大勢立のゝりて油賣の男のむをげなる布子をぬがしめかの美麗なる衣服を着せかえければ忽よき大盡の姿となり上座になはりて脇息に身をよすればかの老女いかるか下座に居がはりぬ吾妻

はなほ揣策ッ、郎は實の油斷にはあるまじと推量せしに果してたかはずなやてかゝる戯をし
たまふそと云ば蟻右衛門ま、み出是全く戯にわらず其いはれいれの語て聞すべし此人は我し
たしき友にて山咲餘吾郎といふ人なるが此度所用有て上京しれのれ前の日となひて此曲中
を見物に來りしに此主れん身を見そめて頻にまミねん事を望とゝへどもおん身はいかなる富翁
嘉客にも容易にいまみえたまはずすでに頃日納尾賀堂左衛門とかゝふ金持の武士の浪人れん身
を深く懇じさひて許多の黄金を費せとも一夜の枕もゆるし給ふまじとれもひれのれ媒の意にて餘吾郎ぬしの誠心を見すべき此計をれもひつきぬ唯かり
そめの戯となれもひ玉ひそとゝへば餘吾郎も其詞の尾につきて今蟻右衛門ぬしのいはれし所
のとく少しもいつはりなうず我姓を山咲といふを山崎にとりなしてれもひつきたる汕賣かくま
で辜誠心を露ばかりも受れをめたびねがしといひければ吾妻はいとうれしげにて烟花のいやし
き妾が身をさばかりれほし玉はるとは何をもてかこれに報はべる兒妾これまで許多の客を接はへれど或は酒を貪るあり或色に耽るあり唯笑を買歡を求る事のミを知て香を憐玉を惜の眞ある人にあはず彼を見これを見るにつけても郎が如き志誠の人い又得がたしいかでか等閑にれもひはべるべきさるにても彼老女は何人ぞとたづぬれば餘五郎いはくこれも蟻右衛門ぬしのいからひにて諸國の靈場を拜にめぐるよしの旅の老女とけふ一日雇ひてきつるなりといひさして老女にむかひ汝を勞ゑて我望をとげたれば骨折代にこれを與るなりといひて彼五兩の金を與へければ老女は金をうけれさゑてよろこびやかて別を告て歸けりかくて歌妓數間等さま〴〵の藝をつくして酒をすゝめ吾妻もみづから琴をかきならゑて饗應けれは餘五郎は遊仙の夢をなすこゝちにて魂九天の上に昇り手の舞足の踏どころをしらずやうやく時うつりて夜にいたり酒酣な

るとき吾妻餘五郎が手を携て閨房にともなひぬ○かくて餘五郎は此日を始として此一條の春路にまよひ守役の十字兵衛には神社佛閣に詣し所舊跡を遊覽するといつわりて日毎に此曲中に來て吾妻にまみにけるに吾妻も餘五郎が美男なると趣あるに心をかたふけて水もらさじとぞちぎりけるしかれども吾妻ハ餘五郎を養父のめし出され去同家中の士なりとは露ばかりもしらず餘五郎ハ吾妻が素姓をゑる事なし去程に餘五郎は吾妻に深くしたゑむにつきてものがたき十字兵衛がまえをしのぶを憂とにれもひ一計を思ひつきて十字兵衛にいひけるハ我石工がいふ所を聞に石塔に用うべきよき石當地にあり合さゝるゆゑ他國へいひつかしてよき石をとりよするとなれば今しばらくいとまいるべければ汝は且前に紀の國に赴き高野山に登てしかるべき墓地を見たて宿坊に逗留ゑて我到るを待べし我は當地に殘り石塔の成就するを待て後よりゆくべしといひけれど十字兵衛は老實なる者なればこれを僞の計とは露ゑらずしのらば左樣に仕るべし隨分石工をいそがし玉いて一日もはやく彼處へれん越有べしといひて旅裝束をとゝのへ紀の路をさして出去ぬかゝりて後は餘五郎たれはゞかるものなく吾妻が許に逗留して旅宿にある日ハ稀ありけり爰に又鮒尾賀堂左衛兵門といふ武士の浪人此年の春より吾妻を深戀慕て許多の黄金を費とゝへ共あづまい殊に彼をきらひさま〴〵の事に托ゑて接さりけれバます〳〵胸をこがし手をつくし品をかへて相見ん事をもとむれども一夜のそひ臥は更なりしたしくものだにいいざりけれぼ堂左衛門は深くこれを恨けり扨餘五郎は此程ゑばらく吾妻が許に來らざれば吾妻はこれを愁び若心變にやなど思ひ屈ー鬱々としてたのしまず病に托吾妻打籠居たるに一夜野ぶせりの乞食とれはゞきもの古蓑籠を背れび富士屋の奥庭より吾妻が閨にしのび入獨臥居たる吾妻を捕へて手拭を口にはませ蓑籠の裏にれし入てこれをれび舊のそところより逃れ出飛ぶが如くにはしり

去大なる川のほとりにいたりける。に此に一艘の船を繋て待人あり彼野ぶせりは此に爲臨をれろ。
ゐて裏より吾妻を引出し口にはませたる手拭をとり捨て吾妻を船中に投入たり吾妻はきえ〳〵
となりて人で、ちもなかりけるが稍あり目をひらきうちわな、きつゝ月のひかりにつきて四
邊をかへりみるに此川は渺々として宇治川ともおもしき大河なり此船にある人は則是堂左衛門
なれば吾妻は唯あきれたるばかりなりしかるに堂左衛門は野ぶせりを船に乗しめて且褒美の金
をあたへ船を遙に漕いださしむ吾妻は船中に打伏て泣居さま夕立の雨に蓮の花をそこなひ木枯
の風に玉の枝を折れるにかとうたがはる堂左衛門は怒れる面色にて船中に座し吾妻を詈ていい
はく汝聾にあらすは我いふ事をよく〳〵聞我汝がた免に許多の黄金を費といへども我を瀬人
のごとくいをきらひてあはざるはそもいかなる理そ金だにもちうれは何者にもあれまみゆるが阿
曾比のなふひならずや我汝にからき目を見せて十が一ツ憤をはらさゞと思ひてかく尊出しぬと
いへば野ぶせりも詈りて口をとゞめずさて此船を遙むかふの芦深きところに漕人て堂左衛門は
堤の上に飛のぼりこづから携たる吸筒をとり出しまくり手して船中を見れろし其女を此に引
あげて我酒の伽をせよといへば野ぶせりはこゝろえんといひつゝ吾妻を引立て堤にのぼらんと
するに吾妻はたゞ聲をかぎりに泣さけべば堂左衛門います〳〵怒りやをれ汝我に打れんと
かなといひつゝ手酌に數盃をかたふけて又船中にくだり來つみづから吾妻が手をとりて引たて
をもとむるかといひつゝ襟首をとらへて引倒しければ櫛笄くだれてばら〳〵と落元結きれて髪
んとするに吾妻はたゞ聲をかぎりに泣さけべば堂左衛門います〳〵怒りやをれ汝我に打れんと
の黒髪みだれけるが堂左衛門拳をにぎりて打んとするを吾妻ふりいなちて梳に立よりいとすさ
まじく張りおつる氷中に飛ばらんとせしを野ぶせりの乞食ありてふためきて抱きとゞめぬ堂左

衛門は胡虜汝身を投る体をなして我を赫さんとするやたとへ汝死去たりとも我汝を人しれず葬
出させたれば我に於て何の難義かあらんさりなから汝も去泣やまず命を失はずもやくなきとなり汝も去泣やま
ば放て歸らしむべし泣やまずはいつ迄も歸すまじと云にぞあづまはやう〳〵泣やみければ堂左
衛門は野ぶせりに船を漕去めて舊の處に歸り吾妻を岸の上に投上て船はいづくともなく漕去ぬ
吾妻は毒蛇の口をまぬかれたりと雖も此ところいすべて草茫々と生しけり露濃なる野原にて方
角だにしれず殊更夜中なればいつくを心あてにか走るべうもあらず恰足なき蟹の如くなればす
べきやうなく只聲をいなちて泣けるとき側づかひの女童が聲してこちの君何にかおはれ給ふ
目を醒し給へとゆふに心つきて睡を醒せばこれみな南柯の夢なりけり吾妻はいとたゆげに息を
つきくるしき夢を見しとよといひて身上の汗をぬぐいせ居たる折しも花車の女來りて吾妻にむ
かひ堂左衛門ぬし御身を贖だし給はんと議ぢたまひて身の價を千兩にきは免此庭の冬牡丹
の花の散比凡廿日を期に金を渡して曲中を出し給はらんと約したまひぬれん身い彼主をきらひ
給ふよそいわぢき心ぞかし彼主の如く金多く持たる人にれもはれ給ふはれん身のよき幸なら
ずや身受の事もよろこばしくれもひたまへといひてそゞろ笑を吾妻はこれを聞とひそしく胸つ
とふさがりてしばしいらへもせざりけり○遥れもんはかりなき時は近き愁ひ有とは今餘吾郎が
身の上なり餘吾郎いとめの侭ぞい路用の金のうちを遊興につかひけるが後には吾妻を揚づめに
して奢をきわめけるゆゑ纔の間に彼當住金の二百兩石塔料の百兩まで殘らずつかひ盡しけるに
そいかにすべ兒と思へど更に術計もなければ此ほどは吾妻が許にもゆかず旅宿に籠居てひたす
ら心をくるしめけり吾妻か方よりは日毎に文をれくりけるが一日の文に堂左衛門妾を贖出さん
といふとにつきて急にまみへたきよーをいひ越ければ餘五郎はます〳〵心をくるしめ其夜かし

とへゆきて吾妻にまみへけるに吾妻いひたすら身受の事を歎きよき思案して給れかしとはひつゝ泣のみなり餘五郎今更常住金石塔料のなくてかなはさる金をも遣ひ盡せしとはさすがにいひがたく先當座の心をなぐさめて後に屓計をはぶこすにしかしと思ひしからば我急に本國へいびつかれして金をとりよせ堂左衛門より前に贖いたすべしと言ばあづまはこれを聞てそこしく心を安んじ酒酌かいしなどして鬱結をなぐさめれるが餘五郎は元來酒量あさけれども忽ち酔て愁を忘れん爲に酒を飲すごゑて此夜も爰に宿し翌日も歸らず又三四日逗留し四日めの日彼青貝の坐敷のいえ近に出て庭の木草を詠めッ、二人しめやかに酒を酌かはしけるがあづま手匝をさぐりて錦の服紗につゝみたる横笛を取出しこれいえ妾が父の秘藏せし濕髪とまうせ笛なりれん身過つる夜の物語に笛を好給ふよしのたまひしかさだめて堪能にれはそらめ妾も片端をまなびぬれど愛節滋身にしはべれば靜心なくすて於きぬねがはくはをしへたまはれといふ餘五郎いいくれのれとても拙けれど所望とあれば默止がたしとひ居て其手をとしへ餘五郎指を壓ばあづま是を吹ぬ此ひつゝ弁笛といひて一ッの笛を二人ならび暖氣なりしが此庭の花壇に植たる冬牡丹の花霜雪の欺をれそれず咲みだれて國色天香春の花にもをさゝれとふず造化の不思議をあらはせり殊に奇なりと云べし去かるにあづまが手飼の猫花の下に睡居たるが忽眠を醒して二ッの蝶を目かけ縦にく一輪は白しこれいはゆる雙頭の牡丹なり時に二のめぐりて餘念もなげに狂ひけりかゝる折しも庭さきの柴折戸の外面に白木の手束弓に短冊をあ二ッの蝶一ッは白一ッは薄縹の色なり是もまた奇なまたつけて持たる歌占の女遊超耳をかたふけて笛の

は笛を吹すまし其聲咽々悠々として人をして腸を斷しも猫います〳〵蝶に狂ひつひに薄縹の蝶をとりて喰殺しぬ時に北風はげしく吹て牡丹を搖動しけるが忽赤き方の花はら〳〵と散て白き方い恙なし餘五郎これを見て笛の手をとゝめていはくあな不思議や牡丹花下の睡猫は其心蝶にあり我は心牡丹にあり一枝に二輪の花咲て赤白二色にわかる事豈天工の私ならんや昔唐の玄宗皇帝沈香亭前に牡丹を植て楊貴妃と共に愛し玉ふ是ずなはち双頭の牡丹なり帝これを見そなはして花木の妖なりと賞じ玉ひ楊國忠にたまふと聞牡丹い花の王といふ一枝に兩花の王有事今すでに南朝北朝と別れ給ひ一天下に二人の王のれわしまゝに異ならず然に南方の火に屬せ紅牡丹水に屬す北風のために散矢しは北朝の聖運強ましく方のともからの衰花を散し給ふ前表ならん前の年信州苫形の城にて亡びたる相摸次郎時行並にその其砌打死したる大佛九郎貞直等が殘黨餘類南朝の天威を假て足利殿を亡んとはかるよし緋威の鎧草に身をのためたる冬牡丹霜の劍はしのぐとも北朝の烈風いかてか防力あらん今見しでとくりと心の愁もうち忘ていとよろこばしけにいひけるが吾妻い紅牡丹の散たるい平家に屬し時行か殘黨滅亡に疑なきをまれかくまれ足利方にとりては吉祥ないふ二ッの蝶は夫婦も同然郎と並て百歳を花に宿て過さゞと心の願も遂られず女蝶の方は飼猫にとられて非命に死すといふ我方のうへの不祥ならん昨夜もまうせし如く堂左衛門廿日を限て根引せんといふよしなれば妾は此牡丹の花の散時節のいやくいたらんを愁るこいよ〳〵彼が方へ根引の相談きはまるときい活存ふ心にあらずかねて牽牛織女の絶ぬ契を羨て比翼連理と攝ひし事も其時は胡蝶の夢とおぼしめせといひさして餘吾郎が膝に顔をゝあてゝ聲もをしまず泣ければ餘吾郎は背を撫捺りていたはりぬ扨前程より外の方に立たる歌占の女い花壇の方に

は目もやらで頭をかたふけ今聞し笛の音い尋常ならず女のはける足駄にてつくれる笛には秋の鹿かならずよるに聞夫い鹿笛これも美人の吹すさむ笛の音いろのいぶかしさよとうちひとりごちてぞ居たりけるかゝるをりしも餘吾郎が奴僕汗もしとゝに息もつきあへず庭づさひにいそがはしく來りければ歌占の女は庭木のしげりたる裏にかくれ入ぬかの僕は庭上に跪き餘吾郎にむかいていはく御旅宿に大變事出來いわゆる變事迎ひにまゐりぃと〳〵ㇾかしといへば餘吾郎はいぶのしみそはいかなる變事ぞとたづぬれば僕いはく此にてはまうしがたき事にてぃざとく〳〵と急がすにぞ餘吾郎いなほ心ならずいそがゝしく身支度して僕を共に歸けりあとには吾妻が何事やと胸をいたむる物案じ吐息して居たりしが彼歌占の女は木陰を出て又柴折戸のもとに立寄壁たゝやかにいひけるゝ夫歌はいひの小夜の手枕むすびさだめ玄世をまなびて今にたえざる妙道なり夫婦の相生縁むすび待人の來る來ざる伊勢の濱荻名をかえて浪花のとのよしあしもくはしく判じてまゐらはすべし占にはせ玉へや歌占とはせたまへやといひければ吾妻はこれを聞よき初に歌占爰に呼入とふべしと掌を打ならして女童をよびかう〳〵せよと彼方にもきかの女をともなひけれは吾妻は出はべり一番に手にあたりたらん短冊の歌を讀ゝへ〳〵はしく考てまゐらすべしといへば安きと心得玄いだせば吾妻は心を神に念じをしへのごとく短冊をとりあけみれば

　鶯のかひこのうちの時鳥しやが父に似てしやが父に似ず

といふ歌なり女しばらく考ていいくれん身ゝ幼くて實の父をうしない養父に育られ給ふならずやといへば吾妻いはく誠にてよくわひぬ猶くはしく叛にてたびゝへといふ女又いはく鶯の子ゝ子

なりけり時鳥の鳴音かなしき宿殊にて度々難義ゝあるべけれど鶯にあうといふ字音ありあういう逢の訓に近く又來る春の幸に逢と云ふ占なりたのもしさよとうちひとりごちはぶきわらうれ玄や苦しのるまじくいかといひて喜ひぬかくて彼女吾妻がかたはらにおきたる笛を見て目をはなたず卒爾ながらといひつゝ乞とりてうちなかめこれは濡髪といふ笛にはあらずやとひへば吾妻いぶかりいかにしてこれを見知り給ふやとたづぬるに女いはく我いかでか是を見たかふべきれん身は伊勢の國の樂人二見太夫是次といひ玄人の娘なるべしかくいふ我はれん身の姉なるは其證を見すべしとて懷より笛の箱を取いだ玄て見せけるに濡髪といふ金字ありこなたの笛をおさめ見るに間に髪を不容符を合せたるか如き箱なれは吾妻は且おどろき且よろこびさては姉うへにてわれしけるかかねて母御のものがたりに姉うへありとは聞しかどれん身と妾とわづかに年三ッちかひし兄弟にてばゝ侍らず今日はからずも此笛か證となりてなから悦き此姿と泣〳〵いへは姉は涙をおしのごひをすくふために身を實玄といふ事は風のたよりに聞しかどいづくと所もさたかならねばなつかしくはれもひながら尋ぬべき便もなかりつ先づいやく聞たきゝ母人のれんこと悲なくれはずや否と問へば養父も母御もれもひかけねは今は御出世あそばしぬ夫につきては物語るべき事さまざまなり爰に八日も端近なればまづこなたへといざなひて奥の一間に入にけり時に箕股蟻右衛門沙土七といふ僕をつれて樓上をくだり此所に出來て四邊を見まはし聲をひそめてゝひけるは此も端近なれども我汝が心底を見とゞけしもゑ密事を語て聞すべかず我かねて隱謀あるにより執權職山咲庄司に何かな罪をれはせそうしなはんと思ふ折節餘五郎

加上京を幸ひ彼をそゝのかして此曲中に誘ひ放捨者にせばやと計しが彼は原聰明て思慮淺からぬ者なれば詐もなき迄からめと思ひの外吾妻が艶色に迷て心を亂し許多の黃金を費し父の代參して高野山に納むる金までも殘なくもちひ盡せ迄樣子なれば當分鎌倉に歸る事能ふべからずこれによりて我且彼よりさきに鎌倉に歸り彼が在京の中の放埒をくはしく主君にきこえあげて譏言をもちひなばおもくは切腹かろくてあはう擧ひは必定なり迄かるときは其罪を父庄司にもおよぼさじ先て親子ともにうしなふべく思ふなり我宿望をとげなば汝にも祿わまた與へてよき武士に取立得さすべし喜ばしからずや主用も已にと、のひ今夜が曲中の餘波なれば阿曾比どもを呼來りて汝もともに一盃をかたふけ前祝せよといひければ沙土七は小踊してよろこび勝手の方へ走り去ぬ蟻右衛門はたのしげに臂枕して寐そべり膝の頭を打て拍子をとり月にいつらき小倉山里名はかくれざりけり曲舞々の音唄を調ッ、寛々として居たる折しも旅裝束したる武士庭づたひに來るをみれば是乃梅个谷郡領の家臣綾田紺九郎なり蟻右衛門はかくと見るよりいそがはしく身を起して立向氣づかはしや紺九郎迄何等の事ありて上京せられしぞといへば紺九郎は息もつきあへず火急の事を告んため夜を日につぎて上京し和主の旅宿をたづねつるに此所にあはすと聞てこれまで來たり爰は路近にて密事を語りがたしかるべき所に案內し給へとく〳〵といそがすれば蟻右衛門は益氣づかひなくまりたる小坐敷に連去てはやく樣子を聞したまへといふ紺九郎膝をひそめていはく和主と我とかねて心を合せ蛇个谷の老女の味方につき日月影个谷と梅个谷の両家を亡し其勢に乘じて塾懷の旗を飜し南朝の天威を假奉りて北朝をかたふけ平家再興の時を得て我輩も一國の主となり歡樂をつくさはむべしと企たる隱謀の密書を山峽庄司に奪とられて隱謀あらはれ庄司君命をうけ上京して和主を捕へ鎌倉にひくとて旅の用意

をすると聞、こはいかにすべきと驚く間もなく我主人にも告たるにや我宿所に捕人をむけられしを危き所を斬拔辛うじて逃のほりぬ和主もとく〳〵逃支度し給へといへば蟻右衛門は忽面色青草の色に變じ心あはて、ものだにいはざりしがしばしありていふやう隱謀露顯のうへ片時を當地に足をとゞめ兼難し一旦兩人わかれ〳〵に身を隱て時節をうかゞふにしかじ再會の所はかやう〳〵と耳につきていひければ紺九郎は打點頷て出去ぬ蟻右衛門は沙土七を呼出して大略を語聞せ汝もしばらく身をかくせといひて持出去ぬかくて時刻もやゝうつりて此日も已に二階坐敷奥坐敷間毎〳〵に酒宴を設或は彈或は謠笑ふあれば耳語ありれのがさま〳〵興じけるに唯靑貝の坐敷のみは人けもなく灯火もたてざりけりかくて初夜過る比庭さきの萩垣をおし破てしのび入たる白髮の老女樣に上りてひし〳〵と歩ゆき闇にも光る梟の眼をくばる廣坐敷の違棚に載あり迄吾妻が手箱に探りあたりて彼笛を奪取懷に押入て退き出んとしたる折しも吾妻はそゞから手燭をとり姉を導て此ところに出來り老女を見つけてあやしみッ、手燭の光りに顏を見てヤそなたはいつぞや餘五郎君に雇れて來つる婆々ならずやといへど老女は見もきゝもせずものをもいはず去んとするを歌占の女弓をもて押戻せば老女はこれをふり拂ひて突退出すを歌占い弓を斜に取なほしてやらじとさゝゆる即坐の杻しばらく挑あらそひぬ時に怪哉老女が懷にかくしたる笛れのつから音を發しけれれば吾妻は驚きさてこそ曲者其懷こそあやしけれといひツ、手燭をさしつくれば老女い手ばやく打落す二人い探る暗まぎれに行方もしれずなりにけり

愚乃錄曰蛇个谷の老女なる事除方を招き軍用金を集るため諸國の靈塲をめぐる旅の女に身を

扨しもばらく當地に足をとゞめしが此夜笛を奪ひとりて又他國に赴きけるとなん

○木枯の果はありけり記念の竹刀

扨も其時餘五郎は僕のむかひ心なうざれば道をりしといふ南方十字兵衛腹十文字に掻切て朱に染りて伏居たり餘五郎はこれを見るよりこはそもいかにとあはてまどひ抱き起して見るに既に息絶身上は氷の如くに冷かたまりければ唯あきれて物だにいはず良あり てやう〳〵心をしづめこは何ゆゑにてなりしやといふかり傍邊をそれ〳〵自筆の書置ありいそがはしくひらき見るに其文にいはく

君僕を當地に殘しおかれ先だちて紀州高野山に赴せ給ひ僕は御石塔成就の日を待て後より參べしと命じおかれし處御留主のうち旅宿のつれ〳〵に偶五條坂の遊君にしたしみ て勿躰なくも御先祖御追善の爲に御携あそばされ僕に預おかせられさる常住金をつかひ捨今に至りて先非を悔自殺仕しやうと〳〵殘金百五十兩御座しが此金子を石塔料に遊ばれ乍憚御父君へよろ〳〵きこえあげさせられ僕が死骸御かた付被下しかば〳〵生々世々難有儀に存じ恐惶頓首

永和元年十月某日　餘五郎君

とかきたり餘五郎これを讀終て頻に涙を落し扨い我放埒に金子を殘らずつかひ捨ける事を知り我罪をおのれが身にかひて切腹しのちく〳〵までも馬鹿者不忠者といはれんをいとはず我をかばひて死したる忠志たとへいふべきものだになさ戰場の打死も後代に美名を殘さめと思へばこそ命をもをしまざれ汚名をいとはず忠死せし者い古今に稀なり不忠者となりて死したる心庭をはかり思へば腸もちぎるゝ〳〵ちすなり今果思ひあはすれゞ前程富士屋の庭の胡蝶のありさま不

南方十字兵衛

群なり歌占の歌に

北は黄に南は青く東白西くれなゐにそやいろの山

といひて南方は青きにかたぶる此をもつて考れば淺黄色の蝶猫にのまれたるへ此南方十字兵衛が非令に死をべき前表にてありきものを唯冬の蝶のめづらしとのみ思ひしは凡慮の拙き所なり彼を思ひ是をおもふに我傾國の色に迷ひ祖父追福の金を失ふのみならずあたら忠臣を殺せし事不孝といひ不仁といひ我身の罪の重きことと計り知べうもあらず今後悔すれども更にかひなしとひつゝむなしき骸に取つきて悲嘆の涙にむせかへる生る人にものいふ如く嗚呼面目もなき我放埒ゆる玄てくれよ十字兵衛こゝろざしい過分なれど汝になき罪をおはせいかでかながらへ居らるべき我も今自殺して汝か死路をしたひ生れて此恩を報べしといひて書置にそえたる玄てとゝのへ石塔料に殘しおかれけるやと此不審はれずなほ四邊をかへり見るに十字兵衛が常に身をはなさゝる刀に乍憚此刀は餘五郎君へ記念に差上參りしとかきたる紙札をつけおきぬ餘五郎これを見て誠に是は前年相撲次郎時行信州苫形にて亡びたる剣ぞ此十字兵衛日月のれん旗と尊て我君判官に差上さる抜群の功によりて我君より賜たる朝烏といふ名劍にて陪臣の身に稀なる譽なりとて當時羨者おほかりしと聞我は其時幼年にて思へば夢の一昔幸哉我今此刀にて切腹せば主君のれん手打になる同然にて聊罪を贖よすがともなるべーと心を決し兩肌をぬし脱て彼刀を抜放玄けるにこれ眞の刀にあらず竹にて造りたる刀にて十字兵衛が自筆の文字ありこれを讀に

拙者此度の切腹犬死に相成可申樣御短氣御愼遊し可被下い
とがきつけたり扨て此刀の身を資て百五十兩の金をと、のへくれたるに疑なし此竹刀のかきつけといひかくまで深く我身のをを思ひくれける心底の過分さよといひて又死骸にとりつき泣けるがいかに思ひかへしても活てい居られずきたてんとしたる折ふもやはやまり給ふなと聲をかけて次の間より走り出餘五郎が手に取つきてとゞめたるい庄司が僕卯平といひて此度鎌倉より飛脚に來し者なり餘五郎は手をとゞめ汝は何用にて上京せしぞと尋るに路平は手をつき頭をさげ恭々いひけるは拙者は昨日京着仕いまん卯君連夜れん夢見わろきゆゑに君の御旅中を殊の外氣づかひ給ひて拙者に命せられ安否をとひ奉らん爲飛脚に參りしなり君只今迄自殺遊されいては十字兵衛は犬死になりし彼が短氣をゝめ犬死になうざる樣にと其竹刀に書殘せしい此事にいへば彼が忠死をれん憐そしはいまん身を全うおそばされよき時節をもつて十字兵衛がれん身にかゝりて相果し汚名をすゝざれん南方の家を恙なく相續仕樣によく〳〵御賢慮をめぐらされくだされかと昨夜十字兵衛密ふ拙者を近づけてやせしは其方上京せしてそ幸なれん供の若黨奴僕はけれども口さがなければ我心腹をおかしがたし其方は新參なれども見處あれば我思ふ處を一通りいひ置わけ我自殺の後餘五郎君もし面目なきなどれほしめして卒爾のれんふるまひもあらば我になりかはり此理きこにあげてとゞめ奉れといひ殘しし子細を今十字兵衛になりかはりて具にきこにあげいべければ十字兵衛直に申上る事とれほしめされて一通りれん聞くだされれん自殺をれんとゞまりくだされが汚名十字兵衛坂へれん通ひある事を露ばかりもしらず先に紀の國へ去べしとある命にしたがひいまだ若年のふん方と手放して遊所れほき都の地に長く逗

留させまうせしは我一生の誤り今悔どもせんずべなし我已に高野山に逗留して相待やそといへども御登山なければこはいかなるもゝにと御遲滯と氣つかはしく思ひ急き歸て一昨日京着し若黨奴僕等に聞ば五條坂に連留し給ひしれん歸りなきよしくはしくとへば常住金石塔料とともに殘らずれんごかひ捨の樣子なればこはけしからざる事我れん側につきそひ居らはいのやうにも諫言を申しあげてさある御不行跡はさせまうすまきにしなしたり殘念とれもへぎかへらずこはいかにすべきとれもひ煩なのばへ昨日石工來りれん石塔殘らず成就せしもゝに代金をまうし受たくいといふ旅中なれば金をと、のへ償べき手段もなく情なやれん國元にては少しもあしきれん行跡はなかりしが畢竟傾國の色に心を亂し給ひての事ならめ尋常の諫にては御本心にいかへり給ふまじと思案をきはめたれば我一命をさゝげ奉りてれん諫まうすなり又朝烏の刀は身にもかえがたき物なれども時の用には是非なければこれを資代なして金子百五十兩と、のへれきぬこれを百晒石塔の價につかいされ殘る金にて石塔を高野山へのぼせ玉ひせめて父君の御願望のなかばを遂られ一日もいやく鎌倉にれん皈りありて我書置をもつてゐん身の雲を晴され必ず〳〵我切腹をれん悔みなきやうにまうし上べし父君のれん目が祿にて餘五郎君の守りに付そひ來る我なれいづれの道なも切腹せざればまうし分たちがさしれなし死る道ならばれん身にかはり共罪を引うけて死すべしと已に覺悟をきはめたり是れん父君をあざむくに似たれども其罪は冥途にりれん詫をまうすべく思ふなり此度の放逸無惡を御後悔あそばされ此後は阿曾比くるひい勿論すべてわしきれん行跡をかたくれん愼みあるやうに我にかはりてよく〳〵きこえあげくれよといひ殘し兜角君のれん事のみ苦に仕り國に殘せし妻子や孫の事なども心にかゝりおもしく思ひはれんが夫等の事は一言もいひ殘さゝる心のうち

を御推量あそばされいへかしさばかり厚き十字兵衛が忠心も今御自殺遊ばしてい水の泡を相成いん此處をよ〳〵御分別遊ばされくだされかしとくれ〳〵し〳〵物語りて悲嘆の涙せきあへず餘五郎もこれを聞て益〳〵嘆きに迫りけるが暫しありていひけるい十字兵衛らいひ殘したる詞といひ此竹刀の書置といひ死ぬも死なれぬ義理なればせまるべしさりながら夫にをても十字兵衛に常住金をつかわれ石塔ばかり高野山に建たりといひてれ免〳〵國へい歸りがたき理なれば我はしばらく身を隱しせめて朝烏の刀を買もどして十字兵衛が家名を立る便とすべし汝は十字兵衛が此書置を携て鎌倉に歸り我は面目なきとて京都より直に行方しれずなりしと父母に告てくれよといひふくめさて十字兵衛が亡骸は病死の体にして鳥邊野に葬りの金を用ひて石工に價を償ひ石塔に書館をそへて高野山に送りつかはし此度召連たる若黨奴僕等は此所より直に暇をつのはし路平一人を鎌倉に歸らせ旅宿をあけ渡し十字兵衛が忠義の魂をこめたる此刀い我一生の守にもべしと餘五郎これを腰に帶て此所を立退洛外の菜畠村といふ處の小家を借昨日に變る涙〳〵の憂身となり手づから煮燒の業をなして志ばらく月日をおくりけり〇かくて路平は鎌倉に歸り主人庄司夫婦の面前に出て十字兵衛が書置をいだしかやう〳〵と告たりけるに庄司夫婦はこれを聞十字兵衛が忠死といひ露志らず彼日來の老質に似ず不忠のいたり言語にたえたる行跡なりとて怒り强く頓に十字兵衛が妻子を召呼右の始末をいひ聞せ書置を見せければ十字兵衛が妻眞弓是をみておきれはて兒子南餘兵衛と共に且驚且歎けれども庄司の怒りつよけれバ少の容赦もなく其家財を殘らず取上妻子を啞方拂にぞしたりける十字兵衛が妻眞弓といふは夫に年四ッ五ッまさりて半白の老女なり兒子南餘兵衛といふい前年妻とうしなひ窓太郎といひて今年五歳の男子ありかくて餘兵衛窓太郎を背おひ母の手をひきて年ひさ〳〵住馴たる鎌倉

を立退涙に袖もはしあへずたのむ木陰も雨漏こゝちして立よるべき所たになければ眞弓はなはうち歎き夫十字兵衛どの日頃ものかたき氣質にていさゝかも邪みたる心を持ず行ひの正き人なるに今更年にも耻ず阿曾比ぐるひに主人の金をつかひ捨給ひしと妻子の前も耻給はずやよも本心にはあるべからす物に狂ひやし給ひけん自殺し給ふとも汚名い世上に隱れなく彼が類は武士の風上にも置まじき者なゞ、死後までも辱められ給ふ所に心つき給はずや家名を汚すのみならず子や孫まで不忠者の子供等と一生人に指さゝれ忌嫌はれんを不便とはおぼさずや恨めしの十字兵衛どの情なき夫やと涙にむせびッ、かきくどき主人の罪を身にかづきて忠義のために死せしとい夢にもしらぬぞ哀れなる餘兵衛も歎きい盡ざれどもはてしあるべきとならねば母をなぐさめッ、つひに鎌倉を出去ぬ扨僕路平はいかなる所存やありけん直に暇を願て行方しれずなりにけり

餘五郎旅宿より千金

〇我雪とれもへば輕し身受の千金

餘五郎旅宿よりむかひ來て歸しより後は吾妻が許に音信をせざれば吾妻はいと氣づかいしく思ひ文かき人を雇ひ旅宿につかはし音信を聞けるに使歸りていへるい餘五郎ぬし旅宿を明わたして國にも歸り給はずいづちへ行玉ひけん行方しれずと申すといひければ吾妻はいと氣づかいしく思しく胸つぶれて露現もなくおされまどひッ、さていれはく黄金を貰し玉ふゆゑにしかなり給ひとふらず夜もねられず月日を過をべきこゝちもなけれどいかにむすべる露の命强面消も失なで焦れ物を思ふのみなりかくて日をおくりけるに鮒尾賀堂左衛門富士屋に來りて吾妻が身の代金とゝのひうれはいよ〳〵身受すべしをいふにぞ富士屋のあるじ吾妻をよびてかう〳〵といひ聞

せ堂左衛門ぬ玄の方へもけと云に吾妻はいらへたにせず只泣てうけがいざればゐるにはいそ
らたち花車の女にいへるい吾妻身受の事をうけかはぬい我ま、のいたりなり彼の姿に背を捨
れきてい外〳〵の阿曾比等にわしき癖つきて我活業の大なる妨となれば打呵てうけがはせよ
といへは花車の女心得ひといひて吾妻にむかひ或いもる、理を說ひかせ或強くいひこらせ
ど餘五郎ならでい夫にせまじとかねて心に誓ひをれば大に怒りいでさらば辛目見すべきとて吾妻をと
てあましてかう〳〵とあるじに告るにあるじは大にらへて上着の衣をぬかせ旦づのに肌着一ッにして玄
ぎ帶にて高手小手にくゝりつよく打擲ければ吾妻い聲かる、までに泣さけぶを庭に引ゐろきぬかばかりの名妓をかく情なくあつかふも利をのみ貪る烟花の無仁なる人心なるべし此夜堂左衛門此の樓上に舞妓歌妓をあまたつどへて酒宴し笑とよめき席上ゆすりみちて興しけりこれい堂左衛門吾妻に辛き目を見せ此方のたのしげなるを聞せて靡すべき心なるべければそは極をしらざる愚旦さにて吾妻に嫌い、るも宜なり此時は已にこれ霜月にて寒氣殊に嚴く空のけしきはげしう風吹あれていみしう降くだる雪紛〳〵揚〳〵として柳絮の飛にひとしく鵝毛を散すがごとく見るうちに高く積て一面に玉を敷かとうたがはれ假山泉水庭の木草洲濱形葦手形立石時石灘落し架垣石灯籠のたぐひ庭上の好景前栽の莊嚴すべてみな白妙に埋れて心くるしう遣水もいといたうむせびて池の水もにもいはずそこきに吾妻は松の木につながれて薄綿の肌着一重なれば寒氣肌にとうり身上いら、き手足凍てたへがたきに身をもだもれば松のこずゑの雪さとこぼれかゝりて身に積ぬ彼方の樓上にい舞妓の立舞影明障子にうつり歌妓のうたふ聲も聞にぬけふは越路の人の月あすはいづくの人の花扨もかたての沙婆世界れもふてたびね白糸の昔

がましじやなか〳〵に染てしんくの糸のもつれのもの思ひ
とうたふも我身のうへと思へばいとど悲く泣よ旦りてあなくるしやたへがたやれもふ岸にいそ
はすまじれもはぬ方に花咲とは身のうき草のわけしらぬ情なき心ぞかしいかに妾を憎とも雪責
といあまりどやかくまて苦痛をさせんよりは一思ひに殺してよとくぎきたて、泣叫ど彼方の樓
上の騒にまぎれてきこえざれば誰ひとり哀と思ふ者だになし雪います〳〵降まさり吹雪に打れ
て撲地倒れたふれては起上り涙と血と相和して瀧のごとくに流しッ、氷の地獄八寒のくるしみ
忽身をとぢて紅蓮の衆生に異ならず元結きれて顏にみだれかゝりたる黒髪も雪積て白髪のご
とくなましき身も氷をくみて倒れ伏息もたゆげに喚てぞ居たりけるかくて時刻もうつりッ、小
夜もやうやく更わたりて坐敷〳〵の人語もやみ雪も降やきたるに庭ずゑの竹林さや〳〵と鳴て
つもれる雪散乱れあやしけなる者つといでくり吾妻い此ときやう〳〵頭をあげ雪あかりにこれ
を見るに覆面頭巾廣袖の衣服手甲股引まで雪にまがふる白裝束しのびの者と見にたるが雪踏分
て歩來つ小脇に抱たる千兩箱に吾妻身受金と書たる札をつけたるを彼方の坐敷の床の間にする
れきて身を轉し此方に歩み來りて吾妻が背後に立まいり氷なす刀をすらりと拔放しければ吾
妻い驚き括れながら飛退けるよくゝ思へいか、る可賣をうけんより死ぬにしかじと思ふにぞ
覺悟をきはめて身を投つけ襟さしのべていざ殺せ〳〵と云案にたがひて曲者はあづまがいまし
めをきり拂ひものをもいはず背にれひてもとの所かく〳〵りいで玉塵を踏ちらき雪烟を蹴立てい
づく共なく走去あづまい夢の裏になは夢を見るこゝちして此者に負れゆきぬ思ふに千兩箱を擔
てしのび入人を盜て逃去しは世にめづらしき盜人なり是かならずいはれあるべし

夫は扨おき餘五郎い洛外の茶畠村といふ處に隙あらいなる蘆の屋の憂節淺き栖をもと免て獨いおせく暮せしが夜の雪いみしく降くづれたる壁のひまをもる寒風肌を斬が如くなれば臥ながら目もあはず終夜來方行末のとなどれもひつゝけて夜をあかし烏のなき渡る比起あがり火打とりて火を打圍爐裏に柴を燒てあたり居たるに外の方に人のうめく聲きこにければいぶかしみッゝ氷つきたる戸をのらうじて引あけ見るに小雪は降止たれど滿地にたかくつもりて一面に白妙となり氷柱と劍を逆に植こみたるやうに見にて身上いらゝぎぬ門首の雪をかき分つゝ竹の編戸をれしひらき外の方を見るに赤きひた鹿子の小袖を着て黒髮を乱したる女身をなかば雪にうづみうつぶしに伏てうめき居たりいのなる人にやとまず〳〵いふのりつ立寄て引起し見に是乃吾妻なればこゝ思ひかけずとうち驚き急ぎまろび〳〵なるを抱て裏に入醒藥をのませ燒火に身をあたゝめなどしければやう〳〵人心地つきて目をひらき餘五郎を見てこゝそも夢かといひさしてとりすがり且うれし涙にむせびけり餘五郎い吾妻が背中をさすりていたはりツゝいかなるゆゑにて彼處には居つるぞとたづぬければ吾妻は涙をれしのこひ雪責になりたる事の始よりあや玄き者しのび入て身の代の金千兩を殘しおき背に負て五條坂より此ところまで走來りすてゝ行方しれずなりし終まで詳に物語りければ餘五郎はこれを聞て眉を顰そはこゝろ得がたき事かなそなたの身の代を償ひながら何ゆゑに齋が如くせしや又千兩といふ大金を出しそなたを齋て我門にすておきしも不審なりそも且何人の仕業なるや我は少しも心當りなしそなたはいかにといふ吾妻も不審はれず妾も更に心當はべらず唯夢とのみおもはるゝなりさりながら身の代を償て妾が難義を救ひ出し處もおはかるべきにおん身の仕給ふ此門首にすておきてゆきしは妾をおん身にそはせ給はる深き情の志ある

人の仕業なるべし兎まれかくまれ身の代の金償れたる我身なればおん身と夫婦になるとも妨なし今あらためて妻となし給われかしといふ餘五郎いはれぬ餘五郎が胸の裏の苦しさ何といはまの百合の花さしうつふきて詞なし吾妻い餘五もへぞもいはれありてそなたを妻よなしがたきよかならず〳〵つれなき者となれもひそといへば吾妻はつと膝をすゝめていそがしくいふやうさては前に齋給ひし詞はみな虛にてはべりしか此際に至てしかのたまふはさだめて外にいひかはし給ふ女あるゆゑなるべしさる事のはべらばなどてとくにいのたまはぬぞ恨しや情なやと息巻りゝいひて餘五郎が胸板をとらへ右左にふり動ち泣叫にぞ餘五郎はほど〳〵もてあましていはれありとていふはさる類のをにあらずといへばしからば其いはれはいかにと問詰られあけていはれぬ餘五郎が胸の裏の苦しさ何といはまの百合の花さしうつふきて詞なし吾妻い餘五郎が体を見ていよ〳〵心變せしに疑なしとおもふにぞます〳〵恨み泣悲みけるがとても五條坂に歸て堂左衛門が方へゆくべき心なければ此にて死にしかじと憂悟を極餘五郎が傍にありける一腰をとりて拔放し吮につきたてんとしてよく〳〵見れば是竹の刀にて拙者此度の切腹大死に相成不申樣御短氣御愼遊され可被下ひと書付てあればいぶかしみてほにず猶豫けるが餘五郎其手をとらへていはく自害とまでおもひ詰たる賊心の默止がたければ口外しがたき事なれどもうちあかして聞すなりそなたと夫婦にならねばといふいはれは原其竹刀より起るなり个樣〳〵と彼常住金石塔料の金つかひ果したるにより南方十字兵衛我身にかゝり罪をかづきまでの始終枝葉も殘らず物語鎗倉月影个谷判官の家臣なる事も此とき始て語りけれは吾妻はこれを聞て扨は妾が爲父とれなし君に仕ふるおん方にて有はせしかと打驚我身のうへの事も

つばらに語りげれば餘五郎も彼は原同家中嵴元澁右衛門が養女にて勤之助と兄弟なることを始て知縁あれば千里を隔ても逢易く縁なげれば面を對去ても見えがたきといふ常言もうべなりと感嘆き吾妻ふたゝびいひけるは十字兵衛どのとやらんさばかり忠義の人なるを非命に失ひしは皆妾が身より起たる事なればつれそはれぬとのたまふは實理なりさりながら今更妾が心の趣を破他に嫁すべき心なし此身をいかにすべきとひさして聲を放ち身をもだへッ、泣叫ければ餘五郎も其心根を不便におもひて涙さしぐみいな〳〵十字兵衛を失ひしはそなたの身より起るとはいひながら畢竟は養父の急難を救ふために身を賣しとなれば一旦孝の道も立ぬ我はそれにはひきかえて不孝不仁の罪深し十字兵衛が此竹刀の書れきをむなしうせまじとそれもふばかりにかくながらへて居るぞかしさりながら同家中嵴元氏の女と聞うへはそなたの身をあやまたしてはなはさうに義理たゝねば十字兵衛か靈魂に詫言し此竹刀を媒人にして妻となし朝鳥の刀の行方をたづねのひもぞして鎌倉に歸參を願ひ十字兵衛が家をたて彼が靈魂を慰すべきなりといへば吾妻はこれを聞蘇生たるこゝちにて喜ふ事かぎりなしときに餘五郎立上りて佛壇の扉をひらきうちを見れば及學義劍信士俗名南方十字兵衛永和元年十月　某日と書付たる白木の位牌をすゑて香花を手向の水を汲かはして合掌し南無幽靈　頓證　佛果菩提南無阿彌陀佛みだ佛ととなへとかく涙はとゞまらず餘五郎は手向に祭る体なりあづまはこれにむかひて念佛をとなへつゝ同向に向ひなりわびしきくらしをいとはず羅綺の重衣にたへざりしむかしにかはりて木曾の麻衣わさましく身はやつせどもの川竹の憂さはもぬけのあきの蝉聲のしぐれをなぐさめつ際ひさゆひ前垂のそがたを今の氷仕業心汚さぬ身ばれにい鍋の數なき庭竈阿彌陀佛の齋にもすゝ

ふにたらぬ白粥のけふりもほそき竹火箸流しの水の飛鳥川菜刀を研とにかくて米淅桶の底叩てうるにかひなき吹竹の飢にたへざる節もあれどみどりの帳紅の針のむしろを敢へかて破屏風に古夜着を駕籠の衾とむつましく物たよぬをいぶせくもれもはで日をおくりけるが昔調たる琴の音も松風の時雨とかはり鉢敲寒念佛の聲もやゝ氷りて世の人のすさまじきものにいふなる師走の月もかたふき胸敲星佛寶の交加街上に年木積車の音さへいそがはしげにて年浪のよせぬ水に柵もなく寒梅の花のかはりを暦の與に忘納てすでに此年も暮にけり明れば永和二年の春なり餘五郎始のほどは十字兵衛が殘しおきたる金の餘にて朝夕の烟を立去が坐して食へば山も崩坐して飲ば海も乾の理なれば今は殘るく用盡しこれより後いかにして日をおくるべきと何にまれ活業をはじめずはとれもふうちに程なく彌生の比となりやゝ夏に近ければ時の物とて夫婦ともにはんじ物の團扇の繪をかきて纔の價を取ぬ此家のめぐりはすべて畠なるが時しも菜の花の盛に朝夕黄金の色は目に見れどもれのをおくるのみなりとて十字兵衛が命日にあたる日餘五郎手づから菜の花を折此花の色に似て金色の佛に成かしと思ひッ、これを佛壇に供ずるに物にあたりて二ッに破ければいつになきあやまちせしとの氣かゝりさよ妾が汲たる手向の水冥途にれはす十字兵衛どのゝ心にかなはぬゆゑにか原我身より起て非命に死去たる人なればさも理ありと涙さしくゝつゝいへば餘五郎は打笑ひさばかりのあやまちはいつせんもしられず氣にのくるは愚痴なりとふにぞさもあらんかといひて再別の器に汲かえてぞ手向けるかくて餘五郎い十字兵衛が墓參すとて出去吾妻は夫のかきを去れさたる團扇の繪をかきたて時刻やうつりけるに餘五郎鳥邊野より歸りて裏に入んとせしに家の傍の竹藪の陰より武士に仕ふる

奴僕どもはばーき者出來りて窓の下に彷徨れれば餘五郎はいぶかりッ、裏に入ず去てこれを窺ひ居どは去らざるや彼者は窓の下にて咳すればこそ吾妻は給をかきをして立窓より顔をさし出して何にかあらんたがひに囁き或は點頭或ひ笑ひなどして彼者もはかへり吾妻は再給をかきてぞ居たりける餘五郎い此体を見て益いぶかりけるがさあらぬ顏去て裏に入ば吾妻は出もかひれもひしよりはれん歸のはやかりしなどいひて常にかはる事なく晝飯と、のへてまゐらすべしとぃひて庖廚に入ぬ餘五郎は手を叉き物思ひ顏して居けるにしばらくありて外の方に案內を乞者あり餘五郎立出て編戶をひらき見るに金鍔白柄の兩刀を帶衣服もなみならず富たる武士の浪人とれぼとき打扮なれば何人にやとれもひしに編笠とりたる顏を見れば五條坂にて見知たる鮒尾賀堂工衛門にぞありけるしかれどぃも見知たるのみにて初對面なればそれともいはず何等の用ありてれいせしぞといふ堂左衛門いいく委きとはゆるやかに語るべしゆるしへといひつ、遠慮もなく打通りて坐につき某今日和圭の宅をたつねて來つるなりとて錦の袋に入たる白鞘の刀を出しこれをとくと見へといふ餘五郎これを取しぷ〳〵扱て見るにれもひかけず十字兵衛が賣代なせし朝烏の刀なり若ひが目にやと打返し〳〵見るに其紋星の行が如く其光波の溢るゝが如く水には亢竜を斷陸には犀革と斬べき金鍊の精れのづからあらはれて疑べうもあらねばうち驚き此刀いかにしてれん身の手に入しやといふ堂左衛門いはく頃日刀劍を商者のもとより買得たり是和圭の買得さればなりがたき刀ならずやいかにもさありれのれもとめまくれもふなり價はいかほどにやといそがはしくいへば堂左衛門うち笑て價は則金千兩なりといふにぞ餘五郎はあきれて詞もなかりしがしばしありていひけるはれのれ見給ふ如く貧身なるに殊更千兩といふ大金をいかでかと、のふる事あたふべきや其價の半を減じ給いらば古鄉へまうしつかはして金をと、のへ買とるべしそれも急にはなりがたければしばらく日をのべ給はれかしといふ堂左衛門いはく頃日刀劍を商者のもとより買得たり是和圭の買得さればなりがたき刀ならずやいかにもさありれのれもとめまくれもふなり價はいかほどにやといそがはしくいへば堂左衛門うち笑て價は則金千兩なりといふにぞ餘五郎はあきれて詞もなかりしかしばしありていひけるはれのれ見給ふ如く貧身なるに殊更千兩といふ大金をいかでかと、のふる事あたふべきや其價の半を減じ給いらば古鄉へまうしつかはして金をと、のへ買とるべしそれも急にはなりがたければしばらく日をのべ給はれかしといふ堂左衛門いはく頃日刀劍を商者のもとより買得たり是和圭の買得さればなりがたき刀ならずやいかにもさありれのれもとめまくれもふなり價はいかほどにやといそがはしくいへば堂左衛門うち笑て價は則金千兩なりといふにぞ餘五郎はあきれて詞もなかりしかしばしありていひけるはれのれ見給ふ如く貧身なるに殊更千兩といふ大金をいかでかと、のふる

事あたふべきや其價の半を減じ給いらば古鄉へまうしつかはして金をと、のへ買とるべしそれも急にはなりがたければしばらく日をのべ給はれかしといふ堂左衛門いはく頃日刀劍を商者のもとより買得たり是和圭の買得さればなりがたき刀ならずやいかにもさありれのれもとめまくれもふなり價はいかほどにやといそがはしくいへば堂左衛門うち笑て價は則金千兩なりといふにぞ餘五郎はあきれて詞もなかりしかしばしありていひけるはれのれ見給ふ如く貧身なるに殊更千兩といふ大金をいかでかと、のふる事あたふべきや其價の半を減じ給いらば古鄉へまうしつかはして金をと、のへ買とるべしそれも急にはなりがたければしばらく日をのべ給はれかしといふ堂左衛門いはく頃日刀劍を商者のもとより買得たり是和圭の買得さればなりがたき刀ならずやいかにもさありれのれもとめまくれもふなり價はいかほどにやといそがはしくいへば堂左衛門うち笑て價は則金千兩なりといふにぞ餘五郎はあきれて詞もなかりしかしばしありていひけるはれのれ見給ふ如く貧身なるに殊更千兩といふ大金をいかでかと、のふる

樣子を窺居る吾妻ハ餘五郎が側に寄れん身ものを思案し玉ふぞやと〳〵離別の證書を書て妾にいとまたびねといふ餘五郎いはく汝しかいふハ彼刀がはしさすべき心なるべけれといかほど彼刀を買し給て我を鎌倉に皈參立べきや殊更同家中　階元氏の娘　なれば我たとひ鎌倉に歸參するとも澁右衛門どのに對しかう〳〵と何の顏ありて語らるべきやをりとて刀を買もどさゝれば十字兵衛が家た、ずそのゆゑに我は唯前程よと胸を割る、ばかりに苦くれもふなりといふ吾妻いはくいな〳〵刀い買とも買ぬともそれん身の心にまかせ玉へ妾は夫に管ず實は堂左衛門主にそひたく思ふ故なりといふにぞ餘五郎は唯惘然て吾妻が顏をうちまもり居けるが忽面色變りまく〳〵手していく最前よりの樣子いぶかしく思ひつるにさては汝が心い變しよな吾妻いか、のたまふまでもいはずいかにも心變しなりそのもをはよく察しても見玉へかし我身五條坂にありしときは綾錦を身にまとひ口には美食に飽たる身がれん身にそひしより貧きくらしをなし去年の冬もとき衣の單にて寒夜と過し馴ぬ手鍋の水仕業春も越路に歸らざる此おかざりをよく見玉へ辛苦にやそる我姿苔井にのぞむ水鏡も昔の影いなきぞかし彼につけ是をれもふにかくたのみかひなきれん身を慕何不足なき堂左衛門主を嫌しに妾が一生の誤り今後悔するもをにいとまをとり彼人に連添て偕老の末までもたのしみを我身にせんとれもふなりとく〳〵離別の證書をかきてよとて硯と紙をつき出せば餘五郎は怒の皆ひきあげッ、汝これまでの實心に打て變し其詞五條坂にて遊し言も反古にする心にや返答せよといらだてば吾妻い打笑ッ、遊女の詞にいつはり多く薄情なるは當のならひなりいつまでも實ありとおぼし給ふは愚なり我を恨むは理ならずれん身の愚よりとあきらめて去狀をとく書てよとゆふにくたげにいひければ餘五郎は大に怒り聞はぜ害生よ

もれとりし女今は見るも穢いしとて前程彼か取落玉て破たる茶椀を取あげこれ是を見よもといへ全き此茶椀も一旦破れば繼とあたいず手向の水を覆せしも夫婦離別の前表にて覆水再器にもとらず曆手の此茶椀の破し片は三行半是が則去狀がわり是持て何方へなりと出去と吾妻が顏に投つけさり最前より始終の樣子を窺居たる彼僕此時舌を吐微笑してなは竹數にかくれ入ぬ折しも擅出す晩の鐘胸にこたゆる黃昏時約せし時刻と堂左衛門戶なし駕籠を雇て來ければ吾妻はいとうれしげに出むかひ餘五郎どのも得心にて妾にいとまたびたればとく〳〵運てといそがす餘五郎は堂左衛門に打對ひ心の窗し不貞の女緣を斷てつかはすなれば約束の如く刀を渡せと氣をせけど堂左衛門はたちつきてえからば離緣狀と此刀を左右に取かもべしとゆふにぞ餘五郎はいそがいしく行灯に火をとも去狀をかきて渡えければ堂左衛門も餘五郎に刀を渡しこれでさらりと埒あきぬやよ餘五郎云までもなけれ共是から吾妻に指さす事をならざるぞ此方の女房いざ給へといひて吾妻が手をとれば餘五郎は參をにぎり齒噛して怒の淚はら〳〵と落すを吾妻は顧て打笑未練な男と嘲つ、懷紙を投つけて戶なし駕籠に乘うつれば堂左衛門立寄て駕籠の垂を撲地れろえいそげ〳〵と下知をなし駕籠を飛して走り去ぬ餘五郎はなほ怒に堪ざりしが嗚呼よく〳〵思ひめぐらせば不貞の女を追出しはからず此刀の手に入しはかへりて我運強き處なるべしとひとりごちたる折しもれ竹數の裏よりふた、び又彼僕れ出其刀をといひさして手をかけたるを早足を飛して蹴倒せば起上りて一腰を拔放し眞額二ッと斬つけたり餘五郎は彼刀の鞘なから丁とうけとめ又斬つくるを打拂ふ拍子に鞘は飛散て拔躰の銳劣彼僕が鼻頭に閃々れれば敵しがたく思ひけん早足を出して逃去ぬ餘五郎は持たる拔躰を一眼見てこは〳〵かにと驚きッ、灯火にさしつけてよく〳〵見れば先刻見たる朝烏の刀にあらぬ偶物なれば尻居に

倒て只惘然たるはかりなり去ばしありて吐息をなしさては我を誑んと偽物をこしらへ其の刀とすりかにて渡せしか我今怒に迫てあらたためざりしは不念なりこれをもへば吾妻心の變しは一朝一夕の事にいあらず今まで眞心とおもはせしも我を殺す計策ならん先剋今の奴僕と窻越に明しも堂左衛門が內通を聞いせ去に疑なしゝかる時はいまた枕はかはさずとも共心は姦通なりはじめは嫌し堂左衛門と心を合せ我を誑き偽のを刀與へたる人畜の淫婦いで退去て堂左衛門もろともに四段となしせめて此憤をはらすべしと裙端折てかけ出しがいな〳〵我韋駄天の足ありともよほど時刻のびたるうへに行たる方角もしれざれば退去べきあてもなしもひまはせばまはすほど彼が如き人畜の女としらず遊女のならひ虛言を誠と思ひ不實の罠にかゝりしは皆是我誤なり何面目にながらふべき殘ばは去き此刀をもて腹かき出してほど〳〵突たてんとせ去が是乃十字兵衛が遺物の竹の刀なればす一腰を扱放し腹かき出してほど〳〵突たてんとせ去が是乃十字兵衛が遺物の竹の刀なれば我ながら狼狽しと心つけてこれを見れば

拙者此度の切腹犬死に相成不申樣御短氣御愼遊ばれ可被下候

と書付あれば氣の張弓も弦きれてがつくりと我を詫め此書置たとひいかはぼ去のびがたき事ありともたる後の後までも不盲してあのづから我を詫命をまつたうせざれば此書置に對し顏なしとおもひなはして竹刀を押戴自殺をとゞまり十字兵衛が位牌にむかひ合掌して我誤を詫にけりのゝる時しも二ッの蝶てふ窓より裏に飛入て灯火をしたひ灯燈のめぐりを飛しが二ッの蝶もろともに油皿におち入ぬ餘五郎これを見ていく爾雅翼を閲に菜の花蝶に化すといへり蝶又菜種の油火をしたひ遂におのが身を焦すに至るは是いいもる爾に出者ゝ爾に反る理なり是を姦夫堂左衛門淫婦吾妻に比ずる時は爾我を誑

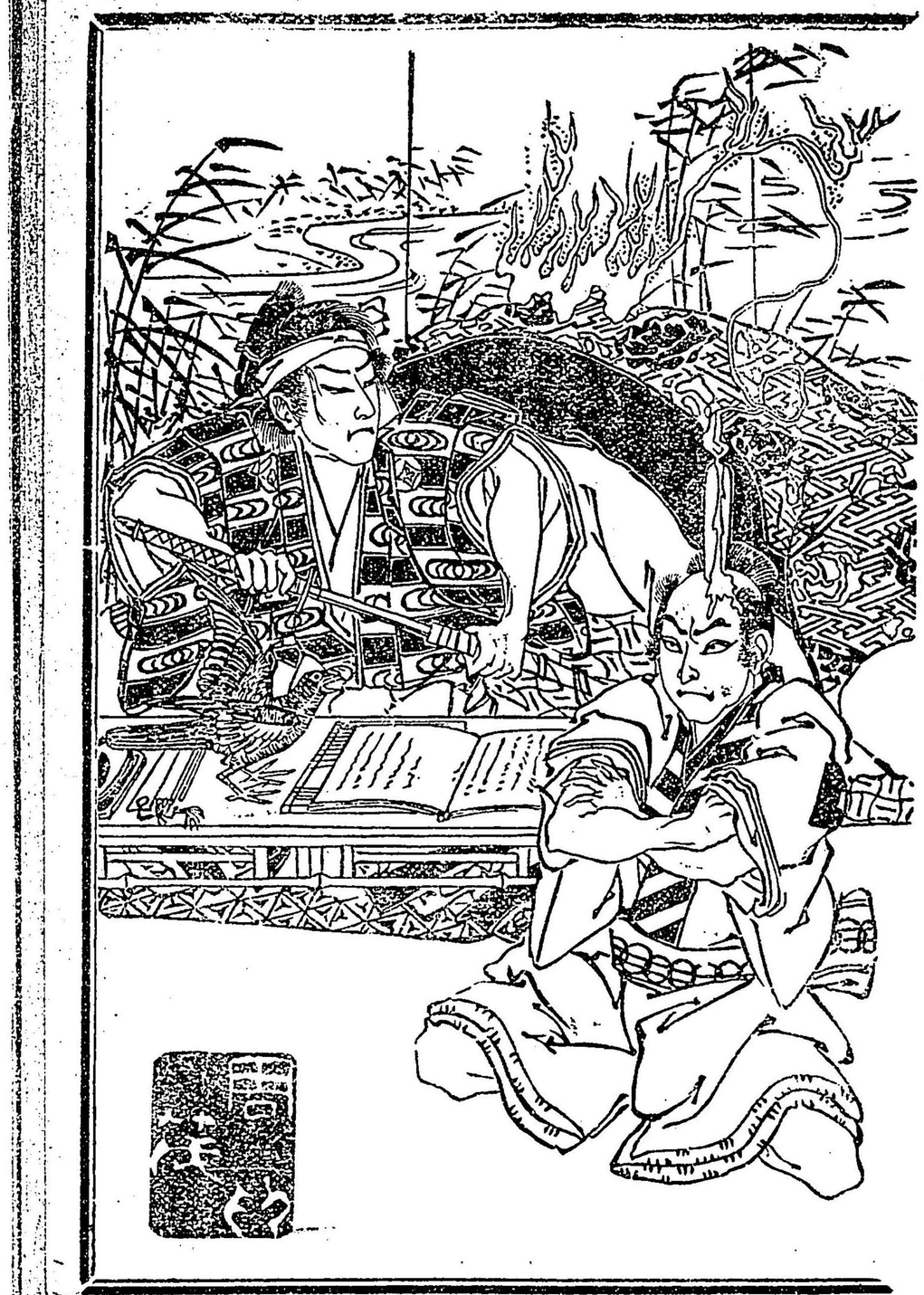
又爾を誑んしめぐる因果の丸行燈豈其報なからんや彼我に偽の刀と與へたれば我又偽の狂人となりて彼等が行方をたづね眞の刀を取もどして我本意を遂べ去をひとりごちて十字兵衛が位牌と竹刀を懷にかく去入みづから髮をかきはき手向し菜種の花を把うちかたげて狂ひ出れゝ眞晝の如き夕月夜に里の童がこれを見つけて背後につき氣ちがひよ泡齊よといひやす餘五郎ゝ扇をひらきて蝶の如くにひらめかしこれ是を見よ童等蝶は菜種の花に狂ふ吾妻ゝ我を狂ゝそる踊人が見さくは北嵯峨へ去て見よ北嵯峨の踊は花笠をしやんと着て踊る振がれもしろきとうつ、なきこと云て菜畠を踏ちらしッ、狂ひ去ぬ

○白露や無分別なる性命の質物

爰に又洛外北岩倉に幻竹右衛門とゝふ武士の浪人ありけりさだまれる活業はなしといへども何不足なき住居の樣子見越の松も世にすねたる丸木造の門揩庭の植髭亭坐敷苔を賞美の手水鉢水草のしげる池水も清か濁かよそ目には去れぬ主の心なり比は卯月のをはりなるが此家に仕ふる兩個の奴僕石燈籠に火を燃去手水鉢の水汲かはいかに思ふて世にめづらしきゝ此池の四季咲の燕子花毎月上十五日は其花枯凋下十五日はあれゝの如く花咲て勢よしそれにひきかへれ旦那は上十五日紫燕の花の凋時は常の如く健にれゝすなれど下十五日紫燕の花咲時は瘧の病をわづらひ玉ひて外出をならず病床に蟄居玉ふてれも又稀有な病にあらずやといへば此方の奴僕が云くいやそれゝ猶めづらしきといふゝ我等かゝゝる事と夫婦が嘆くをれ旦那が聞つけ玉ひ露助が首を五十兩の質物に取玉ひさだめの月が

傍輩彼新參の露助が事彼ゝ近頃まて妻もろともに此村ずゝに住しが唖にてものいいぬはかゝゝし
き活業もなく貧くらしをして居たるが何にかあらん急に金の入事ありて其金なくては命にも

きれ〳〵ぱたとひ首をきらふともわれ旦那の心まかせになさるべき約束なりよし其さはめの月も今月が限にて今日は則晦日なれば月かされたらいかにあらんと女房がそれを苦にして昨日より旦那へ日延の願に來たりしがいかさま我々が置質物どもが一人の首を質に取とは世にめづらしき事ならずやと口喃はなべて奴僕の癖なるべしかゝる折しも障子の裏に咳の音たてつゝ主人の聲していひけるいわな叫聒き奴僕どもも夜に入まで何口たゝきてひまいる、ぞとく〳〵下家へ退けといふも彼方の障子ごしかりそめに呵るにも烈言は主人の氣質奴僕どもも打聽いらへの聲も口の裏下家の方へ退ぬかくて時刻もやゝうつり亥の刻の土圭ひゝけば亭座敷の明障子を左右に開き此家の主人竹右衛門痩衰たる姿にて左結の鉢巻の病に惱む龍居に吳郡の綾の細夏の風すら厭にや後を圍金屏も四邊耀一間の裏錦の小夜着を打懸て病床ながら札に向ひ歌書をくりかへす傍にかしてまりたる奴僕の露助頭に燃す蠟燭の流る、歎き窮屈さ貧濁涙の泣顔を皺めてこらへ居たりけり竹右衛門書を讀さして露助が面を見やりいかに露助苦きか堪がたきかすこしにても身動すると蠟燭が倒る、ぞといへば露助うらめしげにて物いひたさも痴の悲さ指を以て掌にたとひ晝夜睡ずとも仕へまゐらす心底なれど拙者が頭を燭臺にし給ふはあまりとやせん情なしと書て口に指さし仕方すれば竹右衛門いこれを讀て白眼つけ情なしとは何證言証書の文言を汝はやく忘しかといひつゝ傍の手箱を探て一通を取出し今更にあらた矣て讀聞すにはれよばねぞも忘しならば再聞とて之を讀其文左の如し



一拙者之　質物証文之事
活首一箇

右貴殿方へ質入仕金五十兩借用申所明白也尤五箇月を限受戻可申候若定の月限れいはゝ拙者之首御取被成いとも違背申間敷仍て証書如件

永和元年十一月某日

北岩倉村
借人　露助
妻
相文
關兒

幻竹右衛門殿

雙蝶記

竹右衛門これを讀をはりていはく此通の文言なれバ受戻をぬうちハ汝が首は我物なり殊に此月が其さだめの五月目今日は乃晦日にて今一時過子の刻に至ればはや明日の分なれば質は流れる灯臺にするハれろか我心まのせにたとひ首を斬とも違背はなるまじ我心にそむかばもるさじと呵つ、再机に打向ひ餘念なく書に見とれて居たる折しも一陣の風颯とれろ玄來て庭木の梢をゑ〳〵と吹ならし池に盛の紫燕の花もう〳〵と動とひとしく花の裏より一道の陰火閃〳〵と燃出て此方へ飛來しが忽一羽の子規と化て机上に羣振し二聲三聲ものかなしげに鳴にれり竹右衛門いろそがはしく露助に對ひたとひ何が出やうとも動かならず此方をふりむくな見るな〳〵といふ間にすつくり背後の方に緑の髪をふり乱し色青ざめたる女の幽靈髣髴とあらはれ出竹右衛門を外背にかけてさもうらめしげなる顔色なりさしも強氣の竹右衛門忽わな〳〵瘧病胸をおさへて苦しむ体露助はあな怪しやと思ひつゝ彼方を見んとふりむけば竹右衛門いひけるは又此方をむ

くか汝が首は我物なれば汝が自由に動かぬ事はなりがたきぞむくな見るなと前程より制をを汝い聞ぬかと呵られて向もむれぬりくりつけ猪首になりて坐し居たり扨竹右衛門は幽靈に打向ひ悵望を滅して成佛せよとす、むるにまだ迷て出たるか立去退とよば、りッ、刀を拔て斬拂へば幽靈は消失て時鳥は 明 障子に飛つき口より血を吐出して障子の紙にれを、こひといふ假字を書つけたり露助はよのひのね我を忘れてふりむく拍子に頭の蠟燭撲地れち時鳥は及再一圍の陰火となりて飛去ぬ此時土圭のひゝくを聞ばずでに是子刻也竹右衛門は落たる蠟燭のいまだ消ざるを取手燭に立て机にすゑ置露助が襟首つかみて膝もと近く引よせて聲あらゝげやをれ惡き奴かな五十兩の金なくては一命に替るといふ危急を救ひつかはしたる恩と忘れ證書の文言にさへたがいて我詞を背く横道者と罵つ、病に屈せぬ強氣の主人手速用意の繩を把て露助を高手小手にくゝし上椽より下へ蹴落しければ露助い外背ひきあげ惡れる体いはねど顏にあらはれたり竹右衛門いなは白眼つけ質物に繩をかくるいひゝけば汝が首の質物いはや流れぬ我曾 試 見んとれもふ新刀の刀わり幸ひ汝が首を打放して世間のならひと知ざるや今すでに子の刻の土圭前に積重様さきに燭臺を立ならべて下家をさして入あとい晦日も月と耀けり此時外の方ひそやかにしのび足にて旅乘物を舁來り門外にすゑ置て従者い殘らず歸りけり是何人歟しれがたしさて竹右衛門い白鞘の刀を携へ庭下駄はきてしづ〳〵と庭にをり立露助が側近く寄此刀を試にいざも見せず座をしめ直して覺悟の体刀いかなる斬物か知ねぞも病はうげたる手の裏で我骨究竟なる汝が骨組よし〳〵と打點頭手水鉢の水を拇拘に汲とりて刀に灑ば露助いわるびたるけきれるかねばつかなしと口にいはねど目顏にてそれと悟らず 呦 笑ひ惡さもにくしと竹右衛門

すでよ刀に手をかくるほど〳〵危き切しもあれやよしばしまちてよと云つゝ跳こむ露助が妻の於關蕨菟を袖にかくし夫をかこひて竹右衛門に打むかひ昨日も參りてきこえ上妾が身を賣て金をとゝのふるまで今しばし日を延て給れと頻ひいべれど聞入なきゆ始より試物にし給はんとのれん心にてありけるかさあらばそれと始よりなぞ得心いさせ玉いぬそさりながら活首を質入の証書を出せしうへい今更悔てかへらぬこと是非試ねばならぬとならば妾が身を斬刻夫の命をたすけてよ慈悲ぞ情ぞこれまうしと掌を合せてうちなげゝど竹右衛門は聞入ず女はためしの用にたゝぬ妨すな退て居よと鞘にてこなたへ突退て又露助に立むかへばいないかにのたまふとも夫い妾と殺させぬと右にとりつき左にすがり蹴ても踏てもこりすまに夫をかこふ袖屏風立つ風つ青柳の風にもまる、乱髪よその見る目も不便なり露助はこれを見てか、る慈悲なき竹右衛門いかにとも聞入まじ益なき詞をつひやすなといふを目顔で覺悟の体こゝろにつゝて竹右衛門又立かゝるを於關いなをも隔つた拍子に竹右衛門が左りの手頭を見て驚きヤア此小指がきれてあるといふを聞て露助は何小指がきれてあるかと我を忘れてものをいへば竹右衛門いこれを聞さては汝いつの癒なりしか我を欺大膽者覚念せよと刀を抜首落さんと斬つくる露助はやく身をかわしと断土俵を把て受とめけるが刀はきれもの土俵を斜に切おとし土は地上に散乱す時に不思議や許多の蛙聲ふりたて、鳴にけり竹右衛門はいそがはしく刀をおさめてためらへば露助は願て竹右衛門何ゆゑに猶豫するとく〳〵斬とゐり髪かきあけ身をすりよすれば竹右衛門は刀を袖にれしかくしゑばし頭をかたふけて

斬たくもあり斬たくもなし

といふ誹諧の句をつくりて吟ずれば思ひもよらず表にすゑたる乗物の裏に聲ありて盗人を捕へて見れば我子なり

と聲たかやかに吟ずれば竹右衛門は眉を顰俵とはふ字を二ッに斬ば表に人といふ文字今表にて不審はうべなりそれへ通て對面すべしといひつゝ乗物の戸をさとひらきて立出ゑは五十歳計の老女にて女なれども脇刀を帯しは武家の行儀にや摺箔の袷の衣に唐錦の帯いや正く首桶を小脇に抱てしづ〳〵と打通れば竹右衛門は一眼見るより大に驚きこは母人にゐはずやおもひかけざるれん入來いかにゑて我栖を知召いやと猶いぶかり席を拂て上坐に通らすれば老女は怒の聲ふるいし我を母といはるゝすら穢しさよと他の事はいはぬさきよりはら〳〵と怒の涙をれとゑけり露助はせきにせきたる面色にて裏於關に眦眼すれば、ろにてかく云持たる蕨菟の裏より兩刀を取出ゑ一腰は夫に渡し一腰はおのれ小脇にかいこみて夫婦もろとも竹右衛門が右左に立ならびそり打かけて且露助いひけるは夫土ハ金鐵の精を育すゆゑに名劍土中に入ば其精天に徹といへり傳聞蛙鳴丸といふ名劍鐵精を育する土を斬とには迫りて蛙の聲を發するよし汝今土俵を斬し刀こそ蛙鳴丸に疑なし其刀を所持する汝は去年五月下旬錄倉月影ケ谷の下舘の後門にて都といふ白拍子を手にかけ逃れ去し曲者に疑なし其時我里所に行かゝり前なり流をせきとめたる土俵をとり汝が刀を受とめしに今の如く土を斬忽蛙の聲を發すさては傳へ聞蛙鳴丸なるべしとせしが其夜の様子は汝が心におぼにあらんといへば於關も其尾につきていひけるはしかのごならず都が死骸をあらため見れば口の裏に小指を含今汝が左りの手頭を見るに小指なし彼といひ是といひ都を害せしは汝なる事明白なり露助又いひけるいかくいふ我は鄰

が爲に弟なり前程の怪しみもまさしく姉の亡靈にて時鳥血を吐明障子にそれとゝひしと書たるも姉の怨魂冥途の鳥となり汝を打しめんと我を此に導たるに疑なし蛙鳴丸所持する者こそ姉の敵なれとおもひ其時燈の光にてそのかに見たる汝が面体をしやそれかにもひしゆゑいつわりて痴となり五十兩の金の入用ありといひて試つるに我活首を質物にとゞんともいふもいかしければ其詞にしたがひて金を借しは此家に入こみてなほ實否をたゝせしうへ汝が首を此方へ受取姉の仇を報んが爲なり素入用なき金なれど封の儘此にあり此金を戻すうへは露ばかりも恩はなしといひつゝ懐より金の包を取出して竹右衛門が前におき日來尋去姉の敵如此明白なれどいざ立合て勝負を決せよといひつゝ、刀の目釘をしめし於關もろとも詰寄たり時に彼老女夫婦に向ひやよしばしまてゐふことありさては其方たちは都が所縁の者なるか勝負を急はうべなれど此方にも別に又僉義すべき事あればしばしの間ひかへて居よとゝめ置懐中より印綬を取出して竹右衛門が目前に出し汝此品にそれはへおらん去年都が殺れし同日同夜下館の軍用金千兩を奪取し其盜賊一重の塀を切破て出たる樣子我其所へ行かゝり拾ひ取たる此印籠沃地に遠山の蒔繪したるはかねて汝が所持の品しかのみならず人をして聞しめしに汝千兩にて五條坂の遊君を身受せしといふ噂彼といひ是といひ彼金の盜賊は汝なる事明白なりそれを都に見とがめられて手にかけたるに疑なし我君よりかの金の盜賊ならびに都を害せし者を僉義せよと夫庄司どのに命せられたる其役めを妾に申しかえ夫にかはりて鎌倉を旅立汝が行方を探求めやう〳〵此栖に今日尋當りしも人手にかけず此母が手づから汝が首を打て父御の恥をすゝがばやとそれゆゑに此首桶現在うみの此母が此役めをわざ〳〵望て我子の首を打ために鎌倉よりはるゝと尋て來つる心の裏ぞのやうにわらふとおもふぞ斬たくもあり斬たくもなきといふ難句に附た

る我一句盜人を捕へて見れば我子なりと我思よりけぬぞ渇えても盜泉の水を飲ず熱ずれぞも惡木の陰に息ずといふ敎戒を知ぬ汝にあらざれともかならず天魔の見入しならんあな惡や不忠者不孝な奴と罵て老の手弱腕にて襟首とりて捻倒し扇を把て打擲しッ、怒の涙悔み泣身をもだへてぞ倒れける露助はなほ詰寄て姉都を殺せしはいかなる恨ありてのと解せざりえに老母の今の物語を聞て合點もきぬ積かさねたる罪科も此方の恨は姉の仇いざ立むかへいざ〳〵と夫婦もろともはげしき言老女いふたゞび辟かけてやよ待しばえ彼が口より盜賊なりと白狀を聞たるうへにて其方等に仇打の勝負をばさすべきが首は妾が受とうねば主人よりたまはりたる此首桶のれさまりつかず此方の役めがすまぬいざ子兒白狀せよいかにゝと詞の責具竹右衛門は最前より唯手を束則を低不言して居たり去がやう〳〵と顔をあけ母人さまれ聞あれ夫婦の者も我いふことを必をえづめてよく聞と坐をあらため威儀を繕ひいひけるは我本心をあかさずして夫婦のに打ればやと思ひしが母人のれん疑をはゝす爲餘儀なく實を語なり若殿玉兎君白拍子都が艶色に迷ひ玉ひて放逸無慚のれん行跡親人と始館中の老臣かいる〳〵詞を尽し理をきはえて諫言を奉れぞれん聞入なく惡行益つのり玉ひれ家の滅亡あやうしと諸臣そな海氷を履如くれもはる、よしうけたまはり我君人の身を幸としし西施を吳湖に沈楊貴妃を馬嵬に殺せし例にならひ主君放埒の禍根を絶べしとれもひつき罪なき者を手にかくるは情なく殺にしのびずといへどもれ家の滅亡大勢の嘆にはかへられずと心を決し去年の五月鎌倉にくだり下館のめぐりを徘徊せし折から續く五月雨もしばし晴間に棟の陰身をひそめて居たる所に黒裝束のしのびの者館の塀を切破て出ゆゑ曲者まてと呼とめしに小柄の小刀手裏劍に打つけて跡をくらませ逃去ぬ程なくかの都乘物にて出來しゆゑ從者を追散し都

に對て不首ず心の裏にれもひけるは後日に汝が所縁をたづね此身を打れて修羅の苦患を救べしと皆ひをなしてといへめの刀をつらぬきしが彼苦痛に堪ざりしや我小指を食切ぬ時しも燕子花の盛にて都ふ血しほは流にした、り燕子花のゆかりの色を紅に染かへしが都ゝ怨魂燕子花にとゞまりしにや彼花の裏より一團の陰花燃出都が胸もとより一羽の時鳥飛出てものかなしげに鳴夫ぬ其時行ちがひたる旅人は我推量にたがはず露助汝にてありけるか我都を手にかけし後此庭の四季咲の燕子花毎月上十五日ゝ花枯凋下十五日ゝ花咲て我又上十五日は常の如くなれども下十五日は瘧病をわづらひ夜な〳〵都が亡靈來りて我を惱ゆゑ寢食ともにならずして如此痩衰活ながら餓鬼道の苦をうくるなり彼罪なくして刃にかゝり死したればうかまぬもうべと思ひ一日もはやく彼が所縁の者に打れて恨をはらさせ成佛をさせばやと所縁の者を尋るうち露助は面体都がれもざしに似たるゆゑもしや都が血すぢの者かと心を付しに金なくては命にかゝはる事ありとて夫婦か歎とゝふ事を聞およびそれに就て實否を探り試ばやとれもひつき活首を質入せば金をかしつかはさんとわざと難題をゝひかけしに速にしかるべしといひしゆゑさてこそ一物ありと知無分別なる置所露とゝふ字の露助が露の命の質物は我ゝ風雅のためし物わざと情なくあしらいて燈臺となし辱めて側近くつかへーも怒を起させ其實を探んためなり又新刀の刀と偽りて蛙鳴丸の奇特を見せしも汝に我を疑はせ汝が素性をしらんためにしかことなり今日時いたりて恨をとゞめし燕子花の所縁の色の汝等が素性を知も正是都がみちびく所ならん昔輕大臣遣唐使に渡りしに支那の八不言藥を飲しめて痴となし身を彩畵頭に燈臺を戴しめて火を燃しこれを名て燈臺鬼といふ其子彌宰相支那に往て父を尋ぬとゝへどもえ逢ざりけり燈臺鬼涙を流しッ、指頭を食切血を出して詩を書これによりて其父なる事面を並て知ざりけり燈臺鬼涙を流しッ、指頭を食切血を出して詩を書これによりて其父なる事

を知れりといふ汝痴となりて我とあざむく我汝を燈臺となす時鳥血を吐れと、こひしとゝふ文字を書て姉の靈なることをしらしむ都是輕の大臣燈臺鬼の昔語によく似たり爾さばかり身を苦めて姉の敵を打んとれもふゝ下郎に似ざる慚心義心感ずるにあまりあり母御のうたかはしき詞はかくの通り其夜母人にもきわひしとは露しらず其所に落ありしもゑに軍用金を奪ひしも拙者の業ならんとれん疑は無理ならず拙者が詞露計も虚言ならぬ証據とまうそれ此小柄の小刀にしんとてさし出しぬ

紫の蛛もありけり池邊の盜人

當時老母小柄の小刀をうけとりつら〳〵見ていひけるは是はこれ放駒の色繪の彫物細工の妙上のつねならず其盜賊が此小刀を手裏劍に打しとなさいふ事もあるまじきさにはあらざれどもさは云忠義をれもふ若か千両といふ大金を出し五條坂の阿曾比吾妻とやらんを受出せしはいのなるゆゑぞ奪れし軍用金の千両も符合するに疑あり汝流人の身を以て千両といふ大金をいかにして貯玄ぞ又汝十六年以前剃髪の望のよし書置を殘して出奔したる身をもちて今に剃髪もせず活業もなき浪人に似合ずなか〳〵ならぬ家宅の結構衣服調度に美麗を盡すこれ以ていふかしゝこれにも返答ありやといへば其御不審い實うべなり遊君吾妻を身受せえには謂あり元來拙者が初一念とつひでに語て聞せやすはかねて母人のれん詞に我原變女の時汝を産たれば汝は總領なれとも妾腹なり餘五郎は弟なれども本妻の産玉ひし子なり我は本妻の遺言よりて後妻となる其恩甚深し必ず餘五郎を麁略にするとなかれとのたまひし事もあり原父うへは養子にて餘五郎が實母の山吹の家の娘なれば實に家の血すぢといふは餘五郎なりこれによりておのれ父うへにまうし家督は餘五郎に讓玉

ひ拙者は別家させ玉れと願ひけれども總領を立き次男に家を續すべき理やあるこれ順義にあらずとのたまひうけひき玉ざりしゆゑやむことを得ず出奔せし餘五郎に家督をとらせたきゆゑにいしろ志めす如く拙者幼年より歌學を好みいやゐ家を出て後なは螢雪の功を積て古今傳授を相續し歌學を敎て世を過す手着とし貴人富家にも弟子多これゆゑよろづに不足なしかるに餘五郎五條坂の吾妻といふ阿曾比に相馴てつひに行方しれずなりつるよし然則は我存念も水の泡家を續べき子なくては出奔したる我までもかへりて不孝になる道理なれバ且餘五郎が行方を尋ばやと五條坂に到て聞しに其在所を知者ありて扨しへいふ吾妻餘五郎が爲にあらぬ死をなしては餘五郎に背き雪責にせられて命もあやうしと聞しも名有吾妻餘五郎が爲にあらぬ死をなしては餘五郎が罪を增道理と存じれのれあやしれなる姿に打扮て富士屋の後園よしのび入身代千兩を殘しおき吾妻を連出し餘五郎か栖の門外に捨置て歸り翌日又五條坂に到彼長に對面し吾妻が年季の證書を取戻しぬ表向より彼を身受いたしてしては餘五郎が放埒なは世に廣く聞ゐ歸參の幼になるべしとそれをいとひてしかはからひいなり其身代千兩も或富家に古今傳授をいたしつかいきたる謝物の金なり彼を身受の證書にも拙者が本名をあらはして餘五郎が名をかくしいゆゑ今五條坂の小歌にも吾妻うけだす山吹餘宇兵衛とうたうときくたゞこのうへは餘五郎に一功をたてさせて歸參をさせ父うへのれん心をやすむるか願にていへば母人さま此儀をねがひ參ると心底をくはしく物語ければ母ハ感涙れしと、めつゝ、今は疑ばれしぞや義理ある子餘五郎に家を續せたくれもふハ我れ又かねての願ひいいずれ去て母子ともに心の合しも不思議なうと心とけたる物語を聞て益く露助がはるか下りて手をつかへさてはあなたハ餘五郎さまのれん兄君にていかといへば竹右衛門うち點頭いかにもさあり幻　竹右衛門といふは後の變名實の名ハ山吹餘宇兵

衛これにおはすは我實母淀瀨どのとやそなて都に手向よとく〳〵打と覺悟の体露助は頭を低今のれん物語をうけたまはれば姉都を手に懸給ひ志は原忠義ゆゑになされし事にハへハ恨むべき理なし殊更主人に向劍のあるべきやとハへ餘宇兵衛いふかしと何といふ我をさしてつれどもそれハ原仇を報ん爲の討署なれバ我は主人に似て主人にあらず露助いはく其御不審は理なり拙者去秋姉の敵を尋るため鎌倉に下りれん父山吹庄司さまの僕となり名を路平とやせしが鎌倉にて其敵をれざれば永んいとまを乞受うへ見ればおよばぬ事のれはければ南といふ宇の笠を着て露助と名をあらため此村末にうつり住ぬ去年十月それなる御母君の命により餘五郎君の御安否を聞ため京都へ飛脚に參志も侍女衆の取次にて拙者ハ新參といひ奴僕の身なればれん母君のおん顏を見奉ること志事もなく拙者が面れるは更にれん見知あるべからず繩の間にハへどもれん父君に仇し給はれと身を轉てぬかづけば餘宇兵衛は打驚をてはしかありけるか父に仕へし者なれバ我を打ともいひがたしさりながら所緣の者に打るべしと都に遁し言を遣ねは彼恨をはらすまじいかにすべきと思案の体於關い悚々そゝみ出唯今の其小柄妾に一目見せてよといひつゝこれを乞取てつら〳〵見さだ免いと驚たるれも、ちふてこれは是放駒の色繪の彫物裏に二見の二字を鐫是ハ妾が目れはにある物とて兄餘松が所持の小柄に疑なしさてハ彼千兩の賊は妾が兄にていへりしかとハひて虹のやうに消る息をつき面目なけにうちうちむけば露助もうちやとく其跡を物がれといそがすれば於關いはく今までの經そふれん身にも妾が素性を語らざれば知たまハじ妾が父ハ伊勢國の藥人にて二見太夫是次と

いひし者母は於破矢とまうせえが母十五歳の時男子を産幼名を鍊松といふ其後連に女子二人を産其一人ハ妾にて今一人ハ則妾が妹幼名を小蝶といふ二人ともに幼時別かれ〳〵に他家へ去兄のみ家にありしが兄ハ身持あしく勘當をうけて行方しれず其後父ハ亡人の數に入母ハ妹の小蝶を連子にして鎌倉小動の駕籠の塵兵衛といふ人に再縁をしたるよし七年以前其塵兵衛といふ人旅人忘れし金をあづかりおきたるに其夜盜人に入られ金を奪れて分譯なく其急難を救ために妹小蝶は手越の里に身を賣後に五條坂へ賣かえられゆよし彼富士屋の吾妻といふハ則妹の小蝶なり去年おん身鎌倉に奉公の留主の間朝夕の手着にこまり歌古をなりはひとし五條坂にゆきてはからず姉吾妻にあひ委事を聞ハべりぬ兄の行方は今にしれざれども此小柄は父の秘藏せし物にて父存生の時兄に讓ると聞ば兄ならで持べき物にあらず故に彼盜賊は兄にきはまりゆと語りければ露助はこれを聞今あらためて汝にいとまをつかはす夫婦の緣はこれまでなり其もあハれ賊人の妹を妻に持ては盜泉の水をともに飲白波の立田の山に共に入てれなじかざしの名を汚をはづればなり必我を恨なといへば於關は涙を流し然のたまふは無理ならず惡人を兄に持しが我身のあしき宿世なればいかでかおん身を恨べきとけり前程より門外に彷徨て樣子を窺一箇の武士やよはやまるなしハしまてと聲かけて走り入於關が自害の手をとゞむ於關いいおかり此人の顏をつら〳〵見てはのかに見ればある顏なりといへばうち點頭さそおろん今更名告も面目なしといひもはてず刀を抜て腹かき出し突立れは皆〳〵こはそもいかにといひて驚きぬ彼武士いいと苦けに息をつき餘宇兵衛どの御親子は更なり露助にも對面そるは今がハじめ拙者は則これなる女の兄前の名ハ二見鍊松今の名は鮒尾賀堂左衛門とやす者我富士屋の吾妻に執心深く今餘五郎が妻となりしを嫉れもひ朝烏の刀を買取て

これを媒鳥となして吾妻となづけ餘五郎を誑き偽の連歸しに吾妻が我に麾たる体をなせしい刀を手に入ん爲の計にて我に油斷をさせ眞の朝烏刀の書去狀を奪て逃出しゆゑます〳〵嫉怒にせまり此所を過しに此に吾妻が聲あれば何事にやと彷徨て委細を聞うち妹於關が自害の樣子を見るにしのひずといめしがこれにつきて我身の懺悔れん斷々に零落して遂に野ぶせりの乞食となり鎌倉を徘徊せしが小動の駕籠の塵兵衛が家にしのび入其金を奪ひ忘し財布の金をあらため居たるを垣のひまより窺見て其夜塵兵衛が家にしのび入其金を奪ひ出んとせしが十四歳バかりなる娘の寢顏のうつくしさにしばらく見とれ頻に嬋媛の心を動し殘多く逃出しかの奪たる金七十兩にて衣服腰刀をとゝのへ都にのぼりてしばらく彼地を徘徊せしうち偶五條坂に到阿曾比等のやさかひを見物せしに其うちにかの塵兵衛が娘あり前に比ればなほ十分の美色をませり其名を聞ば富士屋の吾妻といふ彼阿曾比となれど我望をとぐるに安しと喜しく思ひて富士屋に到り吾妻を揚てまみにんことを望度々のきく〳〵といへども彼我をいと嫌て一夜の枕ももるさゝればます〳〵心をなやまし何にまれ金ハはからていと惡念增長して再又鎌倉に下り月影ケ谷の軍用金千兩を奪取し盜賊其放駒の小柄のぬしは則是拙者なり其後我吾妻が爲に金錢を瓦石の如くすれども兎角靡ざれば寧かれが身を贖出にしかしとれもひかの千金を用んとれもひしに雪の夜行方ゑれず塵兵衛が娘は我妹の小蝶にて吾かの金を奪しゆゑに其金のかゝりに身を賣て吾妻といふ阿曾比となりし物語夫とは知ず我は又其金を吾妻が爲につかひ捨しも皆是惡の報ならんしかのみならず塵兵衛を現在母の後夫としらず母にも面を合さゝれば彼所に居とは露れもはず妹小蝶ハ幼

時他へつかはしおきたるゆゑ素たがひに顔を見しらずしらぬこと、はいひながら同胞の妹を
戀慕種々鬼惡をなせし事豈天罰をまぬかるべきか我れをいみ嫌一夜の枕もゆるさゞりしは今れ
もへばせめて我幸ひにて畜生道にたちいることは脫さりめぐる因果は小車の才孝の罪の火の
車それに引かれ二人の妹ハ孝もわり貞もわり彼等にいぢて年來の惡念を今一時に轉て善に到
り此自殺みづからそれと名告て出懺悔に罪を滅して死ねばせめて未來いたすかりなんと云終て
於關にむかひこれ妹今更て兄弟の緣を斷しぞこれ露助於關い我と兄弟ならねばなしかざしの
名は汚をしもとの如くに運そひくれよ又別にいふことあり奪たるかの千兩の半い其儘船岡村の
我體家に殘しあり和主とりてかのれん舘に返しくれよたのむ〳〵と云殘して刀に手を懸きり、
〳〵と引まいせば於關い苦痛を見るに堪ず悲嘆の涙にむせかへるさすが强氣の堂左衛門刀を投
捨かの土壇に這寄てみづから我襟髮をかきあげッ、いざ〳〵餘字兵衛どの軍用金の盜賊を成敗
してれん身のあかりを立玉へといへば餘字兵備目をしばたゝき都がために打るべしとれもひし
我い打れがたき義理出來りはからずして懷に入窮鳥を手にかくるをわたくしならぬ世の掟れ
せんすべなし南無阿彌陀佛と聲もろともに首打れとせば於關は軀にとりつきて聲を放て泣さけ
ぶ老母淀瀨も露助も暗に落涙したりけりかくて餘字兵衛堂左衛門が首を取上て露助に對我此首
を受にさめたれば汝が首の質物は其儘返しつかはすなりとて質物の証書を投與へ前程返せし此
五十兩の金は堂左衛門がとむらひ料につかいすとて金の包を於關にわたへさて堂左衛門が首に
彼小柄の小刀をさしつらぬき首桶に藏て母の前にさし出しいざ軍用金の盜賊の首れん受取くだ
さるべしといへば老母はうち點頭此首を受とれば我うけたまはる役目もすみ彼玄のをつく五月
雨に汝が着たる濕衣を今ぬぎ給てあたらかなりとて喜べは餘字兵衛また露助にむかひ我曾て測

髮の望ありといへども都が爲に打るべき心あり
をさりせめて都が恨をはらさん母人をま家督の儀は餘五郎に續しめたまひ拙者には剃髮をれん
免玄たまいるやうに父うへに願てよといひつ、露助が刀にて髻をきりはらひ今より祖父の法
名淨閑の一字をとりて山吠窓閑と名を更め神祇釋教戀無常を狂言綺經にとりなして誹諧の
運歌といふ一派をひらき諸佛乘の因となして都か菩提のたゞにすべしといひ終て片手に手燭片
手には斬たる髻を握つ、庭下駄を踏ならして飛石づたひに池に臨手燭をあけて水鏡よ面をうつ
し嗚呼病になやみて我ながら見たがふばかりに衰たり
窓閑が姿を見れば餓鬼つばた
と口すさみけるが再又一陣の風おろし來て庭木の梢を吹ならし池水皺して愁か如く忽紫燕
の花搖動して一道の炎火閃々と燃上りければ手燭を撲地取おとし又ふるひ出す瘧病に身上わな
く、き足軟てうち跡跟を踏とめッ、吐息さへも苦げにて炎火にむかひ
のまんとそれぞ夏の澤水
とたからかに勝句を吟じ恨みをはらして成佛せよ南無阿彌陀佛ととなへッ、手に持たる髻を
池水に投入れば又た燕子花のら〳〵と動さて花の裏より紫雲を生じ靉靆として空にたなびき一
羽の時鳥飛出て一聲鳴ッ、光を放ちて西の空に飛去ぬ此の時窓閑が胸中忽朗になりて病ひ
頓に癒たりけり是れ都が怨靈窓閑が一句の妙に感伏し恨をはらして得脫玄成佛したるに疑な
しと露助於關愁ひの中に喜びを交えたり鬼神の心をも感せしむるといへるはか、るたくひなる
べし主君判官の御秘藏に二振の劍あり其の一振い小鳥になぞらへて朝鳥と名給ふこれ日中の駿鳥にかたどりて陽の大刀なり今一振は此蛙鳴丸

にてこれ月中の蟾蜍にのたとりて陰の大刀なりかのれ小年の時主君より拝領の剣なれぞもかく姿をかへて隠者となれば用べき所なしこれを餘五郎につかいされたゞといひてさし出せば母は益〻歎歎すか、る折しも門外にかん迎いとよばはりて淀瀬の従者等提燈把て來りければ若母は首桶と蛙鳴丸を携て立上り我は一旦旅宿に歸るさらば〳〵と別を告ゞ〳〵と歩出て乘物にうつりければ窓閑露助於關もともに門おくりそ此時露助南方十字兵衛が忠死のことを語らざるはこれを語れば十字兵衛が志ざしを失理あればなるべしさらぬだに短夜なれバはや曉に近かるべし夜の明ぬ間と窓閑は露助於關に下知をなさ空櫃を假の棺となして堂左衛門が堀をおさめさせねびれさる二人の僕をよび醒ゑて擔ゑもれば露助夫婦は左右にそひ鳥邊野さして出去ぬ窓

扨も南方十字兵衛が兒子南餘兵衛は母與弓一子窓太郎もろともに前の年錄倉を啞方拂ひになて彼郷を立退身をよする陰だになければ一所不住に諷々けるが母いひけるゝ夫十字兵衛どの不忠をなし給ふへに自己及を以て非命に死し給ひぬれば冥途の苦患もさぞかしとおもひやらるゝなり故に今よりおもひ立西國順禮してせめて夫の罪障を消滅し佛果を得給ふよすがにもとおもふなれど我老て足弱ければ遠國の歩行かなはずこれをいかにせんと打歎いふ南餘兵衛は元來孝心深き者なればはの望を遂しめんとおもひそれよきはぼし立にはいかにも去てかん供いたしいべしといひて頓にうけがひ少の時を出して親子三人着すべき禪衣小笠手覆裏脚のたぐひの旅の具をと、のへてあらかじめ其支度となし二箇の網代を作り前に毋後に子を乘し兪擔ぎ以てこれを荷長き旅路に出立けるが少の路銀もはやくつかひ盡しければ道すがら往來の旅人に一錢二錢の情を乞て其日〳〵をおくりゆきぬされば南餘兵衛うたひもなれぬ順禮歌をうたうにおのづから諸曲の節のまじれるも理なり母はかれたる聲の齒をもれてうたへば窓太郎は順禮に御法施に舌もまわらぬかたことの聲いと哀にて打ふる片手業に風車まわしつゝ遊ぶ体を見る人毎に涙を落一情をかけぬはなのりけりかく物を乞ッゝ行旅なれば道もはかぐらず木の實をひろひて飢をしのぎ流を掬ゑて渇をたすけ野原の露に袖を片敷木の下草にひれ臥て夜を明すなど悲き事の數〳〵いひつくされぬ旅なれぞも御佛の擁護やありけん恙なく日數をかさねて三十二个所の靈場をめぐり第三十三番目美濃の谷汲に到て滿願し夫より又都の方へのぼりゆきぬ○俊成卿の歌に「よろづ代に子一代をのさ添て八幡山君をまもらん名にこそ有けれと」詠せられし八幡山い京を去こと四里餘にして則山城國の南界なり當時男山證國寺の本尊白檀の藥師佛開帳あるによりて參詣の人群集し綿々絡繹として

○窓餞のうき世をはなす主人の合力

往來しばらくも絶ずいと賑けるにそ是に乘じて利を得んと思ふ者此所彼所に假家をつくり酒着溫飩可漏子を賣家あり心太賣の店には水機關に巧を盡花賣の軒にハ青柳の糸をなびかす山崎の小櫃の繪も深草燒の彩色にれされ搗餅の螺の形を編笠燒に像を奪いる賣トは蓍を捻藥賣は長劍を撫ず宇多天皇に十一代の後胤伊東が嫡子といふ曲鄕女あれバ盥の燒蘇の夕煙とうたふ毘琶法師あり福廣聖の辻談議妙高尼の針供養鏡鑄の鞠進高足獣の行者綾綴八から鉦のたぐひさへれのがさま〴〵集り立り幻戲刀玉繰竿のたぐひの奇妙の術を施者ハ更あり一寸法師の蟷の舞輕業の骨なし骨あり伊勢國より活捕てあて來つる鬼女覩の因果の子に報つる蟹滿寺の蛇女猿の俳優犬の諮脫類政か剔て落しつる夜鳥廣有が箭にかけつる怪鳥のたぐひハ更に奇とせず若狹の八百比丘尼が嘗殘玄つる人魚剔比奈の三郎が捕へ來つる焔魔鳥なぞ見も及ばぬ鳥獸聞もつたへぬ奇人あやしとあやしきものを見する假家所せきまで立ならびて標の幟交の幕片々として風にひるがへり楊弓の音辻打の大鼓にま玄る哨吶の笛かまびすしきこゑは諸人の耳目をれぞろかしむかへる中に薦籠掛假家つくりて外の方に怪き獸の形をゑがきたる招牌をかゝげ出したるあり片肩ぬきたる男戸口に立扇をひらきて往來の人をさしまねきッゝ聲たかやかによびいへるはこれ此招牌を見給へそもこれは雷獸とハふものにて雷につきてあるく獸なりこれは安房國二山の雷狩に活捕得たるなりこれ見給へ家土產によき話の柄ぞ招牌に露ばかりもいつわらば錢取ハまじと見給ひて後れてこしねと聲かるゝばかり晉ば見物諸人蟻の如くに集ひ蜂の如くに群て假家の裏に入こちれしあちれ玄ひらゑきあひぬかくて日も西にかたふきければ參詣の諸人足をはやめてれのがさま〴〵家路を急きて歸去けるが忽寂寞として跡に殘れる物は早瓜の皮に蜘手の形玄たる魚の骨の野ざらしめきたる懷紙の屑緒

絃の塵破れたる蠶屏のたぐひのこなり前程より彼假家のほとりに物乞居たる勸進聖あたりに人なきを見て彼方を玄招きければ笠ふかく着たる煎じ物賣荷を擔てこゝに來さる彼勸進聖頭髮をかゝせ玄頭巾をとれば是乃笹腹蟻右衛門あり煎物賣笠をとれば是乃挾田紺九郎なりさて蟻右衛門四邊を見まはし聲をひそめさていへるハれの鎌倉より貯來つる路用の金を五條坂にてつかひ果しれもひかけず俄に涙くの身となりつればかく姿を扮し物乞をしていたづらに日をれくるなりといふ紺九郎ハへるハれのれ迚も左の如く貯なきゆゑにかく煎じ物賣となりてさまよふなりかくては隱謀をくわだてつるかひもなしかの蛇个谷の老女今玄か〳〵の所にかくれ住よし且路用の金を得良計を施して彼所に去老女にしたがひて宿望を遂るにしか玄と兩人語居たる處に蟻右衛門が奴僕沙土七いそがはしく來り兩人にむかひていへるは去年五條坂にて再會の所はかやう〳〵とのたまはしも玄彼所にありて數月侍詑候へども音信だにしたまハざるゆゑやむことを得ずふた、びのぼりて所〻を徘徊玄れん兩所のれん行方をたづね詑ハ他のことはれきて且はやくきこにわぐべき山唉庄司頃日上京してれん兩處を捕へんと玄のびの〳〵にたづねハよ玄御油斷あるべからずといふ蟻右衛門これを聞て打驚玄のらば此地にも長居はならずとハひて玄て居るとならば我〳〵兩人不意をれそひて打とるべーとハふ蟻右衛門頓をふりていはくいな〳〵彼は無双劍術の達人なれば容易に手をくだすは危しだまし打にするにしくべからずといふ沙土七又いへるは山唉餘五郎狂氣して此邊を狂ありけハよし庄司を打ばしめしあらば彼をも打玉へ生れきけては狂人といへども後日の害なるへ玄といまたいひもをいらざるに氣ちがひよ泡齊よと童等のいひやす聲聞えければ沙土七彼所を顧てかれは正しく餘五郎にいはん

といふ蟻右衛門いいくしからば汝面をかく云暗に彼を打捨よといふを耳につきて耳語ければ沙土七は打うなづき蟻右衛門は紺九郎をともなひつひに此所を立去ぬ沙土七は顧かふりして面をかくし裾端折て帶に高くかゝはさみ刀の目釘をくひしめし假家の蔭に身をよせて待居たりさて餘五郎は堂左衛門が善心になりて腹きりしことは露しらず彼が行方をたつねるために僞狂人となり髮振亂し竹の枝を打かたけて足も云ぞろに狂ひ來る後につきたる童等口〳〵に言囃て打笑へば立留り童等何笑ふ物狂が乱か云いとやうたてやな春にそだつも花さそふ菜種の因を蝶も云らず菜種は蝶の果を云らず蠹に住虫のわれからと狂ふ袂に風の葉の亂れて露のおきもせず寢もせでむすぶ夢心とうつゝなきといひて泣つ笑ひつ伏まろぶ童ども、立去て折よしとや思ひけん沙土七は物陰よりわらはれ出て唯一打と斬つくれば餘五郎はむくと起て身をかいし聞や否うの空なる風をにも松に音するならひありといひひつ、扇をひらめかせて又きりつくるを拂のけ眞葛が原の露の世に身をうらみてやわけくれんといひつ、扇の手練こなたは汗もしとろにて秘術をつくせど手にあれず頭をのぞめば身を沈め裙を拂へは飛上るひらめく劍の雲の電光餘五郎が身のはたらきは波上の燕子に異ならず狂ひ免ぐりかけめぐり一ッ所をいく度もゆきては歸りうへりては又行雲の旗手より折かられとす青嵐に梢木の葉もはら〳〵〳〵淀の川音さら〳〵〳〵雲の端袖もひら〳〵〳〵とかなたへなびきこなたへなびき狂人走ば不狂人も打もらさじと早足と出しあとをしたひて追去ぬ○時は五月の半なれば送梅雨も降ずよくこゝきて天氣快晴なりしが此日は夕方より雨を催ず雲起りければ道行人も家路を急在來絶たる八幡堤に編笠深く着たる武士一僕具して歩を來り辻に立たる石地藏の陰に立やそらひて僕をちかづけ何にかあらん耳語ければ僕は手をかし揉つゝかふせの如く今朝はどばからひんとはふかの武士はよしよ

云といひて打うなづき又何やらん耳につきて耳語ければ懷より金財布を取出して渡しけるに僕いこれを受取てうちうなづけばかの武士はもと來し道へ歸りゆくしもべはあとにとゞまりて金財布を掌にのせてもみを試て獨言にいへるはさて石瓦とちがひ金のおもみい別なる物ぞ五十兩ばいりて又財布を奪取逃去足にとりつきて引戻し照返さんと捻合しが沙土七が一身の貪欲手頃に凝あつまりしにか打と擲ど財布を放さず互に双袒れし脱て善をつかみ合或い倒或は起上に重り下に敷れ汗もしとゞに息もつきあへず力を盡て揉合ぬかくありける時男山の見せ物師等錢箱木戸札大鼓喞吶のたぐひの見せ物の具を携て歸道丸木をもつてつくりたる圈の裏に彼雷獸をいれこれをさし荷ひにして來しがはや黄昏のほのくらきおたり、ぬ此方の二人は暗き裏に見せ物師等をたがひに和人とれもひたがへて或は蹴倒し踏倒しければ見せ物師等いこい狼藉者よ醉狂人よといひて慌まどひぬけつ潜つ身を避とす彼僕はいそがはきうちに見せ物師等を盜人の加勢ならん免となはれもひたがへて一腰を拔放して打振

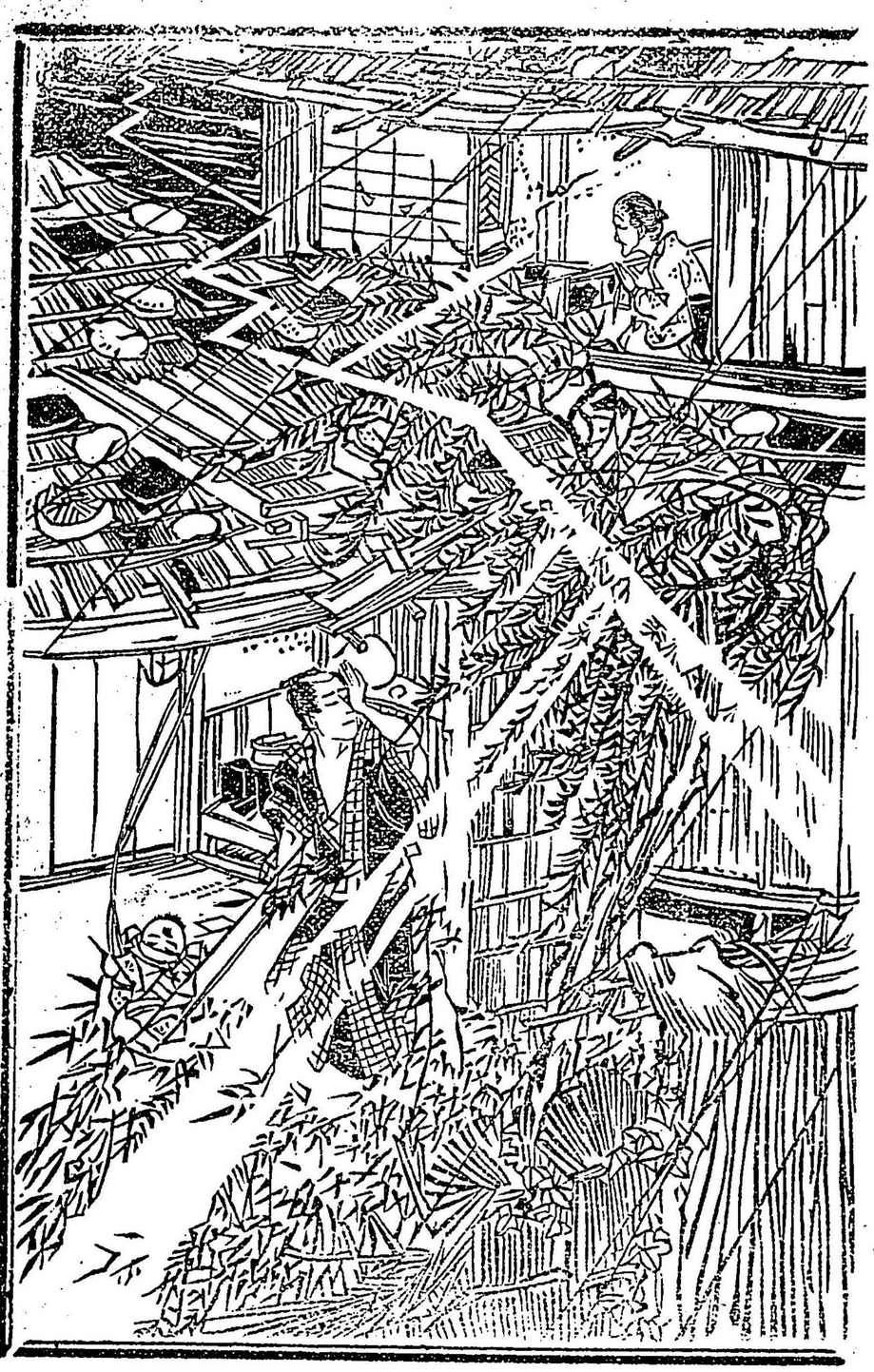
ける其刀の光り暗裏にひらめきければ見せ物師等はこれを見て膽を消雷獸の圈を其儘地上に捨置てそ逃去ける沙土七も刀を拔刀さきもしどろの探り打空にひらめく〳〵雷の光をしるべに打こむ刀丁々と打合しが勝負つかねば刀を投捨なほ財布をひき引合て取つとられつ爭時しも電光いそがはしく〳〵ひらめきて雷聲喚々と鳴出しけるが彼雷獸雷氣にもよほされて忽勢猛くなり繋たる鎖の鎖をひきさりつさしも堅固につくりたる丸木の圈をめり〳〵と押破りて躍出總身の毛を逆立鼻を吹いからし牙を咬ならし眼中より光を放て狂ひめぐりければ二人の者は大に驚き身を避つゝなほ財布をあらそふはづみに財布の紐雷獸の首にひき掛りければ二人の者はこれをとうてれとれそる〳〵追めくりける時雷聲漸く近く鳴て空より一むらの黒雲まひさかり益暗くなりてあやめもいかたざりしが雷獸は此雲に飛上り首に財布をひき掛たる儘にて矢を射る如くに天上してけりかの僕も沙土七も電の光に就て空を見あげこれをしたひて追ゆかんにも翼なければせんすべなく唯惘然として立居たりしが兩人一度に尻居に倒れて大息つきてゐ居たりける〇夫孝は百行の先なり孝天に至る則は風雨時に順び百日に風吹十日に雨降孝地に至る則は万物化盛し草木もよく花咲實のり五穀豐饒なり孝人に至る則は其家に衆福來りて賢人も忽福者となる古今例すくなからずされば孝行の德の尊きをたとふべき物なし孝なる人は天の憎みをうけてれそろしき災にあふを影と響の如いみじき禍をうけたもふ孝ならざる人は天の憎みをうけてれそろしき災にあふを影と響の如し原孝の字をつくるに老の字のかたへを省て子の字を添たり是老たる父母の傍に子ありてよく仕ふるを孝とずるの謂なり老たる父母をもちたる人此字の形にならはずんばあるべからず去程に南餘兵衛は西國順禮をなし終て母の顯望を遂しめそれより山城國に到り狐川を左にとり河内へ越る拔道の村末に人の住あらしたる古家を借母子三人しばらく此に月日をれくりぬ其家のさまは二階づくりにて奥の間もありながら軒端かたぶき壁くづれ骨あらはにうちよろぼひ窓には羅葛はひまとひ庭には葎生茂り板敷も朽實子も破床の下より草生出などしていぶせさはいはんかたなし素一錢の貯もなくなすべき活業もなければ童の横笛盲法師の一節截噉吹噴吶笙の笛のたぐひさへ手細工につくりてこれを賣ある時は鹿笛にかなしき秋をれむひ驚笛にわびしき春をむかへわづかなる價を取て母を養ひ子を育れば夜の衣薄くして曉の霜冷じく朝氣の烟絕〳〵にてつねに飢がちなり素孝心深きものなれば父十字兵衛が非命に死せしを今に悲み鳥邊野の葬所にしば〳〵詣て是を祭ること懇なり母はいろ〳〵の辛苦のつもりけるゆゑにや聾となりて大聲にいふとすら聞へねば餘兵衛は是を嘆きまそ〳〵老順につかへて心をもちうる事切なり貧きなかにも母には味よき食を勸めれのれと子飢食を食ふ然るもなを足ざるときはれのれ飢を忍びて食せざる日もれはかるなりされど母には食したるけしきを見せて其心を安かふしむもらうべき錢ある時は魚肉あるひは味よき餅菓子のたぐひを求て母にすゝめ其喜の色を見てたのしめり子の窓太郎はいまだ五歳にてわきまへなければ共にこれを食めといひて泣を餘兵衛呵こゝろして食しめず母の十分に食するを喜びれのれは常に襤褸のそを着て臥母には衾をあつうして臥しめなはひれのれが一重を脫てこれをれはふ母に與を醒して餘みて我に着たる彼襤褸を又餘兵衛にれはひ孫はれのいとれいす餘兵衛目醒れば又一重を母にゆづる一夜のうちに親子一重の襤褸をゆつりあふこと度々なり母の慈と子の孝とれはむねのくの如し是等はすべて此前の事ぞかしかくて五月のなかばに至りけるが餘兵衛益困窮して米屋薪屋古手屋などに積れはくいでき彼聾夫をきびしくはた

りければさま〴〵に詞をつくして云延母にしらせまし と心をつかひぬ餘兵衛窓れもひける頃日
母の容体を見るに痩かじけ日にまさりて衰たまふ樣子なり我貧中にも母には折〳〵魚肉と
すゝめ食の乏からざる樣に心をつけまゐらするに漸々に衰給ふはいぶかしき事なりき試す
ばわるべからすとれもひ一日わざらけ死魚をもとめ
の魚肉をそに母の前にそなへれき拙者ハ物賣に出ひ
といふことを指をもて掌に書て見せければ母はい
ひに出る体をなして立出家の傍なる竹林のうちに
かくありとハ露しらず孫の窓太郎を側近よせていふやういつもの如く汝此魚を食せよ父の歸ら
ざるうちにとくくといひつゝ箸を把て彼魚の肉をむしり咽に骨をたつるなといひて食しめけ
れば窓太郎ハいとうれしげに舌打して食ふ眞弓は甚けしきを見て胸ふさがりけるがしばしあり
て涙の目をれさへあな不便や餘兵衛我に孝なるもろにいとをしき子の食を減じて我には食を飽
しむ故に汝は飢がちにて僅の魚肉を食しむるも餓鬼に百味の飲食を與たるん樣に喜べり我爭是
を獨食するにしのぶへきや若父が歸てといへば魚は此祖母がのこらず食ぬるといへ必汝が食
しといふべからずとハひて皆窓太郎に食去めれ一箸だに食ず荒屋ハ甚も豹蚊のれはきう
るさゝよと云ッ團扇を把て窓太郎をあふぎやりぬ餘兵衛は壁の崩れたる所より暗に此体を見
て落涙し扨は母人孫を深くいはくしみ玉ひ我まゐらす食を我家にあらさる時は皆窓太郎に與へ
玉ひみづからは飢をしのびて食し玉はざるもろに日にまさりて痩給ふなるべしと思ひて且驚
且嘆けるかはやく黄昏の比となり雲の間より電光ひら〳〵と射きて遂く雷の聲ひゞきやかて雨降來べ
く思いれければやをら竹林の裏を出外の方より飯り來つる体をなして裏に入母の前にぬかづき

て今日しも錢ハはく得て歸ハこれを見玉へといふを仕かたにして見せッ、愕より錢の袋を把
出ゝて見せければ母は喜び思ひしよりかも歸のはやかり！ぞ前程の魚いつよりもなは美味にて
ハばにず食を過せしなり我今日は何うへまきれてハまだ看病をせず我ハこれをすべけれも汝は
しばらく休息せよと云て念珠を袖く、みにつまぐりッ、灯火を把て與の一間に入にけり餘兵衛
は門首の戸を引よせ引窓の戸を立なをして雨の降べき用意をなしカ灯を取出して火灯の石火電
光も壁の破れを漏風に硫黄の花を消れじと心の關の袖屏風繞冷させじと子を思ふ誠の心をしう
ぬ子のまろび寐したる窓太郎食に飽てやすや〳〵とて、ろよげに睡つく餘兵衛は獨手を叉きて
心の裏にれもひけるは母人孫をいつくしみの切なるゆゑにれん身の衰を顧思はずかくて日
を過し玉はゞ飢死去たまはん事必定なり高祿を玉はりし昔しの身ならばハかほどにも孝養を盡
すべきにくちを去ぎよ母人の心ゆくほどに窓太郎を養はんにも粮不足なればせんすべなし唐土
の孝子は親を養ふ其ために子を賣めんと去たるもあり我運命盡ずもし天日の光を見ることあり
てふた、び妻妾を娶は子は又も得らるべし母は再得事あたハざれば寧窓太郎を失ひて一日を
減し且母の羈を去絆をとくにしかじしかれぞも子を捨るは世の制禁なればそべからす今夜ひそ
かに刺殺し母にハ他にあづけつかくせ去ともいひて當座をつくろふべしと心をさだめ壁に掛れ
きたる刀を把て立むかひけるかくとはしらぬ窓太郎か雅顔の愛らしさに氣れくれしあまりにハ
とをしくてハづくに刀を立べしともれほえず目もくれ心もきにいて、前後不覺に泣沈ぬ折しも
與には母眞弓が看經の聲鉦の音も細火陰に燒捨し蚊遣の烟り鳥部野のむな去き空を見る端かと
れもひつ、もむせかへりて去ばし歎に沈しがはてしもあるべきとならねばとれもひなほしてずで
に刀を救んと去たるにいかにしてか救ざりゆり心づきてよく〳〵見れば此刀を壁に掛れきたる

時窓太郎が守を入し巾着に迷子の札をくゝり付たるを打掛れき去が其紐刀の鍔にまとひつき留となりて拔ざるなり餘兵衛是をつら〳〵見て又氣をくじく時去もあれ聲々と鳴神のひびきも遙遠里に迷子をよぶ鉦大鼓いと〳〵哀をそゝにけり嗚呼人の親の心は闇もとはずして子をたづ祈る者もあり宿世のあしき因果にて貧身にはなりさがれど子にて怪我だにさせまじとこれ此如く守巾著つれさせしが親の手にかけ殺す子に劍難除は何事ぞ冥途に迷はす幼子に迷子札も無益なり幼て死す者は罪科もあるまじと思へども父母養育の大恩をわくらで親に先立ゆゑ不孝の罪の重しときく定業ずう〳〵さありといふ況又にかけられて非業に死ば窓太郎佐比河原に迷ひ去砂を集て塔を積さゞな呵責に苦まん我は一生貧くとも彼をばよく生立て老後の力亡は親の棺を舁さめとれもひ思ひて育ん子を我手にかけて身を屠いづれ流は順なる水をさかしまに手向べしとはれもひきや親子い一世の縁と聞ばもふ來世でも逢れぬ我子永劫顏の見れさめと寐顏をつら〳〵打まもり恩愛深き悲みに身を刻る、れもひして落す涙は五月雨の筧にわまる如くなり餘兵衛は元來丈夫にて男魂失はざる者なれどもかく女々しき繰言いふは子をれもふ心の切なるもゑと更に哀深かりけり奥の間には母眞弓聲のかぎりに經の鉦打れさめ心の裏にれもひけるい餘兵衛錢袋に小石を入折〳〵我に見せて我こゝろをやすからしむとくよりこれを悟れどもさあらぬけしきもてなすは我又彼が心を安らしむへくれもへばなり彼がありさまを見るに貧苦にいたみ痩衰て年若けれども氣力なくはど〳〵命もわやうけなりしかのごならず孫までも飢がちなればよく育へうもればえがたし此母が身は年老て殘れる雪の日影待間の命なれば何れしむべき我一口を減じ彼が絆を斷て辛苦をいぶき生さきわる子や孫の命にかゝり冥途に到て十字兵衛どの、死路をたづね蹈ばかりも苦患をすくひまひらす

にしくべのらずと愛悟をきはめかねて亡後の經帷子にとれさ免れきたる禪衣を取出し剃刀ともに携て餘兵衛に知られじと曉られじと拔足するも聾のれのが耳には聞にねど外へいもる〳〵簀子のうへ折から降來る大雨の音にまぎれて忍びつ、彼方の二階にのぼりもきぬかゝる時しも笠の下に覆面し蓑打著たる一個の武士此家に近く歩み來る其跡より顯かふりに面をかくしたる曲者刀を拔そゞめて着來りてなゝの武士をだまし打にせんとれもふさまなるが雷光れば身を隱し暗くなれば又あらわれ出て打んと絲らひ隱つ出つ度〳〵すれどもかの武士はこれを知ざる樣子にていとわやうくぞ見ににける餘兵衛は泣沈て居たりしが母の看經の聲やみければ見つけられては妨げとれもひつ、やがて心を取なれし畢竟母の身がはりに殺す子なれば嘆くべき事にあらずとれもひけり恩愛の絆となりし守巾著の紐をひきさり刀をすらりと拔放してはど〳〵刺殺さんとしたる時虫がしらすか窓太郎あなやと劫て目を醒し起上りて泣出し婆々さまはいづくにれはず婆々さまと聲々さべし婆〳〵さまのうとをけびッ、與の方へゆかんとするを心つよくも引戻しれもひをさせじとれもふにぞ泣けぶりよせて腰に結付放打にとれもひしが獨者にとらはれし猿の子繋し如くにて目もあてられぬ姿なりあなかはひやそちが腰に結つけしは菩提のために讀誦をる經巻の紐とれもへ南無阿彌陀佛となへッ、振上る刀の下にまはる子の其姿は北音盲に異ならざれば平日の遊びをれもひ出して鬼わたしの鬼よりもなほれそろしき我仕業とれもへば又も刀の手さきたもみけり彼方の二階の暗裏には母眞弓禪衣を身にれはひ口には念佛手には念珠剃刀を把上て吭をきらんとれしあてたり此方の餘兵衛もれもひきり南無阿彌陀佛といふ聲もろとも又振上る刀のひかりあはやとひらめく電の目を射るばかりに家内を照し忽一聲霹靂絹裂如くに鳴響て頭の上に落るか



とれもふばかりにさびしければ餘兵衛が刀の手の裏もれぼにずくるひて密太郎が身にはあたらず腰に結し窓の引繩すつぱときりぐはら〳〵とひらく戸の裏に降籠雨とともに小判の山吹散亂して井手の嵐とうたがへり彼方の二階に愚悟の母も雷鳴にれぞろきてれぼにず刀物を取落しうつぶしにぞ伏たりける此雷一圓の火炎となりて彼武士を打んとねらふ曲者の頭上に落身体碎死てけり餘兵衛是をば露しらず小判の降しをいぶかりてあふぎ見るに引窓に這かゝりたる蔦蔓に財布かゝりて其裏より乱落たる金なりけり折しも人のれとなひしてさてもさびしき雷よ必定此邊に落つらん命びろひをせし事よ和主の膽ハ恙なきかと呟つゝ門の戸をひきあけてつと提灯をさし出せしは米屋新屋古手屋の輩なり餘兵衛は投躰を背後にかくしていそがはしくいひけるはこは開分なき人〳〵よすでに昨日れん身等の許にゆき此月の晦日までといひ延てれきつるに夜中の遠慮もなきをがと恨いへば此方は口をひとしうしてゐな〳〵我輩は貸をはたる爲にハ來ず帳を消に來つるなり米薪古手の價のこらず受取如此といひつゝ矢立の筆把て帳を消受取の書付をさし出せば餘兵衛ハ益〳〵いぶかしみ此方より其價を償たるれぼへもなきに受取しとはいかなる故ぞとたづぬれば三人の者いひけるはさてハをん身はしうざるか今朝奴僕とれぼしき人我〳〵が許に來り南餘兵衛が債はいかほどあるぞと問る、故帳を出だして見せつればのこらず拂ふてかへられたりなにゝまれよき仕送をもちたるれん身日來見くだしたる我〳〵も我ををりぬこれよりのちは氣づかはずいかほどを貸まゐらせんこめたきゝどぎらにもいはず古手なりとわたらしき、ぬなりと澤山かふてたまいれのしさいわひにあめもやみぬからかさの供してまかりなんと欲に嘯宿鳥翼すはめて歸りけり餘兵衛は頭をかたふけてかれといひこれといひかへす〳〵もいぶかしさよとひとりごちたる時しもあれ外の方に聲ありて不審にれもふは

理なりこゝあけよ請を語て聞すべ去と戸をあけさせて彼武士蓑笠ぬぎ捨覆面かなぐりてしづ〳〵と打通る餘兵衛此人を見るに是則主人山咲庄司雪森なればこいそもいかにと驚きつゝ刀をおさめて禮をなし席を拂ひて上坐に迎ゆれば庄司いしづかに坐をさだめ且はやく兒子が繩をとけひねるみぞ餘兵衛はいと面目なけに窓太郎が腰にのこりし繩をとき目口におそひし手拭を取すつれば庄司い又財布をとらせ乱し金を集させ灯火を取よせて數をあらため財布を見て居を翳いと不審なる体なりしが彼僕の男沙土七を高手小手にくゝりあげて引立ッゝ走來りおれ旦那是におれはしますか先刻八幡堤にて拐者におれん渡しおりし金財布を此者が奪とらんといたせしもをゝ奪れじと爭折しも黄昏の暗まぎれに見せ物師等にやいはん雷獣を入たる圖を荷て來りいが刀の光にやおれそれけん彼圖を捨置て逃去たる其後にて彼獣雷氣にもよはされて忽勢猛なり圖を破てをゞり出狂ひめぐれる其はずみに金財布の紐電獣の首に掛り其儘天上いたせしもを瓦屋さんにも翼はなしせんをべなきにせめて拐者が分証の印にと此者を捕へ顯かふりをのなぐりてよく〳〵見いへば豈はからすや此者い是笠原蟻右衛門が僕沙土七にいもを繩打て引立まゐりいゝ金財布を失ひしい拐者があやまりいりたる体なりけり庄司はこれを聞をひとき驚を撲的打其にて我不審はれぬ夢平かならず愁るべかゝずる其財布はいかにして此にあるやといぶかしく思ひ其沙土七にい僉義おほし彼所の松に繁れき汝守りて逃ざるやうに心をつけよといひてとはざけ餘兵衛にむのひていひけるは汝が父十字兵衛い從來老實なる者にて阿曾比なぞに心をうばはれ不義の金をつかひ捨べき者にあらざるゆゑ去年自殺せし來始を疑いしくれもひ我腹心の者を暗に都にのぼせ五條坂につかいして樣子を聞せしに果して我推量にたがいず兒子餘五郎富士屋の吾妻といふ阿曾比のために祠堂金石塔料をつかひ捨たる罪を十字兵衛れのれが身に引受て切腹ゑ我君より賜たる朝烏の刀をさへ賣代なして石塔料にしたるよ去明白に知たるなりこれによりて我餘五郎が行方をたづね手打にもすべく思ひぬれどもさある時い十字兵衛は犬死になる道理なれば胸をさすりて捨おきぬこれすこしも兒子をかばふにあらず唯十字兵衛が志を失ふにしのびざればなり汝等此子をも速に歸參させ原の如く家を立つかはしたくれもひぬれども是又さあるときい餘五郎が罪をあらはさゝればなりがたくあらいす時い十字兵衛が心にたがふこれをいかんともすべからざれば我心にもあらで金を泥に捨玉を淵に沈おきゝはしかるに此度君命をかうふり箕腹蟻右衛門袴田紺九郎等兩人を捕んために上京せゑこと幸ひなれば此僕夢平にまうしつけて汝が住家をたづねさせしに貧けなる樣子と聞暗に汝を救んため先刻八幡堤にて夢平に此財布の金五十兩を渡し汝に與へよとまうゑつれしに今聞ば雷獣のた免に此金を失ひつるよし落る所もおはかるべきに此家のうへに落たるは正是皇天汝が孝を憐給ひてあらたに此金を授給ひ玄に疑なし孝人に至る則は衆福來るといへるいか、るさぐひなるべし今朝米屋古手屋の者等に汝が債を償せしは我夢平にまうしつけてさせつるなり母を養ん爲に子を殺んとおれもひつめたる汝が孝心感ずるにあまりあり皇天の憐給ふも理なり此金をもつて心の儘に母を養ひ汝が心を安くすへしといひて彼五十兩を財布におさめて與へければ餘兵衛は是をおし戴きさてい亡父い忠義のために死しいかといひて喜びッゝ主人庄司の慈悲深き志を感歎して落涙袖をしぼりけり時に隔の障子をひらきて母眞弓ねさり出庄司に向ひて恭しく禮をおこなひていひけるはひさ〳〵にて健においす御容体を拜しよろこびにたへはべらず夫十字兵衛不忠をなして自殺いたしいと今までも恨き居

んに今彼處にてれん物器をうけたまいりんへばしかにはあらぬ忠死のよしさありてこそと喜ばしくれもひはんべり我〳〵をれん憐ふかく債を償たまいるのみならず許多の金をたまいる事何をもてか此大恩に報んへきといひて頻に涙を落しければ餘兵衛は母人は耳が聞えんかといふにぞ母も心つきてげにも〳〵といひてうち驚き今ん何をかつゝむべき我汝が貧窮を見るにしのびず一口を減して貧苦をすくはんとおもひ一階にのぼりて自害せんとしたるに今の雷鳴心の臓をつらぬくやうにおぼえしかさては雷の響に病根を打破りて我身なから不思議にれもへば餘兵衛は聞て益〻どろきそん危かりし事よ拙者も又母人の爲に窓太郎を殺して一口を減じ候はんと存じそでに打んと振上たる刀の手の裏雷鳴ゆゑに自然と狂ひ打損じんとはへは母又いへるは經帷子と思ひて着たる順禮の禪衣にん觀音の御影もあり今の雷鳴我自害をとゝ免汝が刀を狂はせしも雲雷鼓掣電刀尋段々壞の經文にたがはず日來信ずる菩薩の擁護うたがひなしといひてひたすら歡喜してけり窓太郎いわきまへなく眞弓が側に立寄て祖母さまねふたいねかしてよと膝に上りて抱きつけばやよ窓太郎御主人さまのれん側なるぞれ禮をせぬか不禮な奴と口には呵と心には此祖母ゆゑに父の手にかゝらんとせし危をよ不便の孫やとれもひつゝ抱きしめてとかく涙はとゝまらず時に又夢平いそがはしく來りていはく沙土七めいれふせの通彼處の松に繋れきんが此處の竹林さはに雷死とれぼしき死骸にてよく〳〵見んへばほのかに見知たる者のやうにれば侯ふ庄司ん是を聞とひとしくつと立上り餘兵衛にともしびを把しえて外の方に出來りかの死骸を點撿するに身体ん〳〵け燒爛たりといへどもれ袴田紺九郎に疑なしさては我あとをつけ來りだまえ打にせんとしたるを今の雷に碎れて死したるならん憎へし〳〵といひつゝ蒼のところに歸て坐し又餘兵衛母子に對ていわく汝等が兩人母

は慈悲あり子は孝あり今の迅雷母の自害をとゝ免子の刀の手を狂はし免て孫の命をすくひ玉ふ都是天の憐をかうふりし所あり其にかはりて紺九郎は雷に打れて死したるん彼が不忠の天の罰し玉ふ所に疑なし彼といひ是といひ天の賞罰正しき事かくの如し善惡應報因果眼面の天理彰々呼として毫釐もたがはざるを見よ孝の天を感ぜしめたる例し勝て計べからず惡人の雷死せし例も又鮮ず家貧して孝子顯る世亂て忠臣を識といふ王良が首宜哉汝我祿を受たる昔の身ならば其孝もあらればまじとおもひて感くれもへども一旦退拂ひたる者なれば私のはからひなしがたし是我苦き所なり何とぞ一ッの功を立よ其功といふは如此个樣こと餘兵衛が耳につきて何事か咽けれは餘兵衛は點頭つゝかしこみうけたまはりんと苔けりかくて庄司は別を告て門外に立出ける時雨過雲散て一輪の明月皎々とか、やき恰白日の如なり此折ふも餘五郎吾妻とともに此家をたづね來り餘五郎且父庄司にむかひ禮ををてなひていはく我不忠不孝にして尊顏を拜をさへ面目なし分說は切腹よりの外なきとぞんせしが十字兵衛資代なせし朝烏の刀を買もどしこれなる餘兵衛に返し與へて彼が家を立る便にもとれもふばかりに今までなからへんなりしかるに此吾妻鮒尾賀堂左衛門とふ者を欺きかの刀を取もどしんて爰にあり我吾妻が心をしらず僞狂人となりて堂左衛門が行方をたつねんに先刻はからず途中にて吾妻に行あひ彼が本心を聞且露助にもあひ堂左衛門が善心になりて切腹したる事れよび兄餘宇兵衛どの拙者を憐たまふ事を委聞んへばいよ〳〵罪れもきに十字兵衛が位牌をそにて渡しければ餘五郎又父に向ひ者は拙者なり露助と申すは則僕路平がことにんいざ〳〵餘兵衛これを受取といひて朝烏の刀十字兵衛が遺しれきん此竹の刀にて只今切腹つかまつるがせめて拙者が分說にんなりいざ餘兵

衛介錯頼といひもはてず竹刀を拔放して腹に突立んとまたりければ餘兵衛は慌れしとゞめ吾妻も其手にとりつきて涙を落しいひ分なきはれん身ばかりか十字兵衛殿を失ひし其原をたづぬれば妾が身より事おこれば餘兵衛どの親子の衆に合すべき顔なし殊更前ほど途中にて露助がかたるを聞けば堂左衛門は妾が同胞の兄なるよ玄彼といひこれとまうし妾こそ死ねばならず皆さまいとまたびゝへといひつゝ竹刀を挑取てわれから先へ死ねばならずといめいな〳〵我から先へ死ねばならずといひて互にとめつとめられつ死をあらそひしが庄司いよ〳〵態靡あらゝかに二人を呵竹刀をとりあげて餘五郎が目さきにさしつけこれ是を見よ

拙者此度の切腹犬死に相成不申樣御短氣御愼遊され可被下ん

かくの如く玄るしたるは十字兵衛汝が扮質をよく知て死したる後まづ諫言をくわへんと忠義の魂を髣髴残したる書置にわらざるやといひさ玄てひそかに落涙したりけるが又いひけるは憎しと恩ふ汝なれども是まで其儘をしおきしいなうしかるに汝今自殺する則ゝ此書置の如く十字兵衛は犬死なりさかのみならず昨夜淀瀬我旅宿をたづね來りて物語るを聞けば兄餘宇兵衛が志を惇のみならず家相續を斷理なり若又强て死んとならば七生までの拂當なるぞ吾妻事は同家中閣元澁右衛門の養女にて原孝の爲に身を賣さるよしなれば餘吾郎と格別なり汝も今死しては始の孝を失ひてかへりて養父に不孝となるこれをよくよくはきまへよ餘吾郎爾今死んとおも殉一命をたもちて、ろざしもあらためて一功を立る子細いと心を合せて互に功を立よしかる時は十字兵衛も冥途に具に餘兵衛にもひふくめおきつれば彼と心を合せて互に功を立よしかる時は十字兵衛も冥途におきてよろこぶべし一功立たる其時は歸參をさせあらためて吾妻を妻女に致すべしいかに〳〵

とゞひければ眞弓餘兵衛等も傍よりことばをそへて自殺をとゞめるに夕餘吾郎も吾妻も死ぬに死れぬ義理となり兩人ともにさしうつふきて詞なき庄司又餘兵衛に向ひ十字兵衛一旦餘五郎が爲に資代なしたる其朝烏の刀再手にもどりしも反哺の孝ある爾が德の天に通せしもゑなるべしかへす〳〵も愛なり爾笛をつくることをよくするよし號笛といふ俗にいふ叫子笛なりて軍器の一ッなれども尋常の叫子笛は深山幽谷の濕地に於てこれを吹ゝよく音を出さず爾が工夫をもつて濕地といへどもよく音を出す叫子笛をつくるべし後日かならず用る時あらんとゞふか、る時玄も傍邊の竹林をたれし分て箕腹蟻右衛門あらはれ出ものをもいはず刀を拔て庄司を目がけ唯一打と斬つけたり庄司ゝ速く身をひねり早足を飛して踏上よ蹴仆のけさまに倒たるを足下にふみつけやをれだまし打とは比興至極我君命をかうふる汝と紺丸郎が行方をたづぬるため上京せしに兩人ともみづから來て身を失ふ皆是天罰のしからしむるところなり爾紺丸郎と心を合せ月數个谷柚个谷の両家を亡さんと隱謀を企たること密書によりて分明なり殊更爾餘五郎をすゝめて遊里にいざなひしより事おこりて十字兵衛自殺玄たれば十字兵衛がたゞにも鷩敬なりかれがたゞしひを籠のこしたるこの竹みし大罪人と歎するにい幸の刑具なり不忠の報を思ひしれと呼りつゝ力をきはめて竹刀を吭につらぬきければ蟻右衛門ゝ一慶さけび手足をもがき苦む体側に見る目はこゝちよくこそ思いれけれかくて庄司竹刀を引拔ければ蟻右衛門は息絶たり餘兵衛はこゝろえ手拭をとりて刀の血と清むれば庄司ゝ刀を鞘におさめやよ餘五郎此竹刀ゝ爾が一生の守となをして短慮功をなさずといふ常言を忘るゝなといひて與へけれ餘五郎はれし歟てぞ帶たりける庄司又いひけるは時刻うつれば我は旅宿に歸るべし餘兵衛爾は此蟻右衛門と紺九郎が首を打あとより旅宿に持參

せよ沙土七い彼等兩人が隱惡の證人なれば生捕の儘、錄倉に卒て歸らん夢平は其縄つきを引立て
我供せよと命じッ、立出れば餘五郎吾妻眞弓餘兵衛もろともに門へくりして庄司が背後を伏拜
み感激の涙に袖をぞしぼりける

○かくて庄司は蟻石衛門紺九郎が首級を携へ妻淀瀬は堂左衛門が首級と携へ夢平に沙土七
を牽せて錄倉に歸り主君判官の面前に置て庄司且かの兩人の首級を實檢にそなふ淀瀬は
堂左衛門が首級を出して軍用金の賊なることを告且餘宇兵衛が郷を殺せし謂をくいしく
きこえあぐれバ判官は其志を感賞あり紺九郎を打とりたる事を悔沙土七を誅
戮す是等の事をくいしくいいんいくだ〳〵しければ唯はむねをしるすのミ庄司が餘五
郎甫餘兵衛等二人の者に功を立よといへるは何等の功にや後〳〵の卷を讀得てしらん

雙蝶記

さられたる夢いまことの茂林の閻討

夫い扱れき爰に又一段の事の端を惹出せり是いかなる事ぞなれば月影个谷判官の息女今年十五
歳に至給ふか頃日病の床に臥給ひ一切ものもめさゝりければ醫師い更なり世にす
ぐれたる良醫をめして治術を盡させ給ふとはへども露ばかりも驗なく漸勞れ給ひ面痩身はそり
て日に異にれもくなりまさり給ふにぞ父母の君は更なり 傅の人〳〵も愁悲しむこと限なく病
給ふれん容躰うたがふらくは物怪の所爲にはあらずやもしゝからばいかなる良藥も驗わるべか
らず此うへい兎角神佛の冥助をねがふにしくべからずとて有驗の高僧に悃祈を盡させ諸社に幣
帛を奉て丹精をてらし給ひ母君は侍女等をかはる〳〵鶴个岡の御社に日參させ給ひけるが一日
一個の侍女かの御社に參詣し祈念れいりて下向の折ふし庭さよめの宮奴等瑞籬の下に集ひて物
語するを聞ば巨福路坂に太麻の巫女といふあり寄絃口寄の上手にて佛敬にも通達玄難病奇疾物

怪の崇なぞ其もとをあきらむる事鏡に物の影をうつすが如く實活る神佛ともいひつへしと噂
するを彼侍女聞つけてこれは此社のれはん神辻占に託玄て告給ふならめと喜びつゝ道を急て館
に歸りれん母君に个樣〳〵ときこにければ母君もいと喜び給ひて判官に告きこに其巫女とく叫
迎よとれふせて巨福路坂へ使を立給ひけるに太麻の巫女召に應ゝてやがて舘に參ければ姫の病
榻に近く臥入給ひ判官夫婦對面ありて後寄絃を乞給ふにぞ巫女つゝしそて且神保をとなへ梓の
弓を打鳴して冥道をれぞろかし目を閉て無心になりけるにあな思ひよらずや去ぬる延文四年信
濃國苫形にて亡たる相撲次郎時行の怨靈 梓の弓にひかれ出て巫女につき判官に對していひけ
るは我南帝の勅免をかうふりて整懷の旗を飜し北朝をかたふけて累年の儀積をはらさばやと
れもひ立ぬるかひもなく運命つたなくして爾が爲に亡され股肱耳目とたのみつる大佛九郎貞直
さへ知具麻川に入水して底の水屑と成果ぬれば生殘たる味方の者も忽心變して皆足利に降參
し今は我讐の亡跡をとふ者だに無れば無緣の鬼となり修羅の眷屬と成て瞋恚を含む心止時な
く永劫惡趣をまぬかるゝ事あたはざれば其恨を散せんため當家に祟をなす先汝が娘を取殺して
無間地獄にいざなひ去共に呵責をうけしめれひ〳〵爾等をも取殺して遂に當家を絶すべくれも
ふなりとくよりしかれもひぬれぞも苫形落城の刻汝が手に入たる日月のれん旗當家にひめあり
しゆゑ是にれそれて近づく事あたはずむなしく年月を過せしが近比かのれん旗を鶴个岡の神庫
にれさめしもえに時と得て崇をなすことを得たり見よ〳〵娘は更なり汝等夫婦嫡子玉兎之助を
始一族郎等にいたるまて皆取殺し無間地獄に墮て怨をはらさんずるぞといふ其姿は見にずとも
へとも 怒聲は其人に向ひて聞が如くにてれそろしなぞもいふべからず母君を始此座にありし
人〳〵これを聞て大に驚きけるか判官い半い信じ半はうたがひッ、巫女に向ひ怨靈の仔細をい

ひて詰問玉へば睨女はこれを聞妾先　試べき事ありてと洗米をとりよせ梓の弓を戞る小櫃めきたる物の上に蒔散してみづから姫の枕上に持行此洗米を手つから拾取てめし玉へといふ姫は侍女等に扶起されてかの器にむかひ洗米をつまみ取てくはんとし玉ひけるにあな怪し彼米粒忽蛭に化して蠢きければ姫は是を見て打わなゝきおなやと叫て伏玉へば母君を始かしづきの侍女等も身の毛そばたちておそれあひぬをて姫を介抱して藥などまゐらせけるに漸蘇生ことを得玉へり時に巫女はひけるは怨靈姫を無間地獄にいざなはんといへる言たがふべからず其故は無間地獄に墮る者は此世にあるうちより食物蛭に化して食することあたはずといへり今現に此しるしあり疑べからずつやつや物をめさゝるも理なりといふ判官の眼前にか、る奇怪を見玉ひて疑を決し此怨靈を靜んにはいかにしてよからんと旗をおそるとなればこれをしばらく借受玉ひて姫の病架に立置僧衆を請じて大般若經を讀しめ玉はゞ惡靈得脫して退姫かならず快驗あるべし其故は帝釋と修羅と須彌の中央にて合戰をいたす時帝釋に勝ては修羅小身を現して荷絲の孔の裏に隱れ修羅又勝時は須彌の頂に坐して手に日月を握り足に大海を踏とゞへり時行の靈修羅の眷屬よなりしとなれば日月の御旗とおそる、ゝ王威をおそる、のみならず此理にもよるべきなりしかのみならず修羅三十三天の上に寶上りて帝釋の居所を追落し欲界の衆生を惡我有になさんとする時諸天善神善法堂に集玉ひて般若經を講じ玉ふ此時虛空より輪寶下りて劍戟を雨し修羅の軍をすゞに割切といへりされば時行の靈を靜玉ゝんには般若眞讀の功力にしくべからずといへば判官はこれを感聞し玉ひ傍の人におそせて謝物をとらせ玉へば巫女は恭これを受納ていとまを乞私宅にぞ歸けるかくて判官は俄に階元澁右衛門をめし呼玉ひ先達て鵜ヶ岡に奉納せし日月の旗をしばらく借受來るべし

とおそふせければ澁右衛門はこれをうけ給り急ぎ鶴ヶ岡に參詣し先幣帛を進め神樂を奏して神慮を慰し神司に告て彼御旗を借受てみづから是を携へて歸路に臨時ゝやゝ夜闌にぞ至ける此夜は雨雲月をかくしていと暗かりけるが澁右衛門ゝ許多の供人に前後をまもらして極樂寺の切通しを過ける時茂林の裏より黑き裝束したる曲者兩人あらはれ出前後の挑灯を斬落し刀を電光の如くにひらめかすれば供人等は驚してた、ちに逃去もあり刀を拔て戰もありしが防かねて皆散〳〵に逃去ぬ澁右衛門ゝ懷の御旗を大事と守護それば戰を好ますといへども彼曲者等順風の落葉急水の游魚の如くに走りかゝりて銳尖そろへて斬つくれば止ことを得ず拔合せて打合ぬ其及ぶ者は梢をならす松風に響あひていとものすごき林木原あたりに近き禪院の鉦皷の音のひま〳〵に鳴まじる宿鳥の聲も更わたる夜の時かりに及さきもしぐろの探り討刀の光り息づかひを心あてに戰ば或は石の地藏に斬つけて火花を散し或は同士討をして血煙を立しばらく時をぞうばしける澁右衛門は曾劍法に達しけれゞねらひよりてはしと、擊身をかはせてはしと斬二人の曲者にあまた手をおはせけるにぞ曲者等ゝ敵去がたくや思ひけん早足を出して逃去ぬ此時やうやう雲散月あらはれてあきらかなり澁右衛門ゝ彼等を打もらしたるをくちをしく思ひつゝ一息つきたる折しもあれ茂林の裏に弦音高く漂とひゞき一すぢの箭飛來りて澁右衛門が胸さきを篦深に射たればさしも强氣の澁右衛門もたまりかねひとこえ呼とさけびて後に啞と打倒れ箭疵の鮮血懷に流れ入て御旗をけがしければ御旗は忽懷を放出て空中にひらめきぬかゝる時しも茂林の裏より兜頭巾に錦の野袴金摺の腰刀のきらめくを帶たる曲者二所藤の弓を携て步出空中にひらめく御旗を手早く把て懷に押入ッゝ、莞爾と笑不敵のありさま唯者とは見にざりけり時に澁右衛門は息吹かへして刀を杖に起上り懷をさぐり見て御旗のなきに仰天下がつくりよわり

て又倒ぬ曲者はうなづきつゝ、澁右衛門をのけさまに蹴かへして彼が刀を拾ひ取と、いへめの刀一に〳〵老鶯の音を止て衣脱蛇の昇天を望むきさしの其骨柄折かゝり撞出す三更の鐘のひゞきともろともに行方もしれずなりにけり偖此遥の里人等澁右衛門が死骸を見つけて騒立たゝちに月影个谷の館に註進ぢければ山吹庄司雪森點檢の役目をかうふり僕夢平に挑灯もたせて此所に來り澁右衛門が不慮の横死を悲しみつゝ、胸に立さる箭を拔取箭の根を見ていぶかり居たる所にはやく人の告けるにや澁右衛門が妻於破矢兒子動之助と、もに夢路をたどるこゝちして走り來つゝなしき骸にとりつきて前後不覺に號哭し現心もなき体なり庄司も共に落涙し和主等の愁傷をぞあやんわたら忠義の武士を可惜可悲といひて去ばし歎に沈しがや、ありてゐひけるゝ世の物に心かけず御旗ばかりを奪去たる曲者はなみ〳〵の盗賊ならず察する所南朝に心をよせる輩ならんといひければ動之助涙をいらひ君父の讐には共に天を戴ずとうけたまはればはやく敵の行方をたづねん旗をとりかへし首とりて亡父の靈に手向たくゐへば此よしを主君にきこえ上給ひて復讐をなん免し給はるやうにとりなしくだされかしと母もろとも頭ひければ庄司いわく父母の讐に居ことと苦に雅于を枕と志不仕といふ語もあれば其ねがひもつともなり早速主君にきこえあげてなん暇をたまはるやうにとりなすべし志さりながら敵は並々の者にはあるまじければ心のろくなれもふとなかれいさゝ立若應はかへりてあやまつことなれはきぞかし倫起鳥に心をつけ力草を放つことなかれ自よくこれを思量せよとこまやかに教訓すれば其なん詞こそ我爲の鎧腹卷擧手腸楯忠といふ字を戟となしたとひ敵鐵城に籠石門に隠るゝとも一念の誠をもつてたづね出し首ひつ提て立歸らんと勢ひこゑていひけるにぞ母もよろこび庄司もうれしみ勇ましゝ〳〵必其猛き心をたのもますなといひつゝ、夢平を顧て目配すれば

夢平い其意を悟り一矢を拔手も見せず動之助に斬つくればこゝろえたりと四寸のびらき下をいふへばひらりと飛て腕首つかみ「コヤッ夢平何するぞ「イヤサ若敵がまづかうせば「まづ此やうにと扇おしらひ夢平が刀をはつしと打落せば庄司は密庵を見すましてかの矢の根を抜とりッ、手裏劍にうちつくればかゝえ草履にて丁とうけとめ「此手の裏では復讐のれん願ひかなふまじきや「ヲ、天晴見事其矢の根こそ敵を探る手がゝりなれそれを證據にたづぬべし親父の死骸は勝手次第にとりおかれよ我は一刻もはやく館に歸りて復讐の願ひを出そつのいすべしといひ殘し夢平を倶して立歸れば母の於破矢も雪森の深き情を感歎玄動之助ともろともにむなしき骸を抱起せば疵口より激る血のにはひ鼻をおそひて腥躬上へ冷て色變諸行無常の青嵐に溢てもろき蔦の花寂滅爲樂の短夜に碎て消し苦の露目もあてられぬ有樣なれば又も嘆に沈しが森の烏飛いたりて鳴聲し曉近くぞなりにける鳴呼此澁右衛門初鷲龍塵兵衛といひし時は貧苦にたへず後に祿を賜りてやうやく心を安んずとゐへども今又此災にか、りて非命に死す正是父五大院左衛門宗繁が梟惡其子に報所なるべし常言に一分の惡をなせば十分の惡報ありとゐへるも宜なり豈恐ざらんや

蟄蝉　枕も床も野宿の妖怪

去程に鴫元動之助は復讐の願かなひて俄に行裝をとゝのへ吉日をゑらび一僕も具せず唯獨みずから包を背ひ鎌倉を發足しれもふ旨やありけん武者修行といひなし越中國を志ろざして出去ぬ偖越中國立山の連山に蛭牙山といふ廣大なる山あり根は地角に盤り頂ゐ天心に接り遠觀ば雲痕を磨斷し近着ば月魄を平呑し深嶺幽谷の裏常に雲霧を籠て晴る時なし山口には鳥獸はれく栖もゑに獵者等もれはしといへども半山より奥ゐ人跡たへて其奥をきはめ知者なかりけり

比しも秋のはじめつかた回國の修行者とおぼしく笈を負錫杖をつき鉦を打ならしてかの蛭牙山の半山にのぼり行暮て宿すべき所なければ野宿すべきかいかにせんとおもひはづらひつゝ彼方此方を見渡すにはるか向ふの茂林の裏に一りの徑路をもとめ萩紫苑女郎花のたぐひの草ぐさもいと高く生のひて露滋裏をおし分ッゝ其處に去て見るにおはれにさみしうあれまどひて八も住ざる古社なり笈をおろして裏に入てまやかに見るに神前とおぼしき處は奥深くえていと暗かはきまへかたし軒端かたふき朽目に苔蒸て垣衣生茂り月も時雨も漏べきさまなり蔀は崩て鳥の巣をいとなむ處となり窓蘢い破れて蛛の糸をむすぶ便となれり床には落葉歟かさね塵うづ高くつもりて獸の足跡おほし高欄端籬みな朽て棘の裏に倒たりめぐりにはいく年をふるともしれぬ松杉のたぐひ深く立繁枝葉茂りて神の上に打おはひ物すさましきいはんかたなし修行者は野宿するにはまえならめとおもひつゝ社の片隅に笈を置袖紙帳を取出えて敷物となし暫らく休息しれるが松吹風谷の水音耳近ひゞきひま〳〵に聞もる鳥の聲のかれ〳〵なるいろ〳〵に鳴虫の哀れなる凄涼寂寞として人めづらしげに豹蚊さへ身うちを螫にぞ目もあいねば睡もつかずしばらくありて向うの方をはるかに見やれば毬はぎなる火の光六ッ七ッ乱飛孤のともす火かとおもふに漸〳〵に近くなるを見れば百姓とおぼしき者大勢明松を前に照し注連をはりたる棺を擔幣帛を持此社をのぞみてすゝみ來つゝものいふを聞けば嗚呼村一番のうつくしき此娘八身御供になるといふはのいゆい事「おいのう年は八ッ親の歎はいかばかりかうまふてくれん神はれさあい娘を食給ふぞ悲き目を見る事よと餘所の哀を咄ッゝ神の前に棺をすゑ其上に幣帛をさし爽み皆〳〵ひれふしぬかづきつゝおん神に告奉るおん望の犧牲をかやうに供じ奉れば田

畑をあらしたまはぬ樣にふぎ奉るといふ間も身の毛そはたちてや、腥き風かふいひさして胸をひやし魂をひやしてつ逃歸る修行者は社の隅に身をひそめて此やうすを見聞しさては此社に變化すみておさなき者をとるとおぼゆ我さいはひに此に宿す變化を退治去て諸人の嘆を救ばやとおもひつゝ錫杖に仕籠たる刀を拔かけてなほうかゝひてぞ居たりける漸時うつゝ夜嵐はげしう吹わたりて颯々と梢をならし青葉を吹落しいとものそゞき時しもあれ奥深神前俄に鳴動して足音ひた〳〵とひゞき翠簾をかなぐる音なゞしてあらはれ出たる變化の姿白き薄衣のやうなる物を頭にのつきて正体い知ざれ共の棺のそば近く歩みより銀の針をうゑなみたるやうなる毛生たる手をさしのべて棺の蓋をめり〳〵と搔破りけるが不思議や棺の裏よりも手を出して變化の手くびをしかと摑忽棺を踏破りて前髪ある若者旅裝束にて包を負白羽の矢を握てあらはれ出たり是則別人にあらず紫元動之助氏邦なり變化は手を振拂ひ動之助を摑殺ん勢ひなり修行者い變化を目がけ錫杖に仕籠たる刀を拔て唯一打と斬つくる變化いはやく身をかはし乏頭をのぞめば身を沈め下を拂へば飛上る動之助い生捕ばやと思ひけるにや空虚をうかゝひ變化の腰に組つきぬ變化い背後に手をまはし動之助が襟首つかみ引のけんとしたる所を修行者が呼と聲かけて打こむ刀變化の腕を斬落せば動之助はさつと退其間に變化はすり抜てかき消やうに失たりけり修行者は暗裏に動之助を變化と思ひ又斬つくれば飛をりて拔合せ丁々發しと斬合しが雨雲の絶間よりもれいづる月のさやけさに互に顔を見合せて「和主はおん身いこいはからず思ひかけずとたがひに懽き刀をひきて鞘におさめ先修行者いひけるい和主い何故に棺に入て此所には來つるぞと問ければ動之助いひけるい其不審い理なり我亡父の仇をたづ

ぬるため武者修行とはひなして當國に到り昨夜此山の麓の村長の家に宿をかりんといひ入しに主人夫婦をいトめ家内の者都嘆き悲み居たるもゑ何事を愁るぞとたづねしに近頃此蛭牙山の木梢の森の古社に邪神すみて月毎に一人ッゝ、れさなき女を人身御供にとる事ありこれを供せざれば村〳〵の田畑をおらし許多の人の難義になるゆゑ止ことを得ずいとしき子をとらる、者數しれず其とらんと思ふ子のある家には軒端に白羽の矢の立事あり是其しるしなり我家にも其矢立しゆゑに今年八ッになる娘を人身御供にそなふるなり其故にかく嘆なりとゝふ其矢は則我掖へたる此矢なり我夫を聞うたがふ處れはけれ此處に昇れ來つるが果て推量にたがはず今れん身はりて此棺の裏に入百　姓　等には娘と思わせの斬落したる變化の腕をよく見給へとゝふにぞ修行者かの腕を取て月の光によく〳〵見れば是眞の腕にあらず手弱なす物に怪き物の爪れそろ玄き物の毛をうゑてつくりたる物なりけり修行者はこれを見又かの矢を見さてい眞の變化にあらす曲者の所爲に疑なし打もらせしこそ殘念なれといへば勳之助いは〳〵にもさなりなゝ〳〵の曲者とはれもいれずかう〳〵なふんと耳語ぬ勳之助は打うなづき路上の說話草裡人ありといへばかゝる山語ば修行者も何にかあらん耳語ぬ勳之助は打うなづき路上の說話草裡人ありといへばかゝる山中とゝもへども容易に密事は語りがたし拙者はこの山輿に分登て樣子をこゝろみんらはん「しからば互に立別　再會　の時はかやう〳〵と修行者又耳語つゝ枯木の枝をひろひ集て明松につくればと勳之助は火燧袋を取出し火を打出して明松に燃し兩人これを分ち取たがひに思ふ旨やありけん勳之助い山輿の方修行者いは麓の方別〳〵に出去ぬかくて勳之助い明松をふり照し才の下露に袖ひちて山深くのほりゆくに徑路盤曲したぐひなれなる險阻なり人跡たえたる深山なれば猶をつたふ山猿岩間にすたく吾鼠も人をあなどる風情なり狼の吼聲にひゝきてすさまじく聞

ゆ山蛭は肉に喰入て鮮血を吸痛に堪ざれば蛭牙山と名づくるも宜也とれもひつゝあやうげなる囮をつたひ苦なめらなる嵓橋を渡などえてもくに峰越の風に明松を吹消れければ岩根はひ出たる所に尻かけてやすらひ居るに松林の裏よりわゝ〳〵しき大男二人歩み出て勳之助に向ひ雷のれちかゝる計りの聲して曰汝は前髮ある弱輩なるが何等の爲に夜中獨此山に登るや此山の半ら上は人の上るべき所にあらざるに見かけに似ず膽ふとき奴かなといふ勳之助此者等を見るに身材高く眼は狼の如く鼻い野猪の如く髭は熊の如くなるが峰芝をもて編たる頭巾をかふり滿辟手をかけ嵓膏の脛巾をもひ山刀の長きを帶一人は戟をよこたに一人は斧を提たりなゝ〳〵の者ならば打懲へきに勳之助は臆したるけしきも見せずかゝる山中を夜に入て獨上ること必得なくてなるべきか汝等もし妨せば我手なみを見すべきぞといふかの者等は呵〳〵と打笑いよ〳〵膽ふとき奴なり汝さばかり手なみあらば我〳〵と勝負を決せよ万に一ッ我輩に勝ことあらむ此山にのぼすべき者なればそは望む所をりいで〳〵勝負を決すべしといひつゝ立上りて身がまへすればの旅をする者なればそは望む所をりいで〳〵勝負を決すべしといひつゝ立上りて身がまへすれば先一人矛をひねりて突かくる心得たりと刀を拔飛上りてれは去を打沈みては丁と斬風にもまる胡蝶の如く雪を持たる柳の技の弱氣に見にて斬つけたり動之助は二人を相手に小太刀のおしらひ刀ずぢを見かねて殘る一人も斧をさゝげて斬つけたり動之助は二人を相手に小太刀のおしらひ牛若丸が鉄馬にて木の葉天狗と戰ふを今見る如き形勢にて勢ます〳〵猛かりければ二人の山人何かは以て敵ずべき高這ゑてぞ逃去ぬ動之助は刀をれさめかの奴原は山賊とをれもれず熊とりの獵者にや何にまれいぶかしき者等なり此山の輿見きは免すはあるべからずと思ひつゝ、滴水を掬して咽をうるほし明松も燒尽したれば月の光に乘じてなほ上りもくにいまだ初秋なれど

深山のゆゑにか冬の時の如く寒風肌をとほして堪がたしかくてもき〳〵て猪のかよふ道たになき所に到りければ蔦葛にとりつき木の根岩角を階に踏からう玄てゆくにやう〳〵一條の路ある所に出たりさて四邊をかへりみるに此所は草木なぞもよのつねならず峙たる岩石なども都て目馴ざる物なり孔雀石緑青石紺青石石英琅玕石牡丹石木賊のたぐひも見ゆ山中に海石のまじれるも一奇事なり蟹石蛤石のたぐひの具石おほく路のかたはらにあり沙は金色なるもあり五色なるもあり方解石ぱ鑒々と玄て餅を刻たるが如く舎利石は皓々として露の滋に似たり殊に怪むべきい野曝の白骨を散しおきたる如く石あり是いわゆる野曝石なるべし是等の玉石奇石玲瓏たる月の光にか、やきければ好景にもいはれず人間を出て仙境に入しかと疑れぬ其外見もれよばす聞も傳へざる奇石おほかれば動之助は奇異のおもひをなししからば四邊をながめてぞ居とりける

宿かして名をなのらする化石の鍋蓋
萬仭の青壁剣を削り千丈の碧潭藍に染り磊々たるひらきつくり懸たる蛭牙山の奥深玉石奇石交てた、む嚴をゆり瑪瑙は猛虎の風を起すが如くかたへは深き谷川にて冰箸とあやまたれ石燕の飛外は鳥もかよはぬ所なれど住ば都とおもふにや篝火とゆふ此家の娘ある玄の留主に唯獨灯火に向ひ居て砧打手のたゆげなり折節來る獵者の畫狐の髭四郎あるじの留主を見こみにて贄子の上にのし上りだみたる聲してていひけるはコレ娘夜なべ仕事とりおきてこちのいふを聞めされあたら花を此樣に深山木にぎて朽さする便なさよ折〳〵來ていふ如くこちの心にしたがはば此山を運て退都の花となながむる氣得心なきかいかにぞと云つ、ひし〳〵と寄そへば突倒玄あなけがらはし母さまの留主といへば來ては嘲り妾をせむるうるささよ母さまに告きこえ辛目を見するぞといふをも聞ず又さしはなほうるさくおもひ攜衣の杵で頭をはしと打退る髯四郎ゐ頭を打れてはら立ッ、手負猪狼のたぐひとこへぞ手捕にする男なれど戀なればこそ猪のやうになはくなれよし〳〵我いふ事をうけひらぬ報にゐ此家のあるじ雲根の老衣のあき仕業を縣司に告きこにやかて憂目を見せべきぞといひつゝ立を引とゞめそれを告てすむべきか「すまぬと思ゐゞうけひきたまへと「いふに娘ゐ口ごもる「こあたはせきていでいかにノ〳〵といはれて娘は胸に釘當座をあざむき母に告いかにもそなたにしたがふべしとにへばこなたは細目になりそれは實かあなうれしと掌を合して拝つ、しからば後刻に此背後の岩陰にしのぶべしよき時分これを吹て相圖とといひつ、鹿笛を取出して娘に與へ灯火消て合點かとむくつけき山人も戀にゐ心をなやましつ先酒買て祝ふべしと穴熊の一番鎗を突とめたるこゝちして獨喜び歸りけり娘ゐあとにゐら立顔にて自頭をさぐりッ、今朝結た大事の蟀髪を此やうにそこねさしたるにくをよとひとりごち再砧を打音聞にければ彼所には動之助しばしやすらひ居たりしが遙まのかならず人家あるふよ火の光ひろめきて砧を打居たをうかゞひ見てけるにす七八ばかりなる美麗娘紅のこぞめの梅の小枝に春霞立山の山の鶯といふ文字を縹に染抜たる木綿の振袖を着さるが帯しどけなくひき結び額髪の顔にこぼれかゝりたるえもいわれず人の斬首を籠にし人の腕を拵たるを杵にして擣衣てぞ居たりけるかく人跡たえたる深山に人家あるすらいぶかしうに世にすぐれて美麗娘唯獨人の腕首を砧にゑて平々たるけし

きこそ怪しけれこれい眞の變化にや何にまれ宿を乞て試べしとおもひ門の戸を打たゝきこれは道を踏迷て難義にれよぶ旅人なり一夜の宿をめぐみ玉へと聲たかやかにいへば娘は砧の手をとゞめいなこゝは人を宿せ家ならず彼處の谷よくだれば麓に到る道ありとく〳〵ゆきゝへといふにぞなほあなかぢに乞ける娘は其いらへもせずこちは情の心をもて此に宿させじと思ふにもーらで死地に入を好命しらずの旅人やと日の裏に暁がその戸に開にければ急ぐあやしみ宿かす事のなりがたくも少刻のあひだ休せてよとてなほいそがはしく戸をたゝけば娘は眼立しげに立上りて歩み出戸を引あけて月わかりに動之助が容を見れば玉をあざむくばかりに美麗若衆なれば忽眷戀の心を起して互に顔突々と跡あからめもせず打まもり居けるがしばしありてゐひけるは主人の留主といひもあわりても宿したくれもひいべるなりいざ玉へとひつ、手を取て内に迎けるにぞ動之助い身上の塵を打拂ひ脛巾をとき草鞋をぬぎなどすれば娘はいそがはしく鏡の水を石の鉢に汲入て足をあらいせ何にかあらん黒き石を圍爐裏に打くべて火を燃し此い深山ゆゑに寒さもいやしいまだ初秋なれど見玉ふとく妾い綿入を着はべりれん身い夏衣なれば寒さに堪玉ふまじいざ火にあたりて身をあたゝめ玉へあら山に踏迷玉ひさぞなわびしうれはされん飢もしたまひつらんなれどか、る石山にて辛菜一房つくり得ざればすゝめ參すべ兎物もなしせめてこれなりとめし玉へと云て折敷のうへに白き糸のやうなる物を盛て出せり動之助はもてなしのあつきを謝し之を食に少し甘味ありて忽飢を忘たりこれは何といふ食物ぞと問げるに娘いはく他物なれば知玉はぬも宜也そは石蕨といひて此あたりの岩窟に生る物にて我〳〵が平日の食なりといふ動之助はこれを聞よく〳〵見れば折敷も石なれば盌も石なれば家内をかへりみるに硎の腕首も石にて火桶灯

籠糸車麻笥鍋釜の蓋擂鉢擂盆切机のたぐひの雑具すべて皆石なり其うちにも石の椀は昔 の一ッ家を思ひ出してれそうしければ轉いふかしみて其もゝを問に娘いはく此處は玉石奇石れはければ奇石が洞とよびいかしこなる谷底に川ありよろづの物を其川水にひたしれけバれのづのら石に化す故に化石谷とあづけ候妾が家の雑具すべて石なるは皆かの谷川にひたして石にせしなりしかすれば万の物かたくなりて破損せざるゆゑなり今爐火に焼たるは石炭なり此灯火は燃石といひてよく燃る石なり明松のかはりもしてふ化石谷といふは此處にてありしかとやうく不審れにけりさて娘い振袖の袂を口にくはへて背後なからによりそひていとい づかしげにひけるはいづれの國にや京の女郎田舎の女郎とかいふ石もあるよし郷の花の京女郎も深山水の田舎女郎も心の實に二ッはあら玄女子の念は岩をもとほし思ふ男をしたふては石にもなるとり岩間にたまる清水にも月影はうつるぞかしと聞はべる日陰の木々はれろかにて石に花咲谷もあとればさずやと心の裏をほのめかし人に馴ねバれをいゆく顔に紅葉の木の葉石磨あれたる水晶に緑をこぼせ額髪くれなゐ匂ふ口紅は沙の中の珊瑚砂顔に袂の隔垣まだ初戀の咲そめぬ苔の花の石梅に色を含てかはゆうし動之助は娘が戀を幸に此家の様子をうかゝいばやと心にうなづき落花に心あれバ流水にも情ありさばかりにれもひたまはる志さら〳〵あだにおもはずと願あふさる糸薄ひとつに落る白露に濡の緒ほころびぬれば娘はうれしさかぎりなく動之助が手を取て一間の裏にともなひ去ぬかくて時刻をや、うつり山風はいと烈くぐ吹渡る此家の主は雲根といへる老女にて雪をあざむく白髪を肩に打亂しいく年ふりし女蘿の古松にか、りし如くにて面は節木のやうにからびたるが石綿といふ物をもて綴たる衣の裾を高くか、げかた手には團

みトかなる弓に獵箭を握りそえかた手にい兎を提老を見せざる健さ谷の險阻をのぼりつゝ家路に歸り門首より娘今もどりぞと娘〳〵とよびければかゝり火は一間の裏を走り出いつよりもれんかへりのはやかりしといへば今夜は山風さはがしきものをに鹿も猪も驚き走りて手にあれず化石谷の谷陰にてやう〳〵此兎一ッとりて歸りぬ酒は晝ほど買てあり是を肴に深酒飲んといひつゝあたりを見まはして脛巾草鞋などのとき捨てあるを見つれ旅人を留むかといへゝ娘ハ莚の水に手を清めつゝさればゝ道を踏迷ひしとてわぶる旅人を宿しはべりとゝふ老女ハうなづきてそはよくせしぞいかなる体の旅人にや我まみえて試べし與の間にをらば此にともなへといふにア娘は心得つといひて一間の裏に入動之助を連て出來りてれゝ妾が母にはべりといへば動之助ハ宿をかりし禮をのべなどするに老女ハ動之助が爲体をつら〳〵見て笑顏をつくりかゝる由深き栖なれば萬事たらぬなれど若旦びき〳〵もれぼさずばゆるやのに旅のつかれを休め給へといと〳〵にゝはへば娘ハ母の詞を幸にのう旅の郎母もしかまうせば十日も廿日も十年も百年も此にれはせかならず見捨て出去給をなといふ詞のゝし〳〵に自然と戀はあられぬ動之助も打とけて母子そろひての厚き情謝ずべき詞もゝはずといへば老女ハは〳〵笑てれん身ハいづくよりいづくへの旅なるや動之助ハいづりていひけるは拙者は原下總の葛飾に住武士の浪人の子なるが繼母に憎まれて追出され立寄べき陰なきもゝ越後の國にある小の所縁を心あてにもく旅なりといふ又老女ハはくそいハたゝしき事なり卒爾なることなれど我此娘見給ふ如く身材高く生立ぬれどいまださたまる婿なければ明日をもしれぬ此老が亡後はゝかに玄て世を過べきと不便に思ふは親のならひ此山住のいぶせさをいとひ給ふ心もなくはれん身を婿にといひさして娘を見れば〳〵り火ハ顏赤くしてはぢらひぬ動之助は老女が詞にしたがひてなは樣子を探り見ゝや思ふ

に予近くよりそはありがたきまでにかたじけなきまれふせなり今きこえやせし如く水鳥の陸に迷足なき蟹の身のうへなれば此家の婿となし給いぐうへなき幸なりいとふにぞ老女は喜び善は急といふ言あれば今夜假に婚姻の盃をさすべきなり娘戸棚の酒もて來よ竈の下を焼つけよ我は兎を料理して肴にすべしといへば娘いそいそとうれしみッ、傍に襷ひき結て母とともに立はたらき石の切机石刀料理終りて石酒壺石の盃とりかえつ松吹風の颯々々を前奏の話に聞なして三々九度もかりそめに婚儀いやがてすみにけり老女は盃喜びて何をかな婿引出にといひつゝあさり見まはして釜の蓋を手に把あげ今からは釜の下の灰までも婿どのにまゐらする証はこれとさし出せば動之助はこれを受ありげな引出物拙者も何がな結納のしるしと思へど憂旅なればもなき玉の器の娘子に似合ぬ拙者ゝ此縅蓋とさし出し互に採る心と心謎ゝとけねどうちとけてこれ娘まだ山住に馴ぬ聟どのかならず夜風をひかさぬやうに心をつけよおくまりたれ機造の亭坐敷は扉風岩にて風をふせげば唆、なるぞかしこへともなへ婿どのゆるゝかよ雛給へといふにぞしかゝばゆるしたまへとて動之助は立上り娘が家内に打連てうしこの一間に入にけりあとさき

朧波のまとひつきたる如くなり娘は聲をふりたて、これ母さま妾がいふこと聞てたべ日來れん身のわしき業此山に迷ひ來る旅人をとゞめおき剛慾をこゝろみて强者は味方につけ弱者は打て捨又剛なれども味方につくをうけひかざれば手下の者にゝひつけて道をさへぎり殺さすゆゑ非命に死す者幾人といふ數しれず其惡報いかならずれん身にかゝるべしと平日に妾が諫れども聞入玉はぬ無得心先刻此髭四郎が妾にたはふれ得心せずは母人のあさき仕業をうつたふるとゝひしゆゑにつゝりてうけひきたる体にもてなしたるを實と思ひしのび來つるを幸に相圖に與し鹿笛を吹おびきよせて彼旅人を入かゝらせおれん身の手にかけさせ玄は訴人の難をのがれんため旅人を逃せしもまつたく色に迷にあらず生をきあわる若人を殺んとのいたはしく二ッにゝ母人に罪つくらすをゝとへばなり此のところと聞且きて其相圖の石をうたず何とぞたすけたまはれと泣〳〵いへば老女は益怒りをなし我心にゝ大望ありて汝等が知事にあらず彼者を逃玄ては我家の樣子他に漏て大望の妨となるなればたすくる事はなりがたし放せ〳〵とわらそふひまに髭四郎起上り痛手に屈せぬ强氣者さては我をしのばせしゝ殺させんためなりしかにくさもにくしいよ、訴人になるべ玄といひつゝ、岩下に飛下る折しも下には血平太泥九郎兩人等しく來かゝりければ老女ゝ上より聲をかけ心變の髭四郎それ打とれと下知すれば二人ゝ心得かけへたちひとして石の刀を拔て軒つゞたるに深手に弱ゝぬ髭四郎同く刀を拔放て二人相手に打合ぬ老女も益氣をいらち取つく娘を突退て磐石を打鳴せば忽四方に吹立る石の螺山響高くひゝき合ていとすさまずく聞えつゝ遠の山間谷間に許多の明松か、やきてつらなる星の如くなり娘は四方を見渡して獨氣をやみ身をもだへつゝ、窠内もまれぬ此山中のゆく通〳〵をふさがれては彼れ方はかならず打れたまふべ玄と歎く涙のひまよりも園をとかせ退かする相圖はかれて聞れきし

と思ひ出して此方にかけ下埋火を外の方に持いでつゝ、曲玉壺にたくはへたる螢砂を掌に握て火桶のうちに打入れは火氣に玄たがひ螢砂空に高くのぼりけるが相圖を合する螺の音もやみ明松の光も漸々に消けるにぞ娘ゝやう〳〵安堵玄て胸撫おろす時しもあれ何なのともしれず巖の陰よりあらはれ出て娘と捕へ口をおさへて小脇に抱行方も玄れずなりにけり老女はこれを露しらず螺の音やみ明松消しをいぶかりッ、なは磐石をつゞけ打に打けるが下の方を見おろせゝ血平太泥九郎の兩人は石の刀髭四郎がはたらくにしたがひてうへよりこれをつかひけるに血平太泥九郎の針石の氣勢にいざなゝれて刀の手の裏狂ふ所を二人の者は得たりとしたゝみかけて斬つけたれば髭四郎ゝつひに打れて死してけり此髭四郎ゝ別人ならず是則前の月餘五郎が住家の竹林にしのびて餘五郎を打んとしたる堂左衛門が僕なり原猟者ふりしゆゑ其後又此業をして雲根の老女が手下となりしが鹿笛の音にあざむかれて殺されしゝ妻戀鹿を數多殺生したる報なるべし○去程に動之助はかゝり火が情によりて危急をまぬかれ包を背負て彼家を逃出明松にかゝよとて娘が與へたる夜光石といふ物ゝ我身の四方五尺ばかりを照し外より見れは光なし扨ふし月雲かくれして暗しといへどもかの石を以て道を照して走りけるにぞ恰白晝をもく如くなり又娘か敎けるには是より東の方遙先に跡二條あり一條を死地と号一條を活道と号碼礀の巖聳たる方は則死地なり是立山の地獄につゞき三稜石といひて劍の山の如き巖あれば行ことあたはず水晶の巖ある方は活道にて則化石谷の上に出心安く麓に至る道ありといひける故敎の如く活道に入て走けるに忽背後の方に磬石の音ひゞくとひとしく四方に螺を吹合せ許多の猟者等明松を振照して走集り動之助をとりかこみ矛斧山刀

のたぐひの得物〳〵を打振てぞ向ひける動之助は止ことを得ず両刀をぬきて左右の手に打振つゝ風の如くに打ならし雲の如くにをへぎらし多勢と相手に戦けるが剣法手練の早業に斬立らる猟者等瓜の如くに砍倒され尭の如くに打割れ死人ぞ算なしといへども猛き動之助も双拳四手に敵しかたくほど〳〵方よりとりかこみてそゝ間もおく戦にぞさしもに危く見えたる処に夜霧深く立籠たる裏に叫子笛の音聞へけるが忽黒き裂束したる武士三人空木を出る荒熊の如き勢して走り出鋭尖そろへて猟者等の群中に斬て入旋風の如くにかけめぐりて戦ければ猟者等は敵する事あたはず蛛の子を散せが如く四角八方へぞ逃散ける三人の武士は道暗ければ長追せず旧所に帰りしに動之助いよ〳〵忿りをなしといひ、彼夜光石を以て三人の面を照玄るに一人は南方十字兵衛が兒子南餘兵衛延る二人は北岩倉の僕露助山吠庄司が僕夢平なればこはれもひかけずといひて益いぶかしみけるに南餘兵衛はひけるゝ拙者が主人山吠庄司君命により此山の麓なる假名寺へ旅宿せり然るにれん身今夜独此山に登給ひ玄と聞傳てあやうく思はれ我輩を召汝等今夜彼山に登動之助若あやうき事あらば救べしと命せられ玄によりて此如といへば動之助は今にはじめぬ庄司が厚意を感激し四人しばらく休息して居たりけるにかの血平太泥九郎の両人石の刀を抜そばめて岩の陰より歩み出動之助と南餘兵衛をだまし討にと斬つけたり此方の二人はそがい玄く身をひねり動之助は血平太が首をいつしと討れとし南餘兵衛は泥九郎を腰車に斬放し両人一度に刀をぬぐひて鞘にれさめけるが南餘兵衛動之助に對てはく主人庄司れん身にまえて密談ありとまうされたれば一旦假名寺へれはして御對面あるべ玄といふ時已に東しらみ山鴉鳴さわぎければ四人ひとしく蹤をさしてぞ下りける

○前に庄司南餘兵衛に對し深山の濕地といへども遠く音を發する叫子笛をつくれ他日れのづからもちうる時あるべしといひしが果して此時用たちぬ

れもしろうて頓てかなしき鵜養の其積礫を翫て玉淵を窺ざる者は未曾龍の蟠所を知ず其弊邑に習て上邦を視ざる者は未英雄の經所を知ずといへる呉都賦をれもへば越の中國蛭牙山の崖を背後になし龜毛川の流にそひ兎角といへる村中に閑作といふ鵜養あり頭に雪は戴と面は朱をそゝぐが如く古來稀なる七十歳の翁と見ゆぬ岩壁作り營業は朝暮に鰐の養に露の命をつなぎ船鵜舟にともす篝火の消なん後の闇路をも更にれもはぬ罪業は日々に深くぞなりぬらん栖のかたへに幾年を經ともしれぬ大木の古松あり空に注連をひきたるは様子ありげに見にけり比しも七月盂蘭盆の時なりしがさすが、菰筵に杉の葉垣茄子の牛に瓜の馬苧殻の箸にもるくが如く掛渡す粟穂稗穂に青飽瓜濁にしまぬ蓮の葉も露の手向と見ゆにけり村中の鵜養等あるしの招に寄つぞひ霊棚の前に圓居して百万遍を繰念珠の手ばきも常に手馴たる鵜繩さばくが如くなりあるじの閑作音頭取渡願以　至心　阪命　阿彌陀佛念佛衆生　接取不捨と鉦打ならす一越調の聲もゆかめる小屏風に押散たる追分繪の鬼の念佛に異ならず老たる若き打交て調子ちがひの六字詰い襖にむせぶ谷川の黄顙魚の聲かとうたがはれ尻聲のなき責念佛は松の嵐に鳴交る秋の蟬かとあやしまる欠まじりに退屈の念佛を奥歯に噛くだけばいづれも御苦勞てれからは順以此功徳平等にあるじぶりすべきといひて鉦打れをめ念珠取れさめて閑作い皆〳〵に打向ひ閤を好が鵜養のならひ月の半は月夜といひ殊盆の中いぞれも〳〵休を幸ひ明の十五日が翼日にわ

たる亡者があるやを今日の逮夜に志の百万遍よようつとめてくだされた心ばかりの遺の飯新酒なとまゐらえてもてなすべしあれ見ゝへ盆中ゝ鵜籠をひらきて鵜等にも樂をさするが罪はろぼしこちらも盆が骨休め跡跨とも寐まるとも心まかせに打くつろぎて語り先せといひつゝ地獄の釜の蓋あけて盛だす遽の飯薄き新酒の徳利酒精進肴とりそへてさし出せば遠慮會釋もなみ居たる鵜養等辞宜挨拶もそこ〳〵に施餓鬼にあひたる亡者の如く或は食或飲咽につかへてむせかへるも鵜養の罪とれもはれぬかくて漸暗うつりて暮影に鴨晩蟬も野邊の鶏に音をもづり芦花の風雪を散し殘筌の光灯を點じて日もそでに暮けれは鵜養等はあくまで食いたく酔つゝ我家〳〵に歸りけりさて此閑作につかふる下男に崩簗の呉呂藏といふものあり此時船に掉さして歸きつ岸の柳に船を繋纜をのたけて裏に入訛聲して最早念佛もすみましたかれん身獨でさぞないそがはゑくありつゝん今夜は空に雨氣がみゆれば船にも苦をかけましたといへば閑作唯々それゝよく氣がついた高燈籠にも火を燃し彼等か飲食に取散したる此器どもゝ取れさめよ鵜にも餌を飼魂棚にも灯明たてよといひつゝ樽を打ふりて五升ありし此酒を滴も殘さず飲をつた寐酒なくては寐つかれぬ何かの用をしまふたら一走買て來よついでに豆腐小半丁線香二抱錢ゝかしこに出去てある我ゝ少刻休息するぞといひ捨て與のはたらき門に立たる高灯籠にも火を點ぜこれであうまゑ用はすむ唯一走りといふた所が酒屋へ一里豆腐屋へ半道菖蒲が池の狼に油斷がならぬと獨言し櫂のさきに樽をくゝりて打かたげ明松をたづさへていそがはしけに出去ぬ夫飛花落葉のはかなさを觀ずれば妻子珍寶何かせん生死長夜の夢の世を覺悟る人なるかまだ年若き修行者の笈を負錫杖をつき打ならす鉦の音いろは松蟲の草葉に鳴が如くにて高灯籠を目當に來り殘筌の二ッ三ッ風に乱れて露深き律の門に

歩よりこれは回國の修行者なるか行暮て難義にれよぶ一夜の宿を御報謝にあづかりたしといひ入たり閑作は一間を出て門の戸をあけ今日しも亡靈を祭る日とゐひ亡ぬる人の逮夜なるに修行者のれはせしこそ幸なれいざこなたへとむかゆればしからばゆるし玉はれとて修行者ゝ裏に入草鞋をとけば閑作は苔井の水を汲とりて足をあらはせ飯米の炊飯を調ずる間回向をたのみゝとていそがゝしく奥に入ぬ修行者は笈をかたよせ魂棚に向ひ居て先ずゑれきたる位牌を見るに延文四年三月十五日討死大佛九郎貞直靈としるしたり修行者はこれを見て或は愁き或は悲むけしきにて落涙袖をしぼりゑが戻ありて懐より香包を取出して香を燒鉦打鳴ゑ南無佛果菩提南無阿彌陀佛あみだ佛となへつゝ回向をしてぞ居たりける時に香氣馥郁として家内に薫じ世常ならぬ香なれば閑作は一間の襖子を細目にあけて香の薫を訝むかる折しも蛭牙山の雲根の老女此門音に來かゝりてこれゝ香氣を不思議に思ひしばし窺居たりゑが何かゝにうなつきて家の背後に免ぐり去修行者は回向を終鉦を打さむれば閑作は一間を出て修行者の側近く寄今をん身の手向玉ひし名香ゝ楊貴妃の身摺といふ香なうずやと問けれは修行者ゝはくいかにも然り彼香をきゝ知たる和主の素姓ゝ何人ぞやと問かへせば閑作いゝく先れん身の素姓をあかされよ其うへにて我素姓をも語るべきといふに修行者威儀をつくろひ我實は相摸次郎時行殿を守育し大佛九郎貞直が一子なりすぎつる延文二年信州苦形落城の刻戰場にて出生したるよし育たる者物語れり父貞直討死とは聞しかど存亡疑しけれは若活ながらへて此世にれはすならばめぐり會ことゝもやとかく修行者に身をやつし諸國を免ぐり尋しが思ひもよらず此家に祭る亡父の位牌さては討死にさはまり玄と思へば力も落果てむなしき位牌を拜事よく〳〵薄き親子の縁亡父を祭る此家のある玄ゝ必所縁の者ならめと思ふにより探んた免に燒たる香は亡父の

遺物此香包を見られよとさし出せば閑作は是を見て打驚きいざ先これへと上坐にうつして両手をつきさてい戦場にて生れ玉ひし若君よな今い何をかつゝむべきかくいふ拙者は紅ん父九郎貞直君に仕へし郎等魚淵剣太とまうす者はからず今夜発ぐりわひ奉るも紅ん父尊靈の導玉ふにうたがひなしれん父君い知長麻川に入水して底の水屑と成玉ふ明い冥日今夜は待夜過し昔をれもひ出すもくちを去やと拳をにぎりていひければ修行者落涙しッゝさしうつむきて詞なし閑作かさねていひけるは壁に耳あり塩に縫究ありとまうせば端近にてはれん物語もなりがた去いざたまへと案内して奥の一間にいざなひぬのくて初更もやゝ過て雨雲の晴間よりもれいづる月影の川波てらす岸づたひに荷をになひて心太を賣商人歩を來つ此家の門邊に荷をおろし心太発せちうしやくも入てゆ心太の曲突をのぞみ玉はゞ見せまうさんと聲たかやかにいひけれい此村の鵜養等寄集心太の曲突とはめづらしき商人いでのぞみて見るべしとて取かこめば商人い嘸しつゝそも我商ふ心太い伊豫の國宇和島の名産なり浅名いあまたあり和名い古留毛波又こゝろていともまうすもをとろてんをよこなまれるなり「盃圖盆のなかばの秋の夜もすがら月にずますや我てゝろていへ」と詠たる歌もはべれば今がもなのの商物にゆぞひや、かにめしゆへ曲突をのぞみ玉はゞいで〳〵見せまうさんといひつゝ或空に高く突あげて血杯に受留或背後さまに突て肩を越させ或突て股をくゞとせ或は突上て落る所を箸をもて挟なぞしゝろ〳〵さま〳〵に曲を盡して見せければ鵜養等は興に入さてもしろき商人かなといひはやして我も〳〵と心太をうち食錢を與へて立去る折しを川風颯と吹て閑作が魂棚の灯明を消す暗まぎれに彼商人四邊を見まはしゝのび入て魂棚にするゐありし位牌を奪ひ懐にれし入つゝ荷をになひて行方もしれずなりにけり時に庭の苔非の裏より大なる蛇蠢出て鵜の鳥の雛をくはへ傍邊の

古松の空に入んとせしが忽地上に撲的れたうちまはり死てけり彼修行者ハ一間の障子を押あけて暫もせず此体と見居たりしがあの空をこそ怪けれと心にれさめて打うなづき松のもとによらんとせしが閑作はいそぎまぢひて走り出むかふにまはりてれしもやしさてこそ偽者觀念せよとよばゝりつゝ一腰を抜放て斬つくれば修行者は錫杖をとりのべて丁と受留又斬つくるを受ながし裏に仕籠し刀を抜て丁々發しと打合ぬかゝりける時崩梁の呉呂藏い買物をとゝのへて家路に皈る其跡より以前の商人抜刀を背後にかくしてねらひより肩尖のゞみて斬つくれば呉呂藏は身をひるがへしてこれを避滔樽を投捨て貝に仕籠し刀を抜拂へば退引は人來往去回の秘術を盡し双方れとらぬ蝸牛の角裏には閑作修行者が互にハけしき刀の音外方には呉呂藏商人が火出るばかりに戰しが何思ひけん呉呂藏は樽の上にかけ上りて川にざんぶと飛入つ抜手をきりて游もく商人い岸つたひに跡をしたひて追去ぬ修行者は閑作が電光石火とひらめかす刀の光に眼くらみ勢猛に氣をのまれ剣法亂れて敵しがたくすでに打るべう見えけるがながるゝ足を踏とめつゝ門に立たる高灯籠の引綱をハつしと斬れば灯籠い地上に落銀河の星か山〳〵につらなる明松旗捺物夜風になびく雲の波陣鉦大鼓鯨波鰐毛川の漲音に響き合ていとすさまじくぞ聞へける閑作は刀を引向ふを吃と見渡してシャものゝ〳〵し兇金皷のひゞき我を打んと鎌倉勢遠巻をとゞめたりたとひ萬騎の敵たりともなでう事のあるべきやあな小黠ャと冷笑油斷を見すまし修行者が又斬つくる刀をハつしと打落し手ばやく側ふ引つけて膝の下に敷たる折しも雜兵許多かけ來り鎗をひねつてつめ寄たり閑作は修行者を摑退庭にをり立身がまへして突來る鎗を左右に握り一ッもぎれば二人一度にひるがへり倒る、上を飛越て又突かくる鎗の血留を握みて瞰やれば鎗の手を放ち四五間飛で大勢の群中に倒れたりなはこりずまに隙間もなく鋭鋒を

そろへて突鎗は篠をつかぬる急雨の如くひらめく光は雷光の山の端めぐる如くなれど是を物の數ともせず飛龍の如くにかけめぐり猛虎の如き勢ひして前後に當り左右を支へ陸離々々と斬拂へば雜兵等は敵しかぬしどろになりて引退く修行者は隙間を見て背後拂にむずと組を腰をひねりて振ほどき襟首摑てうごかさず仁王立に立たる處に弦音高く鳴ひゞきて白羽の箭飛來り閑作が胸板をはつしと射たるがうらをかゝず矢幹くだけて飛散は閑作ゝ呵々と打笑ひ形も見せず遠矢を射たる臭怯者我身は鐵石かゝる弱矢の立べきかと嘲彼方に聲高く

また こんと頭の厘の別路は待間ひさしき名殘なりけり

と思ひもかけず一首の歌を吟ずるにぞさしもの閑作もとろけば又いはく大佛九郎さのみなさはぎそ月影小谷判官の家臣指元勳之助氏邦見參すべきとよばゝりつゝ遙向の木陰よりあらはれ出て歩來る其打裝いかにとなれば綠なす額髮を玉なす顏に颯と振かけ双蝶の金物打たる顱笼を結たれ小櫻威の腹卷に丹地の錦の陣羽織を着下て秋野の摺箔したる白精好の大口はき黃金作の大刀を鴾尻にさげ佩て頻藤の弓を小脇にかいこみ物具の金物を月影に耀し光渡て歩來る其形勢志氣堂々威風凜々たる若武者なり閑作は肩をもすりてほゝそ笑事々しげに名乘し故ゐのなる荒武者か出來とれもひしに手にも足ざる小冠者原討手の大將なんどとはかたれよいたしこゝかのみならず我をさきて大佛九郎と呼かけしは何の狂言貞直殿ゝ知具麻川に入水したるをしらざるや摑殺い安けれども童を相手ゝれとなけなし汝が命を汝に與へてゆるしやるとく〳〵返れと高笑ほざきにはざく不敵の詞動之助は少も臆するけしきなく莞爾と笑入水といふが則偽八を欺死間の計畧今あらはれてくちをしからん先比鎌倉極樂寺の切通に於て我養父指元澁右衛門を遠矢にかけ日月のれん旗を奪取しい汝なると疑なし其證據は是なりとて腹卷の引合より

矢の根をいだして目前にさしつけ此矢の根にればゝあらん養父を射たる此矢の根は他國にまれなる矢石我是を證據に仇をたづね蛭牙山の麓に宿り木枯の森の邪神人身御供をとるしるしに射たる矢なりといふを見れば今我射たる矢にてこれもれなじ石根なればこれぞ仇の手かゝりと思ひ人身供の棺に入かの社に到て試つるに果て眞の變化ならねばいよ〳〵怪くかの山深く登て見るに化石谷に矢石多あり又石の刀を用ると鋭刀に異なうず察る所梓巫となりて月影小谷のれん舘に入龍しも彼奇石が洞に住老女なるべし曾十洲記にいへるとあり西海の流州に毘吾石ありて剣に作に水精の如く玉を割に泥を切が如しと云り又王氷素問を注して云肅愼國の人枯木以つて矢とし責石を矢とし毒を施し人に中ば即死これを石努と号く又膝州に青石を以て刀劍となすと銅鐵のごとしといへり汝これ等にならひ化石谷の矢石に毒を施し澁右衛門を射さるに疑なしと思ひ玄故假名寺を陣所となし兵具をとゝのへ向ふたり養父の敵とねふは私知具麻川に入水といつはり活殘て足利殿を亡し北朝をかたぶけんと味方を集る謀叛の張本大佛九郎貞直とく〳〵本名名告べし君命れもき打手の大將動之助氏邦汝が首を打取て祕陣の高名にすべきなりとするどき詞の舌劍に勇氣烈しき閑作も肝さき突る、如くにて眼血ばしり面色變頭の汗烟の如に立のぼり蓋花の如くなる鬢髭をそらさまにひるがへし牙を噛拳を握鼻をふきいから玄堅庭を踏ならす〳〵我自意と蟠龍に比して泥中に蟄し魚鼈と伍にれなゝうして升天の時至るを待つるに汝等如き小冠者らに見あらいされたるくちをしをよさにてもゝふか玄きは我苦形の戰場にて生子にそにたる香包の裏にしるせし一首の歌汝今吟玄でいゝかなるもゐぞそれ聞んといひければ動之助唯々其不審理なり委語て聞すべしといひて腹卷の引合より位牌を出し我先刻南餘兵衛といふ者を心太賣の商人に身を扮させ奪とらせし此位牌に大佛九郎貞直靈をしるせ玄

是則養父の仇の形代なりかの孺譲が衣をさしたる例にならひ今父の仇を報なりれもひしれやとよべゝよりつゝ太刀をそらりと抜放去て位牌を切割いそがれゝく物具を脱捨て雪の如くなる膚を推肩脱太刀をさかしまに取直て脇腹に突立たり大佛九郎は益いぶかり汝何ゆゑ自殺すると問ければ動之助苦き息をつきて云君恩重もき嚴命なれば默止がたくにれ謀叛の張本を打手の大將二ッにれ產の恩よりなほ深き養父の爲の腹讐公私とわかる忠孝二ッ見のがせ事のあたはざれば死去て親子の名告をせんと其故に此自殺かくいふ拙者れ苦形の戰場にて出生したれん身の實の子なるぞや其證據見給へとて陣羽織をさし覺悟ぞといひければさしもの貞直肝つぶれてぞつかと坐し陣羽織をとり上て好々見るにまがふ方なき雲鶴の錦なればさてい我子にてありしかと猛心もよわりはゝ唯悄然たるばかりなり良ありて修行者に打向ひ先刻汝香包を證據に去て我子なりと名告去が苦形の落城を指折てかぞふれば今年で丁ど十八年汝が年のこ依ほひれ二十を過去と見ゆるゆゑ僞者と推量せ去ど又汝をいつはりて郎等劍太と名告しれ汝をわざむざ人質に取おくの計策なりそを汝は何ものぞと問ければ修行者云汝自我名を位牌に去るーれきたりしれ死間の奇謀を察せしゆゑ動之助が所持去たる香包を假名寺の陣所にて受取かの香を燒て汝がふるまひを試たり我實は山吹庄司が一子山吹餘五郎雪村とゐふ者なり先頃兄山吹窓閑が隱宅に紫の裝束してしのび入朱塗の箱を奪出たる曲者を窓閑からめとりて責問つるに大佛九郎貞直が郎等魚淵劍太といふ者なるが南朝の帝古今傳授の秘書をもとめ給ふにより其秘書のれさめある此箱を奪出しと白狀し其時彼が物語にて動之助が素性をくはしく知つるなり大佛九郎が存亡はいかにぞとなほ責問しが入水に疑なしといひて白狀せず水を以て責れどもなほいはず自舌を喰切て死しつるなり先刻汝が魚

淵劍太と名告しを實とせざるは其ゆゑなり假名寺にてしめ去合せ此家に立し高燈籠と切落を相圖とさだめさてこそかくは、からふたりといひければ貞直いはくしからばいよ〳〵我子ゝ證元滋右衛門に育られしをあやまてり〳〵滋右衛門は元來主君相摸太郎殿を敵の手に渡て打しめたる不忠至極の五大院左衛門が子なるゆゑ一ッには日月の御旗を奪ん爲二ッにはせめて其子を打て相摸太郎殿の讐を報ゝんとそせし事なるか今れもへば恩を讐にて復せしなりかへすゝもあやまてりと嘆息しつゝいひければ動之助はなほ苦げに息をつきされば生子のときより育られ大恩うけたる養父の仇をむくゝんとすれば實父の射返す心で先刻射かけし白羽の矢根をはふきて射かけしい養父の爲にゝ弓を引產の親に對しては引ぬといふ心にて是父子の義を二ッに分てい、からんとは露思はず世界のうちに惡因果を此身一ッに引受てくるしき者は我身なり推量してよ父うへといひつゝそばに這寄てをとす涙は疵口の鮮血と共にほぞばれば烈火の如き貞直も打しほれ又陣羽織を取上て片手には介抱しつゝいひけるは苦形の戰場にて汝が出生せ去ときに此雲鶴の地紋を幸ひ此子の齡千歲の鶴にあやかれとて心に祝せしかひもなく箱を悲む夜の鶴子をれもふて泣爲の証になりし因果さよ生れたる時襁褓にしたる此羽織が今死ぬ時の經帷子となるべしとはいかでのゝれもひはべるべき此錦いかなる者が織なしてかゝる因果を見せけるにやといひて羽織をひしと抱きしめ萬夫不當の勇將も恩愛といふ大敵には背後を見せて泣居たり時に不思議や荒鶴ぞも寵をはなれて軒端し喈を鳴去ッゝ動之介に飛つきゝくるしむれば動之介はあなやとさけび裏わなゝきて悶絶し此世のうちの放目鳥地獄の呵責眼前无慘なりけるありさまなり此時月れふたゝび又雲にかくれて暗かりしが岸に繫し苦船より山吹庄司雪森鎭市野袴陣羽

縲籠手隙楯に身をかため苦かあぐりてあらはれ出がんぞう提灯振照ㇲて門口に歩み寄裏の様子をうかがひぬ貞直は聖靈を送る火の薪にと用意ㇲれきたる麻幹をつかねて火を燃し明松にㇲてふり照ㇲ勘之助が荒鵜どもに責らる。苦痛の体を屹と見て且怪且悲ㇲ涙瀾然腰裝の散かゝりて波の滴に異ならず蛭牙山の雲根の老女いつの間ぞにかゝくれ居けん此折二階の障子をひらきて麁したる姿白髪の頭に髭紐錦の袴緋袴笛をよこたへ吹ならす其音凄風楚雨の如いと〻哀をそえにけり貞直涙を押のごひあなあさましや身の罪業を今ぞ知る懺悔に罪を滅すと聞ば我愛

實や世の中をうㇲと思へば捨べきに其心更に亘川に鵜つかふ事のれもしろさよしめる明松振立て膝の衣の玉たすき韜をひらきて取出す志萬亘巣れろㇲあゝ鵜どもも此川波にさつと放せは面白のありさまや底にも見もる篝火にれぞろ〳〵魚を追まはㇲかづきあげすくひあげみまなく魚をくふときは罪も報も後の世もわすれいて、れもしろや其殺生の罪れもき親の因果が子に報荒鵜の資の不便さよとて明松を投つくれた鵜の鳥どもいはつと退動之助はつく息も絶々にぞなりにける雲根の老女も笛をれさめていそがはし〳〵二階をかけおり勘之助をかき抱き苦形の戦場にてそなたを産たる實の母更級といふは我身なり産と其儘活別れいづくに居やとれもひㇲに逢ば忽死別の歎きよ〳〵薄き親子の縁いかなる者が親となり子だ生ては來つるぞや娘篝火が行方しれざるゆゑもし爰へ來はせぬかと先刻爰へ尋に來て門口に彷徨ㇲが修行者の焼たる香のにおひさに裏口より立入て様子ㇾ殘ず聞とりぬ我子とは認しらず足利方のまゐし者と察せーゆゑ殺さんとまで思ひしㇾ我悪業の報なり不便の者の最期やと歎くもりつゝいひければ手負はやう〳〵起上りさては實の母人か親子ㇾ一世と聞なればよ

く顔見せてたまれとて母の手を握りつめ見わぐる顔大膽強氣の老女なれば旨をもる涙鬼判に露れきあまるでとくなり先刻より門に大佛九郎殿戰場にては互に面を見しらねども名は司雪森とㇾ我事なり陪臣たれども主人の名代もるされよ我苦形を飯陣の折から山風に吹落して我手に入ㇲ密書の一通隠語を以て記せし故事分明ならずといへども當名ㇾ大佛九郎とわれば入水せしㇾ偽ならんと我推量に果てたがそず死間の奇略今あゝはれてさぞくちをーくれぼされんと禮儀正しくいひければ貞直も威儀をつくろひたとひ千騎万騎をもつて攻とも物の數とは思はねども子といふもの、大敵に敗軍したる我なれば今ㇾつゝまずものがたらん我苦形の一戰にた、かひつかれて打死と心をさだめし其折からは相摸次郎時行殿隠語を以て自筆にか、れし奇密の文我臓腹を切て暗に城を落るゆゑ汝も打死するとなかれと記されしもをてはよくはかられしと思ひつゝ、知具麻川に入水と見せて敵を欺きかねて水練に遠せしゆゑ水底をくゞりて逃去ぬと物語れば庄司いいく我とくよりㇲかあらんと察せしなり主君判官梓巫が詞を信じ相摸次郎殿苦形にて實に死亡ありしと思はれしい誤なり時行殿の行方いかにと問けるに貞直は口ごもりていはざりけり時に又陣鉦大鼓を打鳴し彼方の岩陰より二ッ引兩の旗をさつとなびかして月影个谷玉兎之介身上れでそかによろひ露介夢平等兩人に家内させて岩上に出來り聲たかやかにいひけるは九郎貞直よく聞べし我父判官照景此度足利殿にきこえて北朝の帝に奏し奉り南北兩朝御和睦あるべき定り足利殿より吉野の皇居に進奏する御和睦の盟書をまうし受てゝにありそれにつき勅ㇲて時行も助命し給ふなれはつゝまず行方をまうすべしといひければ庄司も其詞の尾につきていでいはれよいで聞んとぞ責たりけ

呑ん内ない甲斐

る時は老女すゝみ出其儀は妾が物語いはんそも相摸次郎殿は箱根水飲川の合戰の後は深山幽谷の裏に蟄しはして鎌倉にい面を見知者なきを幸ひ宮叔に身を扮させ幣又と名のらせわざと妾が洞にある蛇石を大指にはめて諸人を驚き蛇个谷の因果談と呼れ去は妾なり其到笹右衞門殿袴田紺九郎等を味方につけしが彼等れもんはかり後害事あらはれ出走して其後誅せられたるよし鎌倉の風聞にこれを聞は又都にあり去時五條殿の阿曾比吾妻が所持したる龍蝶の笛なるは其笛なりといふにぞ餘五郎はこれを聞者女をよく〳〵見るに見知あればさては其時渡にやとはれたる老女はれん身にてありしとは思へば老女は打うなづきつゝ又いはくげにもづらしき對面なり其後妾太郎の邪女とを告てふたゝび鎌倉にありしとき月影个谷判官の息女病にかゝりやまひ時行殿宮叔に扮して偽て岡にに出せしも妾女の眸をさゝ月影个谷の館に入龍蝶の弓を職る器の裏に火氣を仕掛化石谷に生しる鰹石といふ奇石を暗に洗米に交て時殺し火氣にしたがひ蛭の蟲やうに見ゆるを洗米真に蛭に化したりと思はせて拾きしも日月の御旗を鶴个岡の神庫より出さしむへき計略なり又我〳〵夫婦一ッ所に住ざるは人の疑をいとふゆゑなう妾は蛭牙山に別居去味方の者を獵者にして山中にすまはせ彼等にいひふらさせて木苗の森の邪神といつはり白羽の矢をしるしにして八身御供を取しは其子を遠國に賣渡して軍用金を貯ぬ獸の皮に化石谷の天狗の瓜石といふものを植てこれを妾が手にれほひ眞の變化と思はせたり或は奇石洞化石谷の玉石藥石を取出して黄金に替ぬ又舘に用ひたる石の腕首は原化石谷に葬たる五大院左衛門が死骸の石に化したるなり彼か遺骨をはづかしめ相摸太郎殿の恨をはらさん爲に舘に

して常に打ぬ今思へば八身御供といつはりて人の子を奪たる我惡報忽我子の身に報か、る憂目の罪科を滅せんための懺悔ばなし此家の下人崩纔の呉呂藏といふは則宮叔の幣又にて實は相摸次郎時行殿にいなりいよ〳〵助命給はれかし妾は過りる元弘三年鎌倉にて打死したる長崎勘解由左衛門尉綱基が妹なり素姓を語るもはづかしやといひければ庄司いはくされば汝にまれなる膽氣の烈しされん身等夫婦いなみ〳〵ならぬ人なるに忠義にい似たれども善をもつて行とせざる事惜むべし殘念さよ崩纔の呉呂藏といふは時行殿に疑なしと我推量に露たがはず助命の儀は氣づかひあるなとのべければ老女いよ〳〵それ聞ばもはや此世に望なし我子と共に死出三途の旅立せん去なから娘かへり火にあはで突立れば眞直も居直て今妻の語し如く夫婦こゝろを盡しさま〳〵の罪をつくりて貯たる軍用金はまさかの時の鎧腹卷これ見られよと諸肩脫ば肌着にひとし許多黄金を縫つけて鴉の羽をかさねし如くなる動之助の扇たる笹竿のくだけ散しもことをわりなり眞直又いひけるは兩親のれん和睦さだまるうへに時行殿の助命あれいれぬい不思議なり親の死日にあはざるい宿世なるかを察しまゐらせ候と泣しかば妾も心をとりなはし大音あげて名乘ける桓武天皇第五の皇子高原親王の三代の孫平將軍貞盛より十三代相摸入道高時の御内に鬼神とよばれたる大佛九郎貞直を清元動之助氏邦初陣に打とつたり手柄を見よや聞よやと白よばゝりつゝ肌着をくつろげ刀を腹に突ければ山吹庄司立寄て天晴由々敵打死ぞやと賞美して餘五郎に打向ひ汝が養し人質いもはや用なし父母の死目にせめてあはしめよといへば餘五郎必得て笈の扉をひらくをまそしと其裏よりまろび出去は則是かゝり火なり父に取つき母に取つき動之介に取つきてかなたこなたと迷ひつゝ聲ふりたて、泣さけびがば

と伏て身をもだに現心もなかりしが良あり て起上り動之介かたつさへ來たる石の矢の根をと るても見せず 吭に突立んとしたるを老女更級い りわれ〳〵が亡後の追善供養香花をも手向てくれ しき事をうけたまはれい動之介殿といふは妾か兄にてわはすよしそれとはしらずはずかしなか ら戀の霊神を身に負て石の枕に假寐せしは此世かゝる畜生道などてなかゝへ居らるべきといひつゝ、又打伏て泣沈めば貞直いかく其儀ならばくるしからず汝は原我實子にあらず十四年前我錄倉をうのゝんためしのびて立越る道武藏の龍手差原にて六歳四歳ばかりの兒を喰んとするを見つけて鷲を殺し其兒をたすけ取て立皈り育上しい即汝なりさるもゑに動之介とは兄弟ならずと物かたる庄司いこれを聞とひしく其兒の高頬に黒痣はなかりしかといそがはゑく問けれは貞直いはくそれを和主はいかにしてしりけるぞいかにも高頬に黒痣今ありそれ見られよと突やれば庄司はつく〳〵打まもりさてい我子の小雪にうたがひなしと喜びつゝ甘繩の神事のかへるさ鷲にさらはれたるとをわらまし物語それに居る餘五郎といふは汝が兄なりとゝへばかゝり火いさては妾が實の父實の兄にてわはすかとて庄司餘五郎に打向ひ喜ぶも又涙なり貞直夫婦い痛手に屈せず我〳〵夫婦死したるわとへ謀叛人の娘と八に指さゝれ路頭に袖をひろげても情をかくる人もなく憂目を見んをなげかはしくれもひしにはからず實父にめぐり會手渡すれいわれ〳〵が冥途までの忘念なしよろこはしやと夫婦の者かはる〳〵にいひけれい庄司は刀をすらりと抜かゝり火が緑の髪を切取て今より汝尼となりよ動之助夫婦は二世といふなれば後の世は此娘を汝が妻になしくれよ此切髪い婿引出冥途の土産に持去と落涙ぢつゝ、手に渡せば動之助いれし戴唯掌を合すばかりなり貞直は莞爾と笑ひあ

なうれしやよろこばゝや我も又納采のしるしとして娘にあたふる物ありとて左の小脇に突立たる刀に手をかけ右の傍腹まで切目長く掻破て中なる腸を手繰出ゝ傍邊の松の空に投入たるに忽枝葉動搖し血しほの穢を忌はるにや空の中より風を生じ白木の箱を吹上たり餘五郎手ばやくこれをとりてひらき見るに是則日月のれん旗なれば其まゝ、玉兎之助に奉る玉兎之助はこれを取てうや〳〵しく押戴兩朝のれん和睦すむまでは此れん旗いれのれしばらくあづかるべしとて取れさめけるとき再又陣鉦大鼓を乱調に打ならす折しも烈き川風に一間の障子を吹倒せば迫に見渡す龜毛川四方の山ふは旗捺物陸にはく火の光南餘兵衛が下知にゑたがひ鵜養やも數多の船を取かこめば呉呂瀬い相摸次郎時行と本名を名告つゝ、阿修羅王のあれたらんもかくやとれもふ勢にて寄來る鵜養を手玉にとり投こむ水音水煙れめきさけびてさま〴〵かりける光景なり貞直夫婦はこれを見て助ひけるはかならず疑ゑなかれ諸軍をもちひず鵜養どもに戰すい足利殿のきこにいかり助命いすこしもいつわりならずいで我自立越て時行殿に對面し和睦助命の盟書を渡して戰をやめさすべしといへば側につきそふ露介夢平心得て馬引寄れば玉兎之介ゆらりと乗一鞭あてんとしたりしが動之介が死別をかなしとしばゑたもたふ唐綾の鎧の袖にれちかゝる涙をれさへ露介夢平いづれも續と下知しつゝ、山を巡て走去ぬ程なく彼方に揚貝を吹立るとひとしく陸の明松船の篝火一度に消て忽暗夜の如くになり戰聲々已に止て唯松風と川波の漲る音のみ殘けり貞直夫婦は安堵の体庄司は夫婦に打むかひれん身等の集し金は鎌倉葛西谷の東勝寺に寄附なして相模入道殿一門の菩提をとふべき料ぞなし又人身御供ぞいつはりて集たる子ども等のもくへをた

づね身をあがなひて其親〳〵にかへしつかはすべし又高徳の僧をゑらび化石谷の小石をとりたといふ宗旨はちがふとも利益ふかき法華經の題目を一石に一字づゝ書しるして此川に沈めん身等親子三人の佛果菩提のためにすべしと誓し言は經石とも鵜養石とも云傳て末の世までも殘けり夫婦は益感激し今は、やとて吮かき切て伏ければ動之介もともに吮をかき切て夫婦親子三人が一度に息を引汐に水のあはれを殘さけりかゝり火獨生殘る嘆は筆に盡されず貞直行年七十歳更級行年七十歳動之介行年十八歳とぞ聞にける時も時なる魂棚の瓜や茄子を其儘に手向にするや鬼毛川西方淨土へおくり火の鵜舟を弘誓の船となし稻葉の露に浮雲も法華の法のたすけ船一葉の秋と散て行鳴音かなしき竈馬の毬題田の功力にて實相の風吹て眞如の月の出ぬれば山咲庄司は餘五郎に親子三人の亡骸の葬を懇に命じッ、娘もしばし此家にて佛事供養を營べしといふ折しも南餘兵衛走來り相撲次郎時行嫂和睦の盟書を内見あり情にはむかふ劍しなとて戰を止玉兎君と、もに假名寺の陣所へ打越れしといへば庄司これを聞しからば我も急ぐべしとて餘兵衛を具し嘆を跡に殘しッ、假名寺をさして出去ぬ

右に記し殘せし事あり苦形の戰の時魚淵劍太主人大佛九郎の生子をあづかり山越に落行しが鎌倉勢に取かこまれてせん方なく生子を山神の社の裏に隠し置身がるになりて戰し遂に討死しぬ

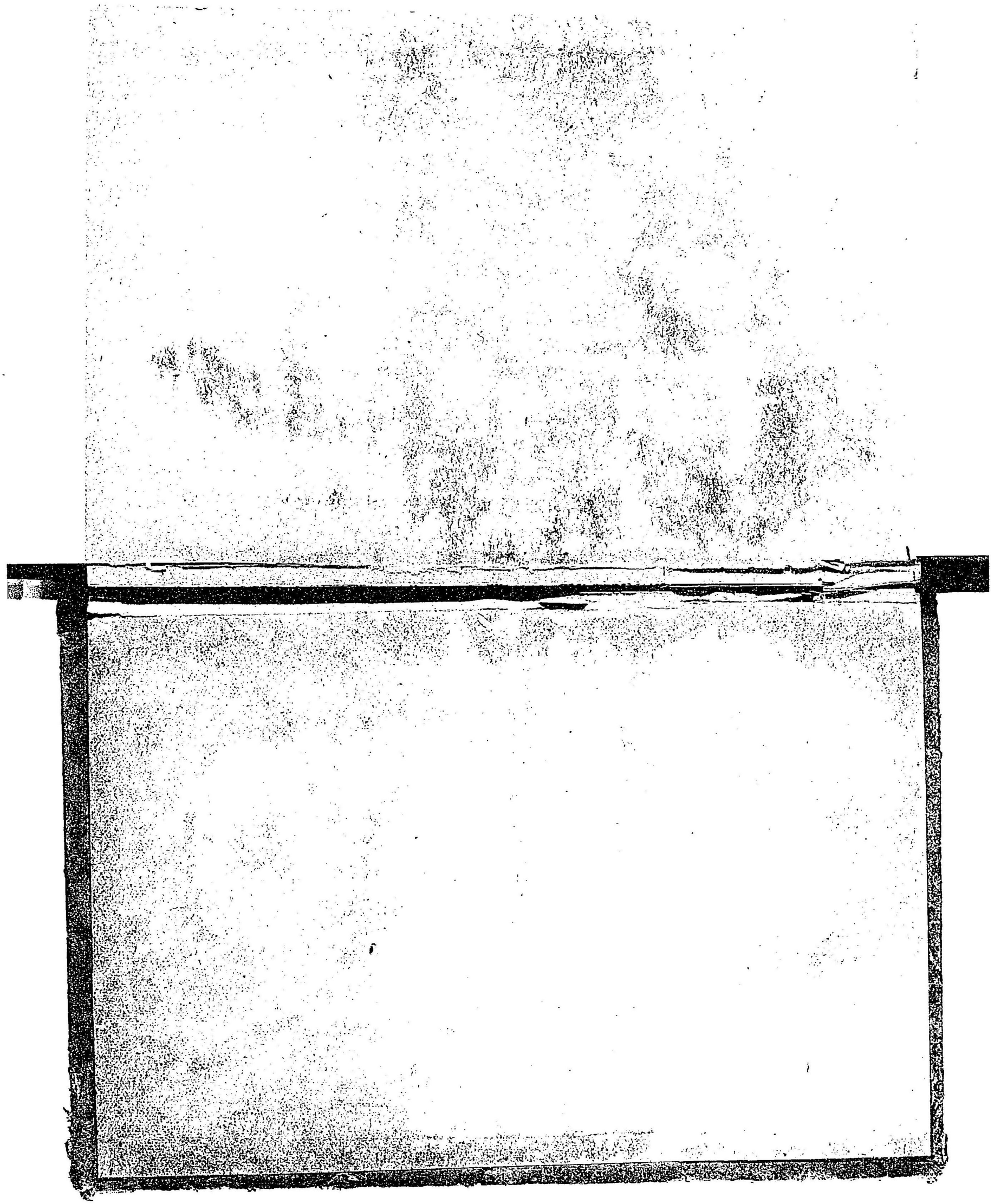
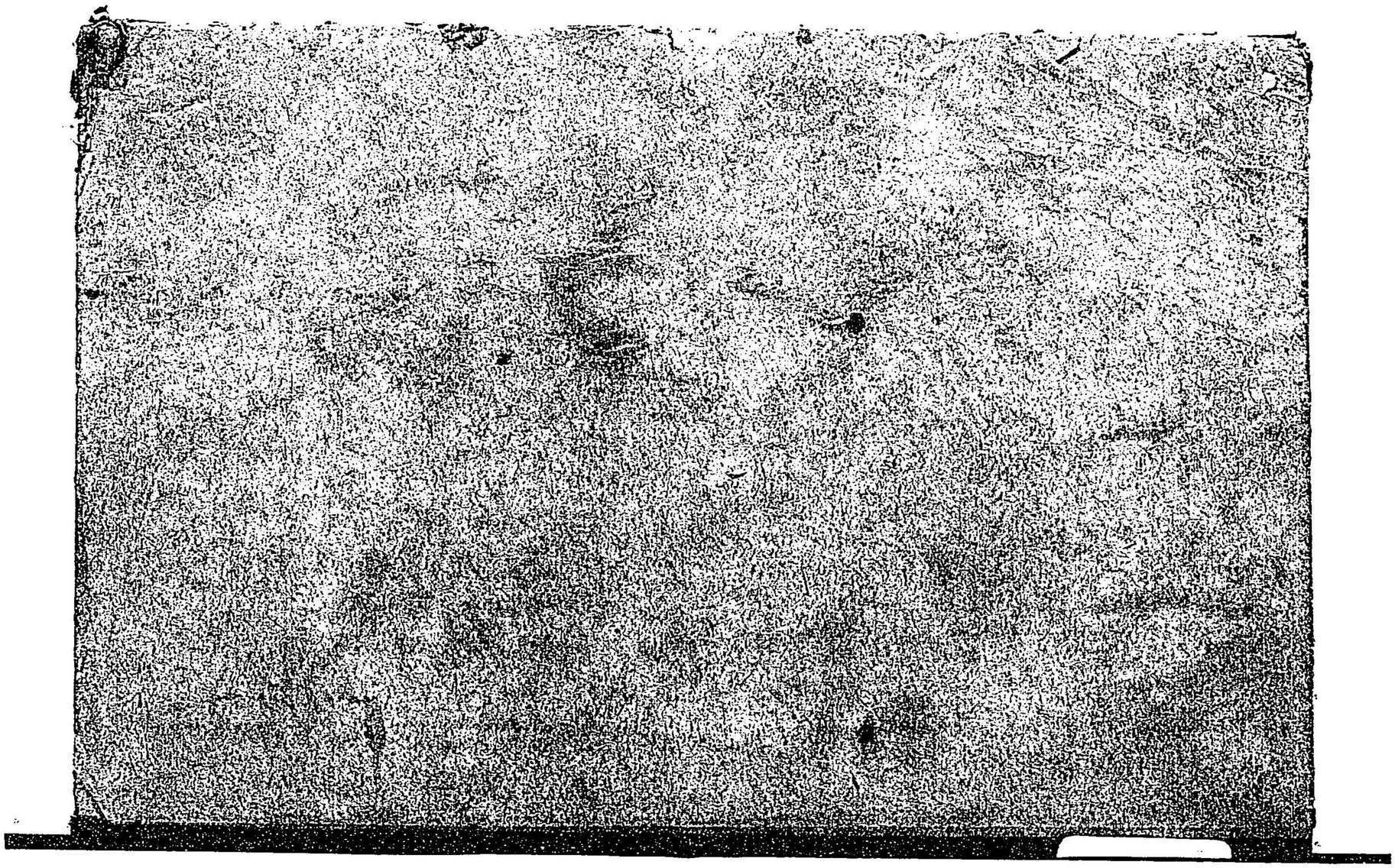
が背元滋右衛門駕龍の麾兵衛とゐひし時其社の前を過生子の泣聲を聞つけて捨子なりと思ひ陣羽織にッゝみ香包をそへたるを見てなみ〳〵の人の子にあらざるを知不便に思ひひろひとりてかへりぬ劍太は鎌倉勢を追はらひて舊所に歸り社の裏を見るに生子なかりけれぱ大にくやしみすでに自殺せんとしたるが主人の妻更級の行方をたづぬるために生ながらへ、其後山咲窓閑が家にしのびいて誦れたる時物語れる事と滋右衛門がのねて動之介に語りおきける事と符合するを以て動之介は苦形の戰場にて生れたる大佛九郎が子なりといふことあきらかに知けるなり此子細を前回にしるす玄入んはくだ〳〵しければ此に別記えて看官の疑を解のミ

鶴をりて日こそおはさに和睦の去程に相撲次郎時行い和睦の盟書を携て吉野の皇居に到り是を進奏しけるに南朝の帝叡慮をよろこばし給ひ已に南北兩朝御和睦と、のひければ時行今い望たれりとて剃髪し佛門に入日月のおん旗は舊の如く鶴ケ岡の神庫におさむ苦形の合戰より大佛九郎の亡しまで郷月影ケ判官父子の武客によれりとて父子はもと位階昇進ありこれによりて玉兎之介前の不行跡を悔おもひて文武をいげむの外他事なし妹姫い病全快して梅ケ谷郡領の嫡子に嫁玄両家むつみ深玄又山咲庄司が忠義軍功拔群なりとて加増をたまわりければ兒子餘吾郎を歸參させあらためて吾妻と婚姻を取むすびぬ庄司が妻淀瀬が喜びいひつくすべからず南餘兵衛をも歸參させ亡父南方十字兵衛が祿に加増して與へければ益母に孝を盡し窓太郎を養育し朝烏の刀を家寶とし孝子の美名世に高く聞へぬ背元滋右衛門が妻於破矢れ剃髪して尼となり簿火の尼と共に鎌倉霞が澤の月輪寺の境内に庵をむすびて住大佛九郎夫婦おより滋右衛門動之介堂左衛門等が菩提をとふ五大院左衛門が五輪の塔も月輪寺にうつし建共下に彼石の腕首を埋てしるしとす放駒の小柄の小刀も同寺に寄附しけるとなん又大佛九郎夫婦が葬に寄附し濡髪の名笛揚貴妃の身すりの名香のなごりも同寺にとゞめて寺寶とぞ傳ふ僕介い武士に取立られて餘吾郎に仕へ妻於鍋と共に益忠勤をはげみぬ僕夢平も武士になりて庄司に仕ふ玉兎之介は衆僧に供養して白拈子郷動之介等兩人の菩提の爲とす餘五郎は紀州高野山に祠堂金二

百兩をおさめ祖父の靈を祭て前の罪をあがなひ又十字兵衛が靈を祭ると悪なり蛙鳴丸の刀を家寶としかの竹の刀は一生守刀にして自短氣をつゝみぬ山吹窓閑は古今傳授の秘書を南朝の帝に奉り玉兎之劍より扶持を受て隱者となり狂言綺語を翻して讃佛乘の西土法輪の緣とし て白拍子都が菩提をとふ真厚し其名い後世に朽ず瓶子花の句夏の澤水の句人口に膾炙して今の世までもいひつたふそも明なるところには王法あり暗き所には天罰あり隱惡といへども必報あり惡人一旦盛なるも餘殃の風にくじけて其枝葉を枯玄善人一旦衰たるも餘慶の春にあひて再花咲時にあへり皆是天理のしからしむる所なりされば淨世の興亡榮枯人生の禍福吉凶一部の小說に異あるをなし其卷末を見ざれば曉し得をあたはず豈悟ざらめや

吾妻餘五郎雙蝶記大尾

明治廿七年二月三日印刷
同　年同月　日發行

東京市神田區龍閑町八番地
印刷者　村田淺太郎

神田區柳原河岸第十一號地
發行者　龍章堂　大場沃美